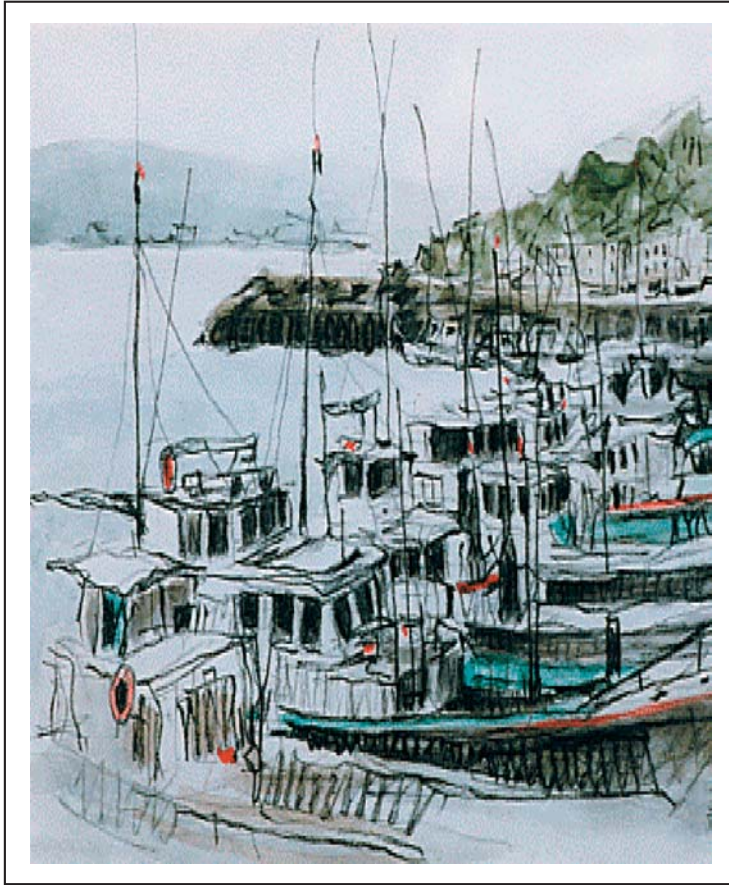


悠 遊 第十一号

悠

遊

第十一号



企業OBペンクラブ

平成十六年三月十七日

表紙の絵 真鶴半島福浦港の舟

J R東海道本線の真鶴駅を降りると、鶴が羽を広げた格好の真鶴半島である。半島には真鶴港と福浦港の二つの漁港があり、いずれも、駅から徒歩二、三十分で行ける。

真鶴港は観光地として有名で訪れる人も多いが、赤い灯台の絵で知られている中川一政が愛した福浦港に行く観光客は少ない。福浦港へは釣り人やスキューバ・ダイバーたちが行く。絵を描いていると「先生はここで描いていたよ」と老人が来て教えてくれた。誰もが中川一政を慕って描きに来ると信じているらしい。

明日の漁を待つ舟が舳^{もや}つている様は、壮観でもあるし、美しい。それぞれの舟が似ているようでも個性を持っている。違うリズムで波間に漂う様を描こうとすればするほど、捕ま

えどころに困り、受けた感動を表すすべに窮する。
直ぐ漁に出掛けられそうな舟もあるが、疲れて所在なげに見える汚れたものもある。明日の朝はどれが先に出掛け、どの舟が大漁に恵まれるのであろうか。

そんな思いを振りきり、ある瞬間の全体的相関を感動として目に残し、感動の消えない間に手早く描こうとするが、なかなか思うようにいかない。難しいだけに面白く、何度挑戦しても飽きない。

(杉山修一記)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第十一号

二〇〇四年三月十七日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 北田 純一

印刷所 株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一―一―

TEL 〇三―三三二―五一八〇

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三―二二(〒二二七―〇〇六四)

TEL 〇四五―九八一―六〇三四

口座 みずほ銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ

(普通 1633830)

頒価 一、〇〇〇円

企業OBペンクラブ同人誌

《創立十五周年記念号》



▲盃を傾けながら1年間の活動を振り返った懇親会（新日鐵代々木研修センター・03年12月17日）

▶15年間に刊行された単行本



▼あいさつする北田会長



▲新顔の理事三人に期待
（04年3月理事会）



▲中村IT担当 松谷運営委員長 平尾事務局長

◀ 15年間を振り返った記念座談会
(03年12月6日・日本記者クラブ)



▶ 春色の表参道の吟行

(左から) 石川さん、関谷さん、
平間先生と右端は岸本さん(03年3月6日)



◀ 都立神代植物公園の観桜会

(左から) 三宅、黒崎、児玉、岩崎、
今川、杉山、村田、中村(将)のみなさん
(03年4月)



巻頭の辞

会長 北田 純一

あつという間に十五年が過ぎました。あの時は、あまりにも国際音痴の日本人に危機感を覚え、なんとしてもわれわれ企業OBが立ち上がり、豊富な経験を基に警鐘を乱打しなければならぬだろうと、十数名で企業OBペンクラブを立ち上げたのでした。

そんなわけで、最初はほとんど全員が商社OBでした。それから海外に強いメーカーさん、銀行、航空会社、海運会社、マスコミなどからも賛同者があつまり、会員数も百名近くに膨れ上がりました。出版した本も十数冊、雑誌や新聞への連載、各地での講演など、活発に活動を展開するようになりました。

ところが、ベルリンの壁が崩壊し、バブルが終焉して不況風が吹き、他方、インターネットの普及など、われわれをめぐる環境は目まぐるしく変わりました。わたしたち企業OBペンクラブも、将来への布石を考えざるを

得ないようになりました。

しかし、ブロードバンド時代の今日、何をするにしてもIT技術が不可欠です。せめて会員の半数ぐらいはパソコンを扱えるようにならないと、将来展望を持てません。平均年齢七十歳を超える当クラブのIT化はたいへんでした。ですが、会員各位の努力のおかげで、五年かかりましたが、目標はほぼ達成されました。

いよいよ打って出るときを迎えました。具体的にどうするかは今後の問題ですが、スタッフは揃いました。IT技術を駆使して、全国組織、いや海外をも巻き込み、サイバー会員を数千人、数万人に増やし、自前で情報を得て自前で供給できる、そんなシステムを打ち立てたいものです。自前の事務所を構え、専従員を雇って、一丁前のNPOに仕立て上げたい、そうなれば会費も安くできるだろうし、女性会員も勧誘し易くなるでしょう。結果的に、われわれの老人文化が、日本のみならず広く世界に安らぎを発信し、世界平和に貢献できるようになると思います。

目次

Ⅱ特集・企業OBペンクラブ創立十五周年Ⅱ

◇巻頭の辞……………	北田 純一	5
◇広がるOBペンの場（記念座談会）……………		10
石川正達、遠藤俊也、上澤準一、北田純一		
小林正憲、西川知世、森田茂、八木大介		
◇私とペンクラブ……………	中川路 明	20
◇会社人間との決別……………	大野 晃	22

Ⅱ自由テーマⅡ

◇生きる意味を考える……………	岩崎洋一郎	34
◇ウエストン胸像の行方……………	上原 利夫	36
◇左耳が右耳の衰えを補う……………	榎本喜三郎	38
◇室戸岬……………	遠藤 俊也	40
◇古い雑観……………	大島 義	42
◇いつかきた道……………	大泉 潤	44
◇四十年前の東海道新幹線（その一）……………	大塚 滋	47
◇JSP（降伏日本軍人）を追求して……………	大庭 定男	50
◇自衛隊のイラク派遣に思うこと……………	岡 政昭	52
◇無宗教……………	折戸 常司	54
◇猫の恋……………	岸本 義生	56
◇健康年齢……………	北田 純一	58
◇錯覚……………	金京 法一	60
◇若返り術……………	黒崎 昭二	62
◇情報通信の国際競争力……………	許斐 義信	64
◇旅とロングステイ……………	荘司 忠志	66
◇出会いを大切に……………	杉浦 右蔵	68

◇新春浅草歌舞伎……………	関谷 裕彦	70
◇一周と十四年……………	多田 修	72
◇第二次大戦終了後の降伏日本人……………	玉山 和夫	74
◇贈り物 その単純にして複雑なもの……………	都甲 昌利	76
◇特例運賃活用のお楽しみ……………	中洲 靖雄	78
◇神々は過てり お年寄りのための童話―その二…	新山章一郎	80
◇湖畔のダラットに遊ぶ……………	古川さちお	83
◇深夜の落下……………	中村 爽	86
◇力行人生訓……………	中村 將陸	88
◇隠居のつぶやき……………	西川 武彦	90
◇駆け出しの「自由人」……………	野瀬 隆平	92
◇横浜黒船研究会のことども……………	羽田 壽夫	94
◇映像翻訳雑感……………	平尾 富男	96
◇理解が生む新世界……………	藤岡 豊	98
◇母の介護……………	松浦 武弘	100
◇ニコラ・テスラの波紋……………	松谷 隆	102
◇紀年法に想う……………	水谷 汎	104

◇育苗と育児……………	村田孝四郎	106
◇彼のライフワーク……………	森田 茂	108
◇中国、二〇〇三年……………	吉畠 清己	110
◇歴史は繰り返さないで……………	石川 正達	112
◇不可解な安全確認……………	小島 博志	114
◇ペン俳句の一年、これよりの一年について…	平間真木子	116
◇企業OB川柳の四カ月……………	小林 正憲	122
◇野村嘉彦さんを偲ぶ		
信念と先見性の人（追悼）……………	大庭 定男	126
穏やかで優しいお人柄（追悼）……………	榎本喜三郎	127
◇企業OBペンクラブのあゆみ（年表・年史）……………	中村 爽	129
◇執筆者名簿……………		136
◇編集後記、事務局から……………		138
表紙の絵 カットⅡ杉山 修一		
写真提供Ⅱアジア調査会、杉浦石蔵、中村將陸、		
石川正達、小島博志		

企業OBペンクラブ創立十五周年



流れる水

広がるOBペンの場

創立十五周年記念座談会

出席者

(五十音順、敬称略)

石川正達
遠藤俊也
上澤準一
北田純一 (会長)
小林正憲
西川知世 (元事務局員)
森田 茂
八木大介 (紙上参加)

2003年12月6日・日本記者クラブ

石川 (司会) 企業OBペンクラブは

一九八九年十一月二十二日に創立されて、ことし秋には十五周年を迎えます。長い間ご苦勞願った皆さまのお話をお伺いし、今後の方向も探ってみたいと思い、座談会を企画しました。人の移り変わりも多く、人間模様を織り交ぜながら話していただければ幸いです。まず北田会長からどうぞ。

北田 よく続いたものですね、十五年も。きょうは初代会長の八木さんが出席できないのが残念ですが、創立当初の経緯をEメールでもらっておりますので、私が八木さんに代わり適当なところで八木発言を披露します。

八木さんは座談会の話聞いて、「ぜひ出たい、タクシ―に乗ってでも行くつもりだ」と張り切っておられたのですが、なにしろ脳梗塞の後遺症で歩くのがままなりません。

創立当初からの会員で、現在も在籍しているのは、八木さんと私、それにきょう出席の小林さんの三人だけです。すね。

八木 この会は、私が平成元年夏の参議院選挙に落ちて後始末をしていたころ、三井物産OBの矢野成典氏から電話があって、商社OBで作家活動をしている人を集めて会をつくりたいがどうか、という相談がきっかけでした。参議院時代から応援してもらっていた矢野さんの

依頼でもあり、同じ参議院議員事務所を仕切ってもらっていた北田君に話を持ち込んだが生憎、持病の心臓病を悪化させていた。そこで旧制三高以来の同級生で、三菱商事を定年になり菱信リースに転籍が決まっていた木村



(手前から) 小林、森田、北田、石川のみなさん

親君と一緒にやってくれるよう頼みました。木村君の世話で、丸の内の千代田ビルにある養和会の会議室を借りることができ、十一月二十二日の初会合にこぎつけたわけです。

集まったのは三井物産、三菱商事、住友商事などの十七人(うち二人欠席)だったと思う。私が世話人代表に、世話人には物産から矢野さんと白川澄嘉さん、住商の河村幸一郎さん、シェル石油の宮坂義一さん、丸紅の坂元宇一郎さんが選ばれ、事務局長は木村君にお願いしました。

北田 最初八木さんから、この話があったとき「どうせ長続きしないだろうから止めておいたら」と反対したんです。ところが皮肉なもので、木村さんが鼻のがんにおかされて入院され、事務局長の役が私のところに回ってきた。平成二年九月の月例会で本人欠席のまま選ばれ、八木さんはじめ三高の先輩に押し付けられて、一番若かった私が引き受けざるを得なかったのです。

八木 木村君を亡くしたときは扇の要を失って、クラブはバラバラになり、まさに崩壊の危機に見舞われました。でも世の中、捨てる神もあれば救う神もあるものです。このころ北田君の病状がよくなったと聞いて連絡をとってみると、「あまり激務はやれないが、文章ぐらいは書ける」という。早速、引き受けてもらいました。

北田 小林さんは八木さんの議員後援団体からの付き合いですが、上澤さんは翌年三月からの入会ですね。

上澤 このクラブに参加してよかったと思います。京都大学ラグビー部の方が多く活躍しておられ、当初は京大ラグビーなんかと、たかを括っていたのですが、認識を改めました。皆さん、さりげなく個性を発揮されるんですね。なかなかです。京都は昔の都だくらいに思っていたのですが、行ってみて文化の差を痛感しました。このクラブにいることをひそかに感謝しています。

北田 九一年三月に森田さん、翌四月には石川さんが入っておられます。遠藤さんは私が手紙を書いて勧誘したと思います。入会は六月になっていますね。

石川 私は八木さんから声を掛けられ、「皆の書く文章を見てやってくれないかね」と誘われました。商社の方々とわれわれのような新聞記者出身では筋が違うので、迷いました。でも入ってみると結構楽しく、八木さんと一緒に出版社をまわりましたよ。

森田 入会するまでに私はすでに本を二冊書いていたので、クラブでも通用すると思っていましたが、八木さんから「お前、それは原稿ではなく作文だよ」といわれました。石川さんらに勉強させてもらい、たいへんブラスになったと思います。

遠藤 北田さんが三菱商事の機械部門に在職中から付

き合っていました。その薦めだったので、文章作りを勉強できる良い機会だと思い、入りました。

光栄ある出版第一号

北田 筆に自信のある人が集まったといっても、素人ばかり。なかにはテニヲハの分からない人もいて、素人の書きなぐり原稿を一冊の本にまとめるプロジェクト・マネジャーの苦労は大変でした。「無邪気な日本人」をまとめた八木さんがこれに懲りて文章習練をやかましく言うようになりました。

「無邪気な・・・」は着眼点の良さを買われて、九一年二月にマネジメント社から「知らぬは日本人ばかりなり」という題名で刊行され、光栄あるクラブの第一号出版となったのです。

八木 マネジメント社の家辺壮之助社長、平原琢也編集長には公私ともにお世話になり、大変感謝しています。その後も二、三年に四、五冊の本を出してもらい、その都度出版記念パーティーを開くなど、スタート段階でイナシヤをつけるのに多大な協力を頂きました。企業OBベンクラブが今日あるのは、この賜ものといって過言ではありません。

北田 創立当初のPR作戦で成功したのはフジモリ大

統領支援のため、ペルーの子供たちにペンクラブにちなんで鉛筆を贈ったことです。九一年二月二十五日三井物産のカフェテリアで開かれた「知らぬは日本人ばかりなり」の出版記念パーティーには、駐日ペルー大使にも来てもらい、会場でペルー募金を行いました。募金は九万円になったが、印税からの拠出分を加えても基金は十五万円。これではクラブの贈り物というには少なすぎると思っていたところへ、三菱鉛筆から百万円相当の鉛筆とボールペンの寄附が転がり込んだのです。

輸送は日本ペルー協会の後押しもあって川崎汽船が船長託送を承知してくれたものの、ペルーの経済情勢悪化で日本からの船便がなく、その年の十月チャーター便でやっと積み出しました。大統領秘書官からは丁重な礼状も頂きました。

クラブの処女出版やPR作戦は大成を取め、新聞各社やNHKの取材対象となって、世間に知られるようになったと思います。

八木 とにかく、マネジメント社に創立当初、多大の協力をしてもらったこと、北田君が事務局長の立場で副会長クラスのうるさ型を上手にコントロールしてくれたこと、石川さんを招いて文章の添削をやってもらったことなどでクラブの基礎が固まったといっても過言ではないね。もうひとつは事務局に西川知世さんをスカウトし

たことだ。

北田 知世ちゃんには以前にパーティーなどを手伝ってもらったこともあって呼んだんです。とにかく会が終わったときには、すでに収支報告が出来上がっているんです。大した事務能力です。

西川 それは違います。主婦だから、「一刻も早く帰りたい」ためですよ。私がクラブに厄介になるようになったのは九三年からです。北田さんから電話をもらって出かけていったのが東京會館で、昼食に舌平目をご馳走になりました。(一同笑い)

北田 「知らぬは日本人ばかりなり」につづいて同じ九一年十一月には「あっ!と驚く国際マナーの常識・非常識」がマネジメント社から出版。翌年の六月には日本実業出版社から「60歳からの知的生活」も出しました。

石川 日本実業出版社から「60歳からの」シリーズなどたくさん出版されています。どなたの紹介でしょうか。

北田 「知らぬは日本人」とか「あっ!と驚く国際マナー・・・」の評判がよくて、出版社の方から声がかかったんです。このころ原稿料収入がウナギのぼり、九二年末のクラブには二百万円ぐらいの準備金が出来ていて、ようやく事務担当者をおくことになったわけです。

事務局の最大の苦心は、どうして多くの会員を集め、行事に参加させるかで、その連絡のため事務局長はワー

企業OBベンクラブの単行本

書名	出版社	刊行年月
知らぬは日本人ばかりなり	マネジメント社	1991年 2月
あつと驚く国際マナーの常識・非常識	マネジメント社	1991年11月
よくわかる商社業界	マネジメント社	1992年 6月
60歳からの知的生活	日本実業出版社	1992年 6月
60歳からの趣味達人 毎日を2倍楽しむ	日本実業出版社	1993年 1月
アメリカ人と堂々わたりあう本	マネジメント社	1993年 1月
日本再生100創案	マネジメント社	1993年 2月
政治家・官僚への48の苦言・提言	マネジメント社	1993年10月
ライフワークの見つけ方・楽しみ方	日本実業出版社	1993年11月
国際マナー常識事典	学習研究社	1994年 4月
海外経験おもしろ話	泰流社	1996年 7月
60歳からの健康達人	日本実業出版社	1996年 8月
ゆったり暮らす法則	書苑新社	1997年10月

このほか、科学技術関係の当クラブ会員の共同執筆による「最新テクノロジー 不思議?なるほど!」(94年11月・日本実業出版社)や仲間の本を共同翻訳した「日本兵のはなし」(02年8月・マネジメント社)など。

プロ打ち、コピーとり、封筒とじ、切手貼りに明け暮れしていましたから。
石川 この十五年間にクラブとして出版した本をまとめましたので、プリントをお配りします。(別掲参照)

北田 私たちクラブの出版の基本形ができたのは、百編方式でした。マネジメント社の平原編集長を招いて講演を聴いたときに提案されたもので、一人千二百字ずつの原稿を百編まとめれば一冊の本になるというものです。

日本人に欠けている国際感覚をペンの力で訴えてはどうか、皆が海外駐在の豊富な経験をもっているのでも・・・という視点が時代にマッチしたんでしょね。まだバブルの余波が残っていて、出版ブームが続いていたことも幸いでした。

森田 私も「60歳からの知的生活」のまとめ役をやつて、大変勉強になりました。またよく売れて七版を重ねた。八重洲のブックセンターの入り口に、ベストテンに入つて張り出されましたよ。横積みで展示販売され、一時ベストテンに入りました。

小林 「60歳からの趣味達人・毎日二倍楽しむ」は台湾で翻訳まで出たね。

石川 このころから企業OBベンクラブの名が世間に知られるようになって、日経新聞にかなり大きな紙面で紹介されていますね。

北田 売れたといえば「国際マナー常識事典」(学習研究社)は二万部を数えた。これは「あつ!と驚く国際マナー・・・」のプロジェクト・マネジャーだった佐份

利治さん（京セラ）が中心になって作られた。

八木 でも何から何まで順風満帆というわけではなかった。文筆の達人が多く集まればそれだけ自分の文章に対する自信やプライドも強く、「他人の文章に手を入れるのは何事か」と憤って辞めていく人や私の意見と合わないプロジェクト・マネジャーも出てきて・・・

飛び出した会長辞任発言

小林 結局は失敗に終わったが、小説研究会で、山本五十六元帥をテーマにして小説を共同執筆しようという試みがありました。宮沢漸さん（日本郵船）が名乗りをあげて一人で書き進めたが、八木さんが筋まで書き換えたといつて問題になった。宮沢さんは河村名誉会長らに訴えて出で紛糾しましたね。小説の共同執筆は難しい。

北田 もともと、これは石屋さんの広報誌「黙」に連載することで、八木さんが幸か不幸か事前に話をつけていたもので、経済小説に仕立てる意向だったのがその意に沿わなかったものが出来てきた。そこで責任を感じて自分で書き換えちゃったらしい。九三年四月例会で、突然八木さんの会長辞任発言まで飛び出し、事務局長の私は困っちゃいました。

西川 そうそう。私が初めて大手町の養和会に出かけ

たのは、そのころでした。八木さん、北田さんしか存じ上げず、その二人を頼り五月の理事会に行ったのに、二人が机をたたいて議論というか、言い合っていらっしやいました。参議院事務所の時代にも同じようなこともあって、「ああまた、ここでもか」と、それほど驚きはしませんでした（笑）

小林 思い出した。思い出した。「ここは八木商店ではないぞ！」などと、みんながやりあっていたあの時なんだ。

西川 でも、立派だと思ったのは河村名誉会長が翌五月例会で会長代行となって事態を収拾されたことでした。感心しました。

翌年九四年一月から新体制が敷かれ、鳴澤宏英会長（東京銀行）が就任されたますが、頭脳明晰な方で翌日にはもう会則案ができていました。九八年に北田新体制に変わるときも、「カイゼルのものはカイゼルに、神のものは神に」と、おっしゃって……。私は当時その意味が理解できませんでした。会長を四年やって土台は出来た。このクラブは名誉職では務まらぬ。本を書きたい人たちに返すということだったらしいのです。まことに立派な方です。

石川 このクラブは単行本のほかに、新聞、雑誌への寄稿も随分ありました。

北田 雑誌「スクウェア21」(全国経営者団体連合会)の「話のパティオ」や「ビジネスサポート」(東京リサーチ)の「ライフワークのススメ」また「マテリアルマネジメント」の「こーひーぶれいく」は、それぞれの雑誌の名物読み物になってロングランとなったほどこです。

石川 いずれも西島力さん(住友商事)がまとめられたが、あの方は文章がうまいですね。健康を損ねて退会されたのは残念です。

推理小説の当選金で一杯

小林 新聞連載もありました。日本経営者同友会の新聞に「ゴマスリ作法」を約一年にわたり書き続けました。ほとんど無料奉仕でしたが。

石川 企業OBペンクラブ発足当初から、八木さんの頭には「ペンクラブであるからには小説を書くことが中心にならねば」の思いが強く、小説研究会が始まりました。テーマを決めて書き合ったり批評したりしました。中野隆夫さん(三菱商事)の「殺しのからくり」が光文社文庫・本格推理のコンテストに当選、第六巻(九五年五月)に掲載されたのも小説研究会の成果と言えますでしょう。

小林 当選金のお陰で六本木でたいへんご馳走になっ

たね。

石川 都甲昌利さん(日本航空)も三菱関係から売り出された「燕籠茶」の開発物語を書いたりしましたね。玉山和夫さん(通産省日英協会)らが英文で書かれ英国で出版されたビルマ戦線の話の翻訳、「日本兵のはなし」として出版(〇二年八月、マネジメント社)したのも小説研究会が中心です。

小林 日本記者クラブ(プレスセンタービル九階)ラウンジでボトルを傾けながらの話し合いも楽しいね。最近では川柳の会も一緒にやっている。

北田 九七年以降、「日本兵のはなし」まで単行本の刊行がなく、ちょっと寂しかったのですが、プレジデント社の雑誌「プレジデント」二〇〇二年正月号を飾ったサラリーマン物語は久々のヒットでした。これは中川路明(ダイセル)岸本義生(兼松)藤岡豊(三菱商事)刀祢館正久(朝日新聞)さんらがプロマネになって会員の現役時代の体験を悲喜交々綴ってもらったものです。兎玉進さん(朝日新聞)のネットワークに乗せて出版社を探していたところ、プレジデント社が手を上げてきて日の目をみたものです。原稿二十七編が掲載されています。

石川 俳句の勉強会が誕生したいきさつはどうですか。

北田 定年にもなると、俳句でもひねってみようかと

いう気分になるのか、日本機械輸入協会の平間真木子さんを先生に迎えて九三年九月から始めました。短歌の方も細川謙三さん（東京銀行）に指導してもらいました。言いだしつべの私は二人のおかげで短歌・俳句なるものがどんなものか、ようやく分かるようになりました。短歌の方は出席者が少なく残念ながら昨年解散しました。

石川 西川さん、俳句の勉強はこの会以前から始めていたのですか。

西川 いやいや。北田さんが「入れ」というので始めたのです。

石川 今や俳人協会会員、「田」編集同人、「青山」同人と、幅広く活躍され、いろいろ賞をとっておられて立派なものです。

遠藤 女性の感覚は鋭いですね。

西川 ここで勉強させていただいて、俳句は今や私の人生と切っても切れないものになりました。感謝しています。

北田 IT時代となつて、インパクでは多田修さん（横河電気）にすっかりお世話になったし、IT部会の充実ぶりは特筆できるのではないでしょうか。最近はいル・マガジンとの付き合いもありますね。

石川 メール・マガジンの「ベストライフ・オンライン」をやっておられる奥山融さん（松竹）が入会され、

メル・マガへの寄稿も増えています。十人のメンバーで書いた各人十回の連載「エバーグリーン」シリーズもある。



（手前から）西川、上澤、遠藤のみなさん

りました。ナムコがやっている「ナムコポーロ」は海外旅行の企画で、海外経験の豊かなクラブ会員には打つつけのシリーズですね。

ところで、ペンクラブは今後どんな方向に向かっていったらよいでしょうか。

若返りでIT時代を乗り切り

北田 九八年以来、三期六年の会長をつとめ、来期はぜひ若返りをはかりたいと何人かに打診してみたが、いずれも断られました。とくに七十歳を超えたようなものがいつまでものさばっていては……。残念ながら若い人の感覚についていけなくなっています。ペストライフに投稿しても私のエッセイに対するクリック数が少ない。逆に、ササッと書いたものがよく読まれている。IT時代になって文章の書き方も変わってきています。

そこで今度は理事に六十代前半の人たちに入ってもらい、積極的に若返りをはかることにしました。若い会員を勧誘してもらい、今の平均年齢七十二・八歳を下げていね。

遠藤 全く同感だ。若い人たちにバトンタッチしていかなくては会の発展はないから。

小林 読み本書き、活版、さらに電子と技術が進んで

くれば、書き方も当然変わってくる。でもパソコンはあくまで手段だ。やはりわれわれは内容を深めていかなくはならぬ。

北田 お言葉を返すようですが、小林さん、ぜひパソコンを始めてくださいよ。川柳の投句から選句、会報掲載までの手続きが楽になります。

小林 やるやる（と笑いながら）。私の川柳経験だってそれほどでもないのに、いつの間にか宗匠に仕立て上げられてしまつて……。宗匠ではないよ。でも、私は企業OB川柳といったものをやっていききたい。これは筆が遅くてもやれますからね。

遠藤 宗匠の評はプロ並みで、よくできており読ませるよ。

森田 会の今後のことですが、皆さんいろんな蓄積を持った人ばかりで、趣味も幅広く、今後はぜひそれを生かしていかなくては。いまこそシニアの出番です。十五周年を節目にクラブも原点に返り、それぞれが自分の得意分野で外部に働きかけていったらよいと思う。講師派遣センターの組織に私も登録したが、興味ある方には紹介します。

石川 これまで女性会員が少なかったように思います。

北田 アブドルカーダー栄子さん（日本語教師）のよ

うに岩手県在住で十年間も在籍された方もいらつしました。遠いために会合に出席が困難で、最近やめられたのは残念ですが。

石川 「悠遊」のエッセイだけでなく、俳句にも投句されていてましたね。

小林 女性は小説に興味をもっており、女性作家クラブがあちこちにあるんだが、こちらが小説活動をしていないので交換会もできないんだ。

西川 クラブで時代小説なら書けるのではないでしょうか。

石川 「なんでも書こう会」は一九九五年八月に浅野正春さん（日立製作所）の提言で始まったものですが、文章習練のプロジェクトとして続いている。この会は女性も入りやすいんじゃないだろうか。原稿用紙二枚程度で、なにを書いてもしよいのだから。みんなで意見を述べながら楽しい会になっています。

小林 最近の四、五十代の女性は才色兼備の方が多くなっているね。それより上はどうも・・・。（笑い）

西川 あら、小林さん、それセクハラよ。

北田 理事も若返ったことだから、男女を問わず若い会員を連れてきてくれるよう期待したいね。

石川 私たちの同人誌「悠遊」も第十一号となります。九三年九月ごろ三枝亨さん（三井物産）が「会員全員が

参加できる本の広場を作ろう」と提案されて始まりました。ワープロ原稿なら本も安くできるというので、当時多かった手書き原稿を知り合いに頼んでワープロで打ってもらい、印刷会社を持ち込んだことを思い出します。このごろは、ほとんど会員自身のパソコン原稿になりましたね。今昔の感があります。

きょうは、新しく入った会員には耳新しく、刺激になった話もあったと思います。皆さん、長時間、どうもありがとうございました。

私とペンクラブ

中川路 明

「どないしとんのや。ペンクラブはおもろい奴が仰山おるで。北田や亀さんもおるから遊びに來いや」

柴垣復生先輩から電話をもらった。平成五年六月、苦勞し育てたタッチパネル会社を後輩に託し、退職したころである。脱工業化社会を迎え、「化学会社も時代の先端を行く電子工業の商品に進出すべし」と主張を続け、新製品開発に没頭した。退職の前日まで客先との会議が深夜に及んだ。充実した会社生活に悔いはなかった。

背広を脱ぎ、腕時計を外し、残る人生を託す新たな分野を探った。専門外の日本語の魅力が心の奥を揺さぶった。とりあえず、気ままに語る話のサロン、基礎を復習する日本語教師養成講座に参加した。

ペンクラブの名を聞いて、物書きは難しいと二の足を踏んだ。ラグビー仲間が多いから、ちょっと顔を出して見た。国際問題が主目的とかで、世界の隅々まで雄飛し

た商社OBを中心とする、海外経験者の集まりだった。中東、アフリカ、東欧など見知らぬ土地の、嘘のようで愉快な話の渦に巻き込まれた。活動の中心の執筆は、当時、出版企画六件、出版未定三件、雑誌・新聞投稿三件を抱え、十件を超えるプロジェクト会議が毎週開かれていた。すべて共同執筆で、参加者はテーマを中心に切り口、話題を自由討議し、一編でも書きたい人がプロマネの章立てに沿って投稿した。

「技術屋のメンバーも増えたので何か書け」ということで、日本実業出版と相談、「藪にらみの科学」プロジェクトを小林正憲氏とともに立ち上げた。一流の専門家も数人いたが、経験分野が狭く、ネックであった。要望の多かった電子分野の新技術は、私の開発時代の資料が役立った。ほかの欠かせないテーマは分担して書いた。類書との差別化の力点を、分かり易さ、面白さに置く。黒澤慎治氏、浅野正春氏、小林氏、私で各十ないし三十編を書き、ほかの十一人の努力とあわせて百六編が完成した。

平成六年十一月、『最新テクノロジー』不思議なる

ほど!』の書名で、八千部を出版した。入会間もなくのプロマネの大役で無我夢中である。内容が技術関係で何とかこなせたとはいえ、私は度胸だけの素人文章だ。テーマの拡大に時間を要したうえに、年末企画で急に出版が決まり、文章の推敲の勉強ができなかったことが残念だった。合評会で八木大介氏から、少し硬いがレベル以上の出来と褒められ、物書きを始めた次第である。

当初はクラブにも文章教室があったようだ。講師が高齢化し無理ということから、何でも書く会が始まった。最初に入選作を選ぶ話も出たが、提出作品に対する参加者の自由な評論・感想のほうに役立つとの意見が大勢を占めた。現在もクラブの最大の行事になっていることは喜ばしい。上手な文章より、個性のある文章が楽しい会である。

私も文章は上手になりたいし、読んで欲しい。文章教室にも通っているが、題材を増やす努力をしないから、思いつき話か、市井の見聞記が主である。文章力の向上は、限度が見えた。文章構成法など勉強すればよいのだが、通っている教室の講師が重点とする表現法に惹かれてい

る。「同一文中に同じ言葉は使わない」、「形容詞でなく、状況の具体的表現を」、「述語は二つ以上考えてから選ぶ」など、八百字の文章でも推敲に限りがない。

日本語についての興味は尽きない。私が大事にしたいとしている言葉は、心が休まる「癒し」となって響く。世の中の成長が止まり、小津作品などの映画、古典落語が復活している。一部の日本語は消えつつあっても、辞書などを参考に言葉探しをする。細かく手を入れ文章を追う時間は惜しくない。

文字より画像の時代で、本が売れないという。しかし、エバーグリーン、シニア健康ライフ、ナムコポーロなどメンバーの文章は、何も目新しい書き方でなく、面白く読ませる。

ベンクラブは書きたい人の集まりの割りに活発でない。サラリーマン体験記を私は繰り返し集稿した。分かったことは、書きたい人は多いが、高齢で馬力がなくなつたことだ。まとめ上げる牽引者がほしい。

十五周年を機に、自ら計画してプロジェクトを組みリードする、活力のあるメンバーを増やそうではないか。

会社人間との決別

大野 呈

企業OBベンクラブと私の出会いは、もう十年も経つだろうか。メロウ・ソサエティ・フォーラムで、石川正達さんからこのクラブについてのお話を伺った時に始まる。まだ会社勤めで、ウィークデーの催しに参加できなかった私に、「土曜日に新聞記者クラブで集まりがあるよ」と教えてくださった。そこには八木大介先生、北田純一さん、中野隆夫さん、故石山茂宣さんと三菱商事のOBが中心で、私の古巣からは三枝享さん一人が参加されていた。中野さんが光文社文庫の本格推理に入学し、八木先生が原子力発電関連の小説を出版されるなど、参加者の活動は活発だった。ただ後で聞くと、企業OBベンクラブからは、「分派行動」と見られていたようだ。

六年前、この会にとつての大事件が起こった。北田さんがクラブの第三代会長に就任された。詳しい事情は知らないが、理事立候補者の半数以上が京大ラグビー部の

OBで、その互選で選ばれたとの話を聞いた。

早速、三高ラグビー部のOBで、初代会長の八木先生から、中野さんと私にも、北田さんを応援してベンクラブに入るようにとお話があった。それがこのクラブに入った経緯である。

八木先生や北田さんは、当時のクラブの活動が「物を書く」という本来の趣旨から外れ、仲良しクラブになっていたことに、危機感を抱かれていたようだ。

さらにもう一点、私にとって重要に思われたのは、反権力というか、自由闊達な組織を目標とされたことだった。八木先生が「このクラブは企業OBの集まりだから官僚は入れない」と発言されたという噂すら聞いた。

この時、私がこのクラブに期待したのは、企業よりもむしろOBに重点を置いた、伸び伸びとした雰囲気、企業の延長線ではない組織であった。企業のように上下関係があつたり、しがらみがあるような組織でなく、自由なOB生活に力点を置いたクラブに憧れていた。サラリーマン生活時代の垢を落したいという気持が強かった。

そういう目で、今のクラブを見ると、六年前とは何となく雰囲気の変化を感じている。

一昨年初めに、三枝さん、八木先生が相次いで退会されたところから、少しずつ会の空気が変わり始めた。その意味でも八木先生のカムバックを一日千秋の思いで待ちわびている一人である。（その後、再入会）

では具体的にどんなクラブ像を理想的な姿として描いているのか、と問われると、なかなか巧く説明できない。私が入会してからの六年間で、最も大きな、よい意味での変化は、会員間の連絡にインターネットが利用されるようになったことだろう。

平均年齢が七十歳を超えるクラブで、七割がeメールで情報をやりとりするようになったのは、時代の要求とはいえ、素晴らしい進歩であった。また、会社でパソコンを使いこなした世代は六十代前半から若い人たちだと思うが、今回その世代から三人の理事が誕生したのは喜ばしいことだ。

私のようにメールしかできない者は、すべて他人まかせで申し訳なく思っている。

ただ現在のクラブは、まだデジタル時代への過渡期にある。大部分の人はパソコンに習熟せず、一部の人に頼っている。また三割の人はパソコンをもっていない。一方で高齢化が進み、健康についての同年齢での格差も広がっている。このクラブには七十五歳、八十歳になっても頭もシャープで元気な方が多い。

この世代の方は戦中、戦後を知っておられる。もう少し経つと、戦争や軍隊を体験した人はいなくなってしまうのだ。

今イラクへの自衛隊の派遣が問題となっているが、戦時を体験した世代がその体験に照らして発言すべき時期ではなかるうか。「若返り」という言葉は一見すべての問題を解決するような響きはあるが、一方に「温故知新」という言葉もある。エイジズムに反対する私の個人的な考えとしては、このクラブが戦争経験世代の方の積極的な発言の場となることを期待したい。



甲斐大泉

自由
テ
ー
マ

心ゆさぶる言葉アレコレ

芦刈 克

言葉は生き方そのものだ。言葉を通じてその人の人生が浮き彫りになる。言葉は言葉だけで存在しない。心とその内容がそのまま言葉に表れる。声と言葉でどんな心を発しているかということだ、と思っている。

「私は年をとっていくこと、年を重ねていけることを喜ぶタイプだ」といった人がいた。まったく同感だ。ちょっと前には見えなかったことや分からなかったことが、見えたり分かったりしていくのが嬉しい。言葉と生きるメッセージをもらえるのが真に嬉しく思う。特に、予定された言葉の中に予期せぬ「思わず」が入って、それが人間のすばらしさを見せるとき感動する。そこに情があり、熱いものがある。一途がつくるドラマは先ず人格・人柄があつてそこから言葉や行動が生まれるのではないだろうか。

去る晩秋の昼下がり、いつもの散歩道を歩いていたら

急ぎ足で背後から見知らぬ人が肩を並べるように近寄り「今日は、お元気ですか」と声をかけてきた。「ええ、お陰様で…」と形通りの言葉を返した。すると続けざまに「故郷はいいですねー」。私は、「故郷は、どちらですか」と尋ねた。「九州は、川名です」という。「良い所ですね。温泉があつて。私は、隣の県の竹田です」と応えた。「そうですか。同じ九州ですか『荒城の月』ですね」といったまま、面影が薄くなった。寂しくなつたと、急に小声になり誰に話するでもなく、かつて見たこと聞いたことの忘れ得ぬ心の風景を呟き始めたのだ。

人は感じたことや見たことを言葉にして、心を培い、生き方、考え方、あり方を立ち上げるといふ。彼の呟きの中身は、「人は言葉のめぐりの輪の中でしか生きられない」。「暮らしの中に言葉があり、儀式がある。人は昔話や民話に耳を傾けて育ち、儀式を通じて、すべてが繋がりがあつて生きていることの人間らしい生き方を学びました」といつていた。

その間、彼と私は、知らず知らず歩みを緩めていた。分かれ道に差しかった時、彼は軽く笑みを口元に浮か

べ私を振り向き眩きを詫びるような会釈をして、「またお会いしましょう」と言葉を残して、仮置きしてあった自転車に跨り、右方向にいつてしまった。

私は、一通りの眩きの終わりに、予期せぬ「またお会いしましょう」の『思わず』の言葉をなぜか温かく感じ嬉しくなり、心に留めて彼とは逆の帰り道へ向かった。

彼には、氣負いがなかった、脂気の抜けた枯れた感じの顔に竹のようなしなやかな何かが見えた、いいなあと思った。人間の言葉づかいや風貌・姿勢は、何からやって来るのだろうかということだ。処世術、もう一つは心のどこかで生まれ言葉になって出てくる。つまり、正直な本人も気づかない感慨が言葉になるのだ。

現役時代、気の合う仲間と詩人・浜文子氏の提言を良く噛みしめ語り合った。感じるという心の働きは、心ゆくまで、しっかり目でとらえ、耳を澄まし、匂いを嗅ぎ舌で味わい、体に触れ、そうやって体得したもろもろが五感の深いところから生まれる。

その感じたことが言葉になるまでの道のりが生きるこ

とだ、即座に言葉にならない思いや言い尽くせない感情。言い表す表現に行き当たらない状況を黙々と生きている瞬間こそが人生そのものだ、と。感じ方を多く積み上げ、心の土台作りの時間を生きたことだ。

心の土台が豊かだと、その後の吸収される知識や情報の受け取り方が興行きと深みのあるものになる。その先の人生で失敗・挫折が起きても強く、しなやかに心の態勢を整えられる底力のある人間になれる。言葉は我々の五感に実にしつくり合う表現として芽吹き、育つといっているのだろう。

これからもモットーは「良く見、じつと見。よく聴きじつと聴くだ」。その場の感動を、ふと言葉として感じる瞬間が魅力だ。縛られずに、さりげなく楽しくやるのが長続きの秘訣。

そして、これからも言葉とは良い関係で付き合い、肩の力を抜いて楽しんで生きようと思っている。冒頭に記したように、言葉と生きるメッセージをもらえるよう、過剰な言葉を排し、冷静な選択を心して――。

再会

安藤 晃二

少年時代の僕は、町内の子供同士で日暮れを忘れて遊び興じるか、さもなければ絵を描いていた。スケッチなどといったものではさらさらなく、本能がそうさせるとしか思えないやり方で、白い紙、スペースがあれば描いた。こよなく愛する想像上のモチーフを描きまくるのだ。お陰で我が家の室内のすべての壁は「さむらい」と軍艦、戦車の落書きで埋まっていた。

イマジネーションに渴望した少年が父親の物々しい書棚の扉を開くと、ニスと古書の匂いが広がる、その禁断の場所から一冊の小さな画集を見つけ出した。それは数枚の黒い台紙が綴じられた外国製と見られる一冊であったが、その中の二枚の風景画はこの上なく好ましいものであった。これが父親が良く口にした「泰西名画」というものであろうか。

見たことも無い雲行きを背景に教会の尖塔が日に映え

る遠景と豊かな緑の牧場、水辺でのんびりと草を食む数頭の牛、また巨木がアーチのごとく画面を取り囲む近景が素晴らしい。左端を教会に続く道を散歩する人影、その紳士は立ち止まって樹上の何かをステッキで指示しながら連れの淑女に話しかけている。小鳥の声まで聞こえて来る。成人して英国に住んだとき、僕はこの絵のことを思い出し確信を持って、あの鳥は鳴いていたと思ったものだ。その日から僕は絵といえ、このお手本を持ち出しては毎日のようにこの風景を描き続けることとなる。

画集にあったもう一枚の絵、それは光る湖を逆光で捕らえ、手前に木々が広がる繊細な筆致の絵であった。教会の絵に飽きると、この湖の絵を模写したものだ。

小学四年生のとき僕は写生コンクールに出場した。近在の十数校の代表選手が皆画板を携えて僕の通っていた小学校の校庭に集合し、ぱっと近くの田畑に散って腕を競う。僕もクレヨン画であったが、力の限り描いた。県庁からやって来た偉い先生が審査員で、その日僕の絵は金賞を受賞した。関東平野の典型的な防風林に囲まれた農家と並ぶ秋の木吊るしを描いたものだった。その後毎

年続けられた写生コンクールで、思いがけないことであったが、県庁の偉い先生は僕が中学三年生になるまで僕の絵に金紙を貼り続けたのである。そしてあの黒い画集を我が家にもたらしした父親は、コンクルの日には審査結果が出る頃合には必ず会場に現れるのだった。絵が僕の生涯の友となった遠い日の出来事である。

その後、僕は「あの教会の絵」が、かの有名なコンスタブルが描いた「ソールズベリー大聖堂」であったことを知る。またもう一枚がコロの「湖」であったことも。ロンドンに住んだ僕はナショナルギャラリーなど、至るところでコンスタブルの教会に出会い、懐かしさに声を上げそうになったは呑み込んだ。あの絵ではない、題名も同じそれらの絵がすべて、画集にあったあの絵ではないことを、幼いころに記憶した僕の眼ははっきりと見分けることができた。ソールズベリーの司教と別懇でその庇護を受けたコンスタブルは多くのこの大聖堂の絵を残している。

真夏、すっかり落ち着きを取り戻したニューヨークのグラウンドゼロを後にして出かけたセントラルパークの七〇丁目にその美術館はあった。フリックコレクション、この二階建ての豪壮な館がどんな建物なのかと以前から気には留めていたが、今回知人による強い推奨で訪れた。石炭王フリック氏が今世紀初頭に収集したもので、十六世紀から近代に至る素晴らしい人物画を中心としたコレクションは心を打つ作品に満ちていた。

そして、ライブラリーと呼ばれる部屋まで来たとき、僕は思わず灰灰とした感情に包まれた。紛れもないあの「ソールズベリー大聖堂」が目の前に輝いている。何気なく振り向いた後ろの壁にはあのコロがある。そうなんですよ、と微笑んでいるかのように。僕の背筋に戦慄が走った。一九二九年ごろ父親は一〇四丁目のコロンビア大学で学んでいた。あの黒い画集はどこに行ってしまったのだろうか。今僕は七十五年前にニューヨークで買われたに違いないその小さな画集にいつか再会出来るのではという予感を感じ始めている。

民族間の歴史的反感

今川 確郎

(a) チェコ人の反ロシア感情

一九六四年にチェコの首都プラハに出張した時のことだった。ホテルの受付にはチェックインの手続きをしている多くの中年ロシア人が声高に喋っていた。彼等がそれぞれの部屋に行き、客は自分一人となった。受付の中年女性性は「奴らは程度が低いくせに威張りくさっていて、大嫌いだ」と、私に吐いて捨てるように（英語で）心情を述べた。

チェコは東欧諸国では最も文化水準が高く、その歴史的遺産も多く残存し、工業力は西欧先進国に後れをとらなかった。このプライドはチェコ人の大半が抱いていたようで、ソ連のロシア人が実質支配する体制への反感は根強かった。しかし当時のソ連の東欧諸国に対する軍事的圧力は絶対的で、ソ連に従属せざるを得なかった。

首都北部の高台には背丈の高いスターリン像が、市全

体を見下ろすように建立されていた。チェコ人の神経を逆なでするシンボルだったに相違なく、後日「プラハの春」となってソ連に反旗を翻すまでに至った。この反抗も強力なソ連戦車隊によって蹂躪されてしまった。

しかし、ソ連、東欧共産政権の崩壊後の経済復興のテンポは最も早かった。一九九三年夏にプラハを訪問した時は往時の暗い面影は全く無く、平和そのもので、地元の人達の顔つきも穏やかだった。九〇年代に入り、日本からも多くの観光客が訪れ、東欧一の賑わいである。

(b) ジブラルタルを巡る英、西間の対立感情

一五九〇年以降の四十年間、スペインは「無敵艦隊」と称された大海軍を擁して大西洋を支配した。さらに中、南米諸国、諸島を征服し、アジアにまで進出してフィリピンを属国とした。一方、島国たる英国は一步遅れて海軍力を強化し、一八〇五年ネルソン提督が率いる英艦隊はトラファルガル海戦でスペイン、フランス連合艦隊を撃破。スペインに代わり世界一の海軍国となり、七つの海を制するに至った。

アフリカ大陸北端とスペイン本土南端に挟まれる幅三十キロほどのジブラルタル海峡は、大西洋から地中海への入口を占める軍事的に重要な地点である。十七、十八世紀以来強大な海軍力を競い合ったスペイン、英国の両国は、「ジブラルタル」争奪戦を繰り返した。同地は、スペイン本土より突き出た半島だが、現在はその先端のみ英領で、英国海軍の重要根拠地となっている。

一九六五年に、ジブラルタル対岸のアルヘシラスに出張した際に見聞した「ジブラルタルを巡る英西両国のむき出しの対立感情」は、いつまでも忘れられない。

ジブラルタル軍港はアルヘシラスからフェリーボートで十分ほどで行ける。軍港施設での作業に、多くのスペイン人が専用バスで短い半島を通勤していた。軍港の門では、特別な身分証明書を英兵に提示することを義務づけられていたとのこと。

夜になると、四隻の中型巡洋艦か駆逐艦が、ライトを煌々^{こうこう}と受け、あたかも海上に浮かび上がって、大英艦隊の威容を、対岸のスペイン人に誇示しているようだった。「今日は英国の何かの記念日ですか」と問い合わせたが、

その返事は敵愾心むき出しだった。

「あの軍港は我々にとっては目の上のコブだ。英国は七つの海を失ったくせに、あんな狭い所にしがみつки、地中海に睨みをきかせているつもりらしい。毎晩のように、軍艦をライトアップして我々スペイン人の気持ちを逆なでしている。全く我慢できない」と、今にも「大砲をブツ放してやるぞ」と言った口調、表情だった。

日曜日に一般用フェリーボートでジブラルタルを訪れた。警官がバスボートをチェックしていたので「私は日本人だが、軍港である当地を観光することが出来ますか」と問い合わせた。「ここはスペイン人以外なら誰でもウエルカムです」との返事で、こんな会話にもスペインへの敵対心が表れているとは、驚きの至りだった。

当時から四十年近くも経った今日、両国とも「欧州連合」のメンバーとなっている。スペインがメンバーである「ユーロ」にも、いずれは英国も加盟するであろう。これに伴い何世紀にもわたった敵対感情も薄れ、消滅すると期待される。事実、独、仏間ではこのような人類の理想が実現しつつあるのだから。

史上初、敵艦を撃沈した潜水艦

今村 亮

映画「ラストサムライ」が封切られて注目を浴びている。明治維新、にわか造りの官軍トレーニングに招請されたオールグレン大尉は、米国南北戦争ゲティスバーグの英雄という筋書き。ちょうど、長州藩高杉晋作が奇兵隊を組織して下関で外国船を砲撃したのが、リンカーン大統領の奴隷解放宣言と同年、フィクションとしてはタイムリーな構成である。

その南北戦争（一八六一―一八六五）を、日本人のほとんどが陸上戦と誤解している。海に始まり海に終わった海上戦を見落としている。開戦の引き金はサウスカロライナ州チャールストン港入口に構えられた北軍サムター要塞への砲撃と奪取である。また終戦前、同港外で北軍軍艦ハウザトニックが南軍のハンレー潜水艇に撃沈された。しかし、ハンレーも浮上せず、謎とともに海底に沈んだ。

ハンレーは二〇〇〇年八月、有志によって引き揚げられ、現在同地の海軍研究所に保存されている。私は引き揚げを扱ったナショナルジオグラフィック記事に興味を持ち、昨年八月、同研究所を訪問して長さ二五フィートのハンレー本体を見学してきた。なぜ南北戦争に潜水艇が？ どんな潜水艇だったのか？ 記事ではわからなかった疑問を解いた。

当時、工業地帯は北部に集中し、南部は奴隷とプランテーションの綿花が主産物で、工業には縁がなかった。南軍は綿花を欧州に送り、その代償で武器弾薬を輸入する以外、手がなかった。北軍がこれを黙認するわけがなく、直ちに南軍の港湾封鎖を宣言した。しかし三五〇〇マイルの広域に及ぶ海路、河川と船舶不足のために、リンカーンの封鎖宣言は空念仏となり、南軍の国権を認めたことで、かえって欧州船の暴利欲、冒険心をあおった。

開戦時の全米船舶数は四十二隻、すべて北軍に帰属した。ノーフォーク停泊中の船を南軍が奪い、アイアンクラッド船に改造後は、北軍の木造帆船を次々に撃破する脅威のバージニア号となった。また、開戦時の全米海軍

士官は一四二〇人、うち一一九〇人は北軍へ、残り二三〇人が南軍と、敵味方に二分された。以降三年間に北軍ウエルズ海軍長官は、早業も早業、六七一隻の軍艦を建造している。しかもほとんどがアイアンクラッド船である。

軍艦の増加に伴い、北軍の港湾封鎖がようやく効力を發揮し始めた。南軍は武器補給にこと欠き、封鎖船対策を練った。その一つが潜水艇案である。考案者はマクリントックとワトソンの二人、出資者がホレス・ハンレーである。ハンレーは自ら艦長となってアラバマ州モービルで訓練を行った。艇にはエンジンがないため、訓練は屈強の八人のクルーが手動クランクでスクリュウを回転して前進後退する。艦長は潜望鏡を見ながら舵取りする。狭いながらもハッチは前後に二つ。残念にも、練習中の事故でハンレー艦長はじめ多くのクルーが犠牲者となった。計画倒れかと危ぶまれた矢先、チャールストン港封鎖の深刻なニュースが伝わってきた。潜水艇は急きょ鉄道でチャールストンに輸送され、新艦長ジョージ・ディクソンの下で、新クルーのハードトレーニングが始まっ

た。

北軍ハウザトニック号は、全長二〇七フィート（約二〇メートル）、重さ一二四〇トン、六ノットの帆船で、十六門の砲門を持ち、封鎖破りの欧州船を追ってチャールストン港に派遣された。陸地を敬遠し沖合停泊するのを常としていたが、その日は岸に接近して錨をおろしたとの情報が届いた。好機いたれりと、ハンレーは夜を待ってハウザトニックに近づいた。見張りがハンレーに気付いた時はすでに砲門の下にいた。ハンレーの先端に装備した円材水雷（艇首から突き出た三〇フィートの木製円材、中世の馬上槍を想像させる）が喫水線下の敵艦船体に接触し、その衝撃で起爆装置が作動、見事ハウザトニックを海底に葬った。その勝利の瞬間、ハンレーもハウザトニック沈没の渦に巻き込まれた。引き揚げられた時、全員が定位置にいたまま見つかった。北軍の優勢が日を追って濃厚になりつつあった段階で、一矢でも報いたいとの特攻精神である。ハンレー関係者全員に「海の勇者」の名誉称号が贈られた。潜水艇史上、航空界のライト兄弟に匹敵すると位置づけられている。

生きる意味を考える

岩崎 洋一郎

二〇〇四年二月で、満七十五歳になる。身体は特に悪いところは無く、一応満足すべき生活を送っている。でも、体力や知力は確実に衰えてきていると認めざるを得ない。特に視力と集中力の低下がひどい。日本人の平均寿命である七十七歳の壁が、間近に迫ってきている。住んでいるケア付きマンションの八十・九十代の先輩方の姿が、いやでも目につく。元気な方も居るが、ただ生存しているだけみたいなのもいる。そのような姿に自分も将来なると思うと、やりきれない気持ちにならざるを得ない。

今のうちにやりたいことをしておかなくては、という気持ちが一層強くなった。今までもやりたいことをしなかったわけではない。現役時代も、自分で仕事を創っていった。新しい事業のネタを探し、企業化するために海外を駆け巡った。やりがいのある面白い任務であった。

定年後、沁みついたサラリーマン意識を払拭し、気ままな自営コンサルタントとなった。勧める人があり、本を出版した。他方、活動分野を広げる努力もした。異業種の方と会える企業OBベンクラブに入会し、趣味のジャズ・ヴォーカルを始めた。現役中は、忙しくて睡眠状態であった日本ライセンス協会の活動にも積極的に参加するようにした。英語という特技を生かして、英文広報誌の編集・英文チェックに参画して、日本に最も欠けている情報の世界向け発信を始めた。はたまた、日米学生会議のOBとして、積極的に後輩たちとの接点を求めた。自分史も書き始めた。

振り返ると、波瀾万丈の生涯であった。我々の世代は、戦前・戦中・戦後を生き抜いてきた。さらに、私は戦前と戦後のアメリカを体験している。貧しい日本から、豊かな日本への変貌という画期的な出来事を体験し、その一翼を担って活躍した経験は、恐らく今後も出来ないであろう。とにかく、入社時の給料は、今の千ドル超えでは無く、月三十五ドルしかなかったのだから。後世に対し、一市井人の視点の「昭和の語り部」としての責務が

あるのではないかと考えるに至った。

そうは言っても、どうやって語り部として身を処したら良いか、正直言って心を悩ませていた。たまたま、偶然が重なって、大学院の講師に誘われた。急な話で、口がかかってから授業開始まで、一週間も無かった。地のままで勝負するしかないと覚悟を決めて生徒たちと向き合った。教える科目は「グローバル・ビジネス交渉術」で、キャリアの経験を活用できる。しかし、若年の生徒

たちにアピールするか、一抹の不安は残った。

蓋を開けてみると、学者のような理屈をこねず、実戦経験に照らしたハウツー物に徹したのが好評のようで、来年も続行ということになった。生徒たちも次第に打ち解けてきて、色々な質問や要望を出すようになった。若い世代に、我々の経験を伝えるのが、自分たち「昭和の語り部」たちの責務の一つと受け止めて、続く限り励む覚悟でいる。



根岸の古い家

ウエストン胸像の行方

上原 利夫

「日ア紹介の英人像抹殺」【松本電話】日本山岳会次本幹事ほか二氏は日本北アルプスを世界に紹介した英人ウオルター・ウエストンの胸像を撤去のため七日登山、記念日の八日撤去した」（『読売』一九四二年十二月九日）

この記事を偶然見つけた私は、この夏、上高地にあるウエストン碑を訪れた。毎年六月第一日曜日に行われる「ウエストン祭」の写真で、このレリーフを見た人もあると思うが、そこには横書きの碑文が掲げられている。

《英人牧師ウオルター・ウエストンは、明治二十一年（一八八八年）から同二八年（九五年）までの日本滞在中に槍ヶ岳や穂高の山々を数多く歩き、我が国に近代的な登山意識をもたらし、日本山岳会結成のきっかけを作りました。

また、その間の紀行文『日本アルプスの登山と探検

（明治二十九年）』により、中部山岳を世界に紹介するなど、その業績は高く評価されています。

ここにあるレリーフは、日本山岳会が昭和一二年にウエストンの喜寿（七七歳）を祝って作ったもので、昭和四〇年になけなおされています。》

この碑文には疑問がある。六十一年前の読売新聞に報道された記事「昭和十七年（一九四二年）十二月八日にウエストンの胸像が撤去されたこと」に触れていないし、レリーフがかけなおされるまで、戦後の歳月が経ちすぎている。胸像がレリーフに変わったのも納得できない。

そう思いながらの上高地からの帰途、松本電鉄の島々駅から松本行の電車に乗った。その車内で、ウエストン碑に隣接することを誇るSホテルの広告を見た。その広告紙面にはウエストンの胸像をイメージさせる誰かの胸像が刷られている。ひょっとしたら、ウエストンの胸像はこのホテルに？ 胸像は重いはずだ。冬の上高地から東京へ持ち帰るのは大変だ。近所のS旅館に預けて帰ることは十分考えられる。ところが預けたのではなくて、処分を依頼したとすれば、日本山岳会は所有権を放棄し

たことにならないか。これは胸像が行方不明となる理由になる。

そこで私は、日本山岳会会員の友人に調べてもらった。ウエストンに詳しいM氏の話では、くだんの新聞記事は事実で、持ち帰ったレリーフは自宅に保管されたが火災で焼けてしまい、その後処分してしまったので、今は存在しない。現在あるのは同じ作者が作りなおしたもの。戦時中は報道管制のためこっそり処理したため、あまり知られていないので、その辺の話を二〇〇五年に発行予定の日本山岳会百年史に紹介するそうだ。

私の詮索はさらに進む。新聞記事の胸像は、正しくはレリーフだったのか？ どこかに昔の写真は残っていないだろうか？ レリーフの作者は誰か？ 中の湯と上高地間の「釜トンネル」は昭和八年に完成したそうだから、胸像を撤去した人は釜トンネル内を歩いたと思われるが、凍っていると危ない。天候や積雪状況は？ 撤去した胸像の重量は？ このようなことも知りたい。

その後、インターネット・サーフィンをしていたら、第一回の「ウエストン祭」は昭和二十二年に開かれてお

り、その日に戦時中に撤去されたウエストンのレリーフの復旧式をしたという。復旧式の内容は不明だが、先ほどのM氏の話と食い違う。そこでまた、インターネットのお世話になる。元のレリーフは、復旧式まで日本山岳会会員の手で密かに保管されていたという。現在のレリーフは、昭和四十年に製作者佐藤久一郎氏の手で、新たに作成されたものである。

九州は高千穂の祖母山麓にもウエストン碑があるのをサーフィン中に知った。この碑は昭和四十一年に五ヶ所・三秀台公園に建立され、レリーフの形は四角い。上高地の丸いのと区別するためだろうか。ウエストンの顔も上高地のとは違って見える。昭和六十年から毎年十一月三日に碑の前で宮崎ウエストン祭が開かれている。

インターネットによる探求は、この程度が限界である。私には、まだまだ知りたいことがあるので、日本山岳会百年史が待ち遠しい。しかし、私の想像が当たって、ウエストン胸像がミステリーのネタになるかもしれない。そうなれば面白いのと一人楽しんでる。

(二〇〇三年十二月三十日)

左耳が右耳の衰えを補う

榎本 喜三郎

私は本誌第九号（二〇〇二年三月発行）に「耳が遠くなってきた」と題した雑文を書いた。それを今読み返してみると、二、三状況が変わっていることに気づく。その変化の要点は

（１）当時通った病院には、内科の他に、外科、眼科、耳鼻科等が併設されていたので便利だった。（２）当時は両方の耳が同様に衰退していたらしいが、今は右の方がはつきり左の耳より衰えていることが自己判断できる。（３）あの頃は、補聴器は使わないでいたが、今は右耳のために特に作ってもらった補聴器を持っている。（４）眼科と耳鼻科がなくなるときに、引き続き治療を受けられるように、近くの眼科と耳鼻科の医師宛の紹介状をもらったので、眼科の方はそこへ通っているが、耳の方の治療は受けていない。耳の方は右が少し衰えて来ているの

は分かるが、それほど不自由はないし、耳だけで他のクリニクへ行くのが面倒なので止めたわけである。

補聴器は家の中ではほとんど使わないが、外出するときには小箱に納めポケットに入れて出る。乗り物に乗るか、他人との接触が始まる前、あるいはグループの会合の始まる前に小箱から出して耳に入れる。家を出る前に小箱をポケットに入れるのを忘れることがままある。補聴器なしでも、まあ大して困ることはなく、その日は済んでしまう。そのくらいだから、右の耳の聴力低下も大したことはないのだ、と自分で判断して今日まで、外出するときも使ったり、使わなかったりしてやってきた。

ところが、衰えてきたと思っている右耳ではなく、左耳の方に最近になって何やら異変が起こっていると感じられることがある。医者にかかっていないのだから、自分の勘だけの判断だが、どうも左耳が今までよりも聴力が向上してきたのではないか、と思われるのである。というのは、ここ数カ月来、電話を左耳で聞く（右耳の聴

力が低下したと思っているから自然受話器を左耳に当て（る）と相手の声がとても大きく聞こえる。大げさに言う（と、グワングワンと響くように相手の声が耳に入ってくるのである。はじめのうちはどうしてこんなに大きな声で話すのだろうといぶかっていたが、ここ数カ月この大きな声の相手が同じ人でなく、何人も現れるので気がついた。どうやらこれは相手が大声を出すのではなく、私の左耳の聴音能力が向上したのではないかと疑うようになった。そしてやがてそれを決定づけるようなケースがやってくる。

それは私が所属しているあるボランティア活動の仲間（で、常日ごろから、大変穏やかな人柄で、話し方も静かで、言葉のきれいなFという中年の婦人が、会の活動のことで珍しく私に電話してきた。受話器を左耳にあてがうと流れてくる言葉がひどく大声で、はじめは相手が男か女かちょっと判断がつかかぬた。何回も名前を聞き返した上で、やっとこれがFさんだと分かった。そう分かってからでも、ついにその用件が終わるまで、かねて私が聞き慣れているFさんの声は流れて来ず、大きな、ま

るで違う声で終始した。

あのFさんが普通の用件で、こんな大声で話すはずはない。これは私の左耳の聴能力が増幅したためであろうと断ぜざるを得ない。右耳の聴力が衰えたので、左耳がそれをカバーするために能力が向上したためであろう。相手が誰であつても、普通の声が大声でしゃべっているように聞こえる。それがすでにここ数カ月続いている。

右耳の衰えを左耳の能力が向上してカバーする。生きている人間の身体ではこんなことがあつても不思議ではないと、今改めて考えさせられる。私は今後この点に気をつけて、特に電話の会話に気をつけようと思っている。

電話は左耳と右耳とが、はつきり聞き分けられるが、テレビではそれができない。左耳の感度がよくなっているらしい今は、以前は聞き取れなかった小さな音量にし、同じ位置に座つてもよく聞こえるのは、一緒に機能する左耳の助けによるものだろうと考えられる。老化が進むに連れて、身体に備わる諸器官の変化はこれからいろいろと出てくるのであろう。それらを客観的に眺めて適当に対処することのできる身体でありたいものだ。

室戸岬

遠藤 俊也

司馬遼太郎の作品に、「空海の風景」というのがある。氏の最も気に入った作品のひとつだったと聞く。

平安初期、日本の佛教界の双璧は、いわずもがな最澄と空海である。とりわけ空海は体系的宇宙観、すなわち、曼荼羅まんだらの世界を理論付けた。唐の長安で恵果和尚から真言密教の奥義を授かり帰国した彼は、日本で初めて密教をたちあげたのである。

留学僧としてともに唐にわたった最澄でさえ、高雄山寺で空海から密教の金剛界灌頂を受けている。

空海は、唐への渡航以前から、密教に並々ならぬ興味をもっていたが、唐から未だその本流は伝わってきていなかった。山岳修験道の祖、役のえん小角おづのが広めたいいわゆる雑密の表現で知られる密教は、その一番新しいものでも、原始的な一行法の虚空蔵求聞持法くもんじほうだった。これはインドで生まれた観想法の一種で、限定された日数の間に瞑想

をしながら真言を百万遍唱えるという肉体的にも過酷な苦行だ。

空海がまだ修行中に書いた「三教指帰さんじょうしきき」——これは空海の自伝的戯曲だといわれている——や、あとで弟子たちがまとめた空海の回顧談「御遺告ごいこう」のなかに、阿国（阿波）の「大滝たいりゅうの嶽たけ」と土州（土佐）の「室戸むろとの崎さき」の二つが、彼の生涯における忘れ得ない修行の地として登場する。

なかでも室戸岬では、行の最中、天の明星が口から体内に飛び込み、虚空蔵菩薩の威あらわを顕したと空海は言う。この体験を機に、彼は密教の世界にさらに引きずられてゆく。

空海についてこのような予備知識を得ると、わたしは無性に室戸岬を訪ねてみたくなった。空海がこもって修行した洞窟が今も残っていると聞くとなおさらである。

高知に一泊して、翌朝急行路線バスに乗り室戸岬へむかった。五月半ばのことだった。

三時間近く国道を海岸沿いに走る。終点で降りるとそこに、坂本竜馬とともに凶刃に斃れた中岡慎太郎の立派

な銅像が建っていた。彼はこの近くの奈半利^{なばり}で生まれたらしい。その背後の木々に覆われた高い岡の上には真っ白な灯台が見える。

国道に沿って一軒の土産物店があった。この娘さんに洞窟の場所を尋ねるとすぐ分かった。十分ちよつこの国道を北に歩くと左手にあるとのこと。七、八分歩いたところに、「室戸岬灯台への登山道」の木札と、「四国二十四番霊場東寺最御崎寺登り口」と刻まれた石碑があった。

目指す洞窟はそこからすぐだった。駐車場のような広場に貸し切り大型バスが三台とまっていて、菅笠に白衣のお遍路さんが大勢、付近をウロチヨロしている。その先に洞窟の入り口が二つ見えた。バスが全部去ってから、わたしはひとりでゆっくり見学した。

二つの洞窟の入り口には、それぞれ、しめ縄を張った鳥居があり、「神明宮」、「五所神社」と書かれた木札が立っている。向かって右が「神明窟」、左が「御厨人窟」だ。空海は、左を住居、右を修行の場と使い分けていたようである。行の最中、明星が空海の口から体内に飛び

込んできた場所は神明窟の方らしい。二つの洞窟とも奥には蠟燭^{ろうそく}が灯されていた。

いつのまにか、冷たい北風に変わり海は大荒れだ。空は分厚い雲に覆われ、薄暗くなってきた。洞窟の中から空と海しか見えない。海岸の大岩とそれにぶつかって白く碎ける波。こんな風景を空海は何日も眺めていたに違いない。

空と海。空海の名は、こんなところから来ていると思えなくもない。

老い雜観

大 島 義

老いなどというものは、もつと温かく、和やかな日なたほつこのようなものだと思像していたが、当年七十二歳、現実となつてとんでもない思い違いと遅まきながら実感するようになった。

若いころの俊敏の快感などから程遠く何をするにも時間がかかる上に、いい加減な行動を見逃してもらえない辛さがある。いわば頭の中は毎日が戦争のようなものである。そのくせ、知識、経験は蓄積されて行く。やりたいうこと、やり残したと思うことなどが次から次へとふくらんで行く。どうあがいても、生きている間に満足するほどの結果が出せそうにない。ゆとりがない、目標にたどり着いたとたんに、次の道が見えて来るものである。誰にとつても人生は未完成のまま、燃えつきないままに終わるものらしいというのが昨今の感想である。まあこの辺でいいかと思ひやすらうところには、なかなか到達

しないものである。

老いにさしかかった会社人間が車の中で空想にふける。自分の頭を胴から外し、洗濯物を出すように病院に預け故障の箇所を修繕してもらう、会社人間が心ひかれるのは病院できれいに洗濯された頭脳ではない、家でぐっすり眠っている胴の方である。川端康成の「山の音」が書かれて半世紀余がたつが、情報と音の洪水を泳ぐことに疲れた現代人の空想と読み替えても、そう違和感はない今日である。

年をとれば、記憶力が衰えるのは当たり前というのは思い込みらしい。脳の「海馬」を研究している池谷裕二氏の解説によると「若いうちのほうが記憶力がよかったように感じるのは頭の中に入っている知識の総量が少なかったからだ。それに脳は初回の記憶力は鮮明に覚え、マンネリ化した記憶力は排除する傾向にある。従つて経験を積んで初体験が少なくなると排除される記憶も増えてゆく。一時的に忘れてしまつても、その内容を誰かにいつてもらうと『それだ』と分かるものだ。すぐに思い出せない情報も消えてしまったわけではない」と。

「老人が老いを自覚することほど世に難しい問題はないらしい。これができたら達人である。いい年をして俺はまだ若い。若いものに負けるもんか、などと口癖にしたらもう末である」と中野好夫氏の老人性症候群評がある。

よい熟年人生は、生活の質が高く、目や耳がよく、平衡能力や敏捷性が高いという結果がでているようである。



石との戯れ

人生の設計は自分の時計に合わせて生きてゆくことである。そして大きな人生の満足を残すことができる。そしてしたい。

人間は試練に耐えるためにだけ生きている時期もある。

何のために長生きしたいか。人生は一回限りだから長生きしたやつが勝ちだと思う。

いつかきた道

大 泉 潤

自衛隊の海外派遣を機に日本国の国際的役割、貢献についての論議がやかましい。メディアの論調は国民を危険にさらすな、アメリカの手先になるな、と叫んでいるようである。

世界史を繙くと、人が意識を持ち、記録を残すようになって以来争いが絶えたことがない。財宝を狙う事件、宗教的野心に基づく争い、未開地の冒険、境界を巡る地域紛争など枚挙に暇がない。むしろ世界に全く争い事がなかった時期は見出すことが難しい。

日本の最近の国際的立場を、指標に基づいて整理してみる。二〇〇〇年における国内総生産はアメリカ九兆八千億ドル、日本四兆八千億ドル、以下ドイツ一兆九千億ドル、イギリス一兆四千億ドル、フランス一兆三千億ドル、中国一兆一千億ドルと続く。一人当たりでも三万八千ドルと第三位に位置している。このような繁栄は何に

由来しているのだろうか。日本人の勤勉さ、礼儀正しさ、几帳面さ、進取の気性など挙げれば多数ある。加えて地政学的に恵まれている事情と、我々世代を含む先人の努力を加える必要がある。

日本の輸入は七億七千万トン、三十兆円であり、主な品目は原油、石炭、鉄鉱石、木材、食料などをアメリカ、中東、韓国、中国、オーストラリアなどから調達している。一方、輸出は一億トン、三十三兆円で、機械、乗用車、電気製品などをアメリカ、中国、韓国などに買ってもらっている。国民一人当たりで計算すると、なんと六トンの原料を輸入し、加工し、消費して八百キログラムの製品を輸出して、日本は生きているのである。このような数字を並べると、日本列島では、コンベヤーラインをハイスピードで回し、ロボットを最大限に利用して必死に頑張っている真面目な日本人がひしめいている姿が目につく。輸入、輸出の差の六、七億トンは煙・気体となつて大氣中に排出されるか、固形の廃棄物となる運命である。想像を超える数量の物資が、この国土を通過し、滞積している。世界から原材料を買うことが出来な

ければ、燃料も食料もなく、国民の大半を失うことにもなりかねない。あるいは明治維新前の経済成長のない、自給自足の暮らしに戻らなければならない。今や日本は、気の遠くなるような大量の物を必要とし、消費し、処理しているのである。

日本は歴史上最も豊かで安定した時代を今享受しているといえるのではないか。多くの日本人はこの状況が将来長く続くことを願っている。しかし、日本を取り巻く国際環境は決して楽観を許さない。日本の能動的な行動がない限り、世界から取り残されることになる。

国際紛争はここ数年アフリカ、アジアで数多く毎年二十から三十件発生している。政権争い、領土争い、民族紛争、宗教問題に起因するものが多い。これは世界人類の宿命としか説明の仕様がな^い。従って、このような争いが局地的で、わが国に影響がない場合は拱手傍観^{きやうしやう}が可能である。

しかし、九・一一テロ以来様相が一変した。世界のどこでどんな規模の事件が勃発するか予断を許さない時代になった。恐ろしいことである。危険を未然に防ぐこと

が出来ればこれに勝つことはない。イラクの安定が世界の安全に資すると考えると考えるのは論理の飛躍ではない。情報操作に踊らされる愚は避けなければならないが、今や日本は江戸鎖国時代に逆戻りは出来ない。自給自足で資源がなく、世界に友をもたない国には戻れない。また永世中立のスイスとは立地、規模が異なり手本とはならない。

資源の獲得を實力に訴える時代ではなくなった。平和裡に安定的に調達できなければならない。しかし、天然資源のあるところに国際紛争が頻発している。イラクは石油埋蔵量世界第二位の十一パーセントを保有している。天然資源を武力で確保する實力は日本にはないし、行使すべきではない。外交努力、経済力、民間交流などの総合力で世界と仲良くする以外に生き残る道はない。

また自衛隊の派遣について考えてみる。防衛庁、防衛大学、自衛隊は世界で三番目の国防予算を持っている。アメリカ三千億ドル、ロシア六百億ドル、日本四百四十億ドルである。以下中国、イギリス、フランス、ドイツが続く。日本の防衛関係者は、なけなしの国家予算から大きな割り当てを受けて、日夜戦闘の訓練をしている。

二十五万人の自衛官が五兆円の国家予算を配分されている。そして派遣の実績といえ、被災地救援、急患輸送、搜索救難、消火支援などである。海外へはカンボジア、中東ゴラン、ルワンダ、ザイルなどで平和協力を行っている。今この時点でイラクに出張し国家建設に協力するのは当然と考える。

六十年前の第二次世界大戦の記憶をたどってみる。少年時代に家を焼かれ、あるいは空襲の危険を逃れるために地方へ疎開の経験を持つ人は多い。都会から移住した人は様々な経験をした。食べるものがないから川の泥鰌、苗を育てた後の栄養も味もない甘藷、芋の蔓、葉や、空腹のあまり道端の雑草を口にした人も多いはずである。着るものも配給制で庶民に割り当てられるのはスフばかりで、一回袖を通し、洗濯をするとなれよれになり、縮んでしまう代物であった。やっと抽選の運動靴が当たり、大事にしまっておいて、よそ行きの機会に履いてみたら一回で底が割れて水が浸み込み泣く思いをしたこともある。物資が豊かでないとな人の心も荒れる。疎開先で棒を持った地元の子に追い回されたり、金品を要求された経験をもつ人も多い。

なぜ第二次世界大戦は起こったか。資源を持たない

国々が植民地を持つ列強に挑戦したのが起因である。不況、恐慌に苦しむドイツ、イタリアが資源を求めて侵略に追い込まれたのが発端である。これに日清、日露戦争に勝利するという実力以上の幸運に恵まれた日本が呼応した。対外戦争に勝利を収め、軍需景気と賠償金で豊かな生活を知った日本人は真面目な思考を失った。資源を持つ領土さえあれば、欧米列強と肩を伍してゆけると錯覚した。折からの不況に窮した日本が中国、東南アジアへ触手を伸ばすことになった。盧溝橋事件に始まるノモンハン事件、北部仏印、真珠湾攻撃を経て日本は引き返すことの出来ない泥沼に突入した。軍隊が自分に都合の良い統帥権という絶対権力を握り、国の将来を誤った。狂気が支配し、良識は沈黙せざるを得なかった。

日本は今つけを子孫に回し、平成元禄を享受している。しかし眼をグローバルに開けば細いタイトロープを渡っていることに気付く。一步間違えば昔の歴史を歩む危惧なしとしない。いつかきた道に後戻りしてはならない。

四十年前の東海道新幹線（その一）

大塚 滋

今年（昭和七十九年）東海道新幹線が昭和三十九年に開業してから四十年が経つ。この間、新幹線は区間、速度、列車本数、車両数、利用客などあらゆる点で拡張、増強を続け、世界の超高速鉄道の先駆者となり、模範となっている。当時のフランス国鉄総裁が「新幹線は世界の鉄道を斜陽から救うものだ」と絶賛したが、四十年経った今、ヨーロッパのみならず韓国、台湾、中国まで超高速鉄道による鉄道復権の魅力に取りつかれている。

その新幹線も昭和三十七年の試運転のころから開業にかけて、今では考えられない試行錯誤、珍事件、秘話、危機一髪などが絶えなかった。その一端を披露して、生みの苦しみ、関係者の熱気をしのぶこととしたい。（一部法に抵触することもある。しかし四十年前のこと、もはやすべて時効である）

時速二一〇キロという当時としては未知の高速に挑むため車両、地上とも長期にわたる広範囲な試験が必要ということで試験線が先行建設され、鴨宮から東へ三二キロ、綾瀬までの区間が選ばれ、これをモデル線、鴨宮に設置された担当区をモデル線管理区と呼んだ。

昭和三十七年五月十七日鴨宮の車庫に二両、三十日に四両の試作車両が搬入され、六月二十日ようやく完成した僅か二キロあまりの線路で、時速七〇キロの試運転が行われた。これが新幹線の車両が新幹線の本線上を初めて走った記念すべき瞬間であった。

○六月二十六日、十河総裁出席の公式試運転が行われたが、その前日のテスト走行で、テスト区間の終点に停車したところ、電車の重みで線路が沈下、パンタグラフが万歳して架線に届かなくなってしまった。急ぎよ、電気屋を招集して架線を下げ、ようやく脱出することができた。翌日に備えて念入りに線路の搦き固めを行ったが、のびきった、なんとも無様なパンタグラフを見て、一時

はどうなることかと冷や汗ものだった。

○鴨宮の車庫の南側、東海道線との間に幅一メートルほどの小川があった。灌漑用水はきれいだ。ここにウナギがいることが分かったので、そこはお手のもの、高圧電流をかけると面白いように感電、失神したウナギが浮かび上がる。（これは法に触れる）これを車庫でカバ焼きにして食べる。当時としては絶品、しかし、どうも味がおかしい。誰かが「潤滑油の匂いがする」という。それもそのはず、車庫からの排水の一部は、この川へ流れ込んでいるのだ。平気で食べた。後になって気が付いたが当時、変圧器にはPCBが使われていた。それも混じっていたに相違ない。PCB汚染のウナギを食べたのだ。車庫の焼却炉では何でも燃やした。ダイオキシンも出ていたろう。まだDDTも散布されていた時代だ。そんな環境の中で二年余り、私も含め全員元気にモデル線を卒業していった。「知らぬが仏」とはよく言ったものだ。

○モデル線の成果の一つとして忘れてならないものに試

乗がある。当時、鴨宮の仮ホーム（当時の名称）から試乗され、時速二〇〇キロの速度を体験された方もいらっしやるはず。その際の運転指示、車内放送はすべて私の担当であった。昭和三十八年から三十九年にかけてはアメリカの宇宙飛行士グレン中佐、秩父宮、高松宮・同妃、三笠宮をはじめ各国の大臣、大使、鉄道総裁など有名人の試乗が相次いだ。試乗券を配っての一般試乗、家族試乗も試験の合間をみて頻繁に行われた。試乗客によってA、B、Cに分類し、Aは床の油拭きなど最上級の整備・清掃、Bは掃除と清掃、Cは掃除だけとし、Aの場合は運転士まで動員、深夜までかかることも珍しくなかった。労働問題の厳しいころだったが、モデル線だけは別世界であった。

○試乗が増えるに従って、貯蔵式の便所汚物タンクが満タンになり、この始末をどうするかが大問題となってきた。車庫にはまだ処理設備ができていないので、人家のない林の中でタンクの排出コックを開けたところ、排出の勢いが強すぎて路肩を大きく削ってしまい、保線側か

らお目玉を頂戴した。万策尽きて、夕闇にまぎれて酒匂川の鉄橋上に電車を止め、コックを開けた。物凄い勢いではるか下の川に落ちるのを見て、立ち会った全員我がことのようにすっきりしたのを覚えている。「これでアユがよく育つぞ」「俺は食べないよ」酒匂川はアユで知られた川である。味を占めてそれから何回かこの手を使ったが、幸い見つからなかった。(アユの生育には寄与したろうが、明らかに水質汚濁防止法違反である)

○モデル線管理区の南に酒匂川自動車教習所があった。マイカー時代の始まりとあって何人かの区員はここに通っていたが、仕事柄、予約通りに行くことが難しい。そこで一計を案じ、人気の高い試乗券と引き換えに、予約なしで、行ったらすぐ、それも毎回同じ先生に教えてもらえるように話をつけた。教習所はこの券を警察に渡していたようだ。なにかとお世話になることは容易に想像できる。二重、三重の便宜供与である。しかしそのおかげで無事免許をとることができ、以来今日まで日本、アメリカ、タイで通算約六〇万キロを走ったが、国鉄在職

中あれだけ乗った新幹線には、退職してから今日まで二十年経つのに乗ったことがない。引越し、旅行、移動はすべて車、よって「後何年、運転が出来るだろうか？」が目下の最大の関心事である。

○時速二〇〇キロで走るようになって、先頭車の前頭部にスズメやハトなど鳥がぶつかることが増えてきた。バシッという音とともに羽が飛び散り、ガラスに血痕が付く。思わずガラスが割れないかと顔をそむける。窓の下に網でも取り付けて回収し、焼き鳥にしようか。カバ焼きに焼き鳥、モデル線名物として売り出そうかなどと冗談を言っていたが、一年も経たないうちに全くぶつからなくなった。鳥の世界にも情報の伝達手段があつて、白と青の電車は早くて危ないから近寄るなということが周知徹底されたとしか考えようがない。この不思議な現象は東京・新大阪が開業した時も同様であつたが、モデル線ほどはぶつからなかったというから、情報は東海から中京、関西まで広く伝わっていたに違いない。

(第十二号に続く)

JSP（降伏日本軍人）を追求して

大庭 定男

太平洋戦争で日本軍が降伏したとき、南方には七十万人の軍人、軍属、一般邦人がいた。その数がいまにも多いため、連合軍はこれを捕虜として直接管理しきれず、このため、JSP (Japanese Surrendered Personnel) というカテゴリーを作り、軍の組織はそのまま、規律維持、給与、衛生などは従来どおり日本軍の責任で行うことを命令してきた。『捕虜』の汚名をまぬかれた日本軍は安堵すると同時に『大本営命令により降伏した軍隊には捕虜以上の名誉と待遇を与え、強制労働はさせない』ことを申し入れたが、その後の待遇はジュネーブ条約に定められたものよりはるかにむごいものであった。

例えば、

① 仏印、蘭印では現地武装勢力との戦闘に日本軍を動員した

② 禁止されている危険、不潔な作業を強制した。地雷

の除去、百キロ入りの米袋を背負って船に積み込ませたり、倉庫、住宅建設で高所の作業を行わせ、ニューギニアに連行された戦友の学徒兵は墜落、死亡した。数々の不潔な作業の中で最も嫌がられたのは糞尿処理と死体発掘であった

③ 戦時中の半分近い一八〇〇——一六〇〇カロリーの給養で重労働をさせた。私たちは常に腹ペコであった

④ 一九四六年夏までには全員を復員させることが出来たのに一万三千人をさらに一年間残留、強制労働させた。

このような不法行為に抗議すると『我々の捕虜に行ったとおりのことを行っているに過ぎない』と取り上げなかった。『異国の丘』の悲劇は南方でもあったことを忘れてはならない。

戦時中、ジャワ島バンドンで主計将校として勤務していた私は進駐してきた英軍の命令で寝具、食料、衣類などの補給、渉外業務を時には不眠不休で行い、翌一九四六年六月タンジョンプリオク港作業隊に移り、港湾作業、通訳、英軍将校官舎住み込みなどきつく、気骨の折れる

労働に当たった。当初三カ月で復員できると思っていたのがさらに一年間の残留命令で、ようやく復員できたのは一九四七年五月であった。

復員後、日本軍の捕虜虐待などの話を聞くにつけ、『日本軍の当事者は戦犯裁判で処刑または投獄されており、歴代の首相は謝罪している。同じようなことをされたJSPは何故捕虜以上にむごいことをされ、一年余分に抑留・強制労働させられたか。英、蘭軍の関係者はいかなる処罰を受けたのか』を追及、ロンドン駐在中は英国公文書館に通い、当時の英軍側の公文書を調べた。帰国してからはマレー、シンガポールでの抑留で苦勞した学徒出陣組、国際法学者などと『JSP研究会』を現在までに三十回行い、研究発表、討議を行っている。最近、これを聞いた英国人の研究者が加わった。

また、英国、オランダでも講演を行い、

一、日本軍の連合国捕虜、民間抑留者取り扱いには国際法違反があったことは認める。しかしその多くは戦中の極限状況での出来事であった。このために多くの戦犯処刑者が出た。戦後、捕虜、抑留者に支払いもし、日本

への招待など現在でも続けている

二、戦後のJSPの受けた待遇はそれ以上にむごいことも多々あり、また、その連合国当事者が処罰されたとも聞いていない。これでは真の和解は難しい

三、双方が互いに歴史的事実を学び、その過ちを繰り返さないよう、次の世代に伝えておくことが大事なことである。戦争体験者はとかく自分の体験だけで判断しがちであるが、全般の推移を知るため、自国のみならず、相手国の公式戦史など、権威あるものを学習することが大事

以上を訴えているが、和解への道は遠い。戦後はまだ終わっていない。

自衛隊のイラク派遣に思うこと

岡 政 昭

一月九日夜、自衛隊の先遣隊のイラク派遣が発表された。心から復興支援の任務を果たして、全員無事帰国されることを祈るばかりである。翌十日には、米国防総省からイラクのフセイン元大統領が戦争捕虜として認定されることが明らかにされた。ジュネーブ条約にもとづく待遇とするわけで、アメリカの単独行動主義見直しの動きとして歓迎されよう。またアメリカの非公式訪朝使節団による北朝鮮核施設への立ち入りも伝えられた。

現在、最も関心が寄せられる世界の安全保障問題で、アメリカにとりイラクのテロが、日本にとり北朝鮮の核が、安保によって日米共通のリンケージとされている。

イラクは、イラク人による行政権の回復があるまで、アメリカ主導の占領統治下にある。国連はなお脇役にお

かれたままで、現地の治安悪化が連日伝えられている。派遣が日本政府の期待する非戦闘地域との保証はなく、むしろ失業に悩む住民のデモやゲリラによる自爆テロ、地対空ミサイルによる攻撃にさらされる被害を予測する向きもある。隊員が不慮の災害に遭い、万が一殉職された場合でも、戦争に参加しているのではないから、名誉の戦死ではない。また、オランダ兵逮捕の例にみられるとおり、誤認してイラク民間人の射殺が起こった場合、戦争ではないため当然に免責されない恐れもある。現場における瞬間の判断にもとづいての隊員の自衛行為が、事後的に果たして正当防衛ないし緊急避難の範囲内であったか、否かの裁判は当事者に公正であつて欲しい。

アメリカによるイラク戦争の名分は、これまで大量破壊兵器が見つからず、結局フセイン政権の打倒に求められることとなった。あらためての国連決議なしに行つた先制攻撃は国際法違反との疑義が残るものの、結果は国際社会に追認され、アメリカの同盟国は事前の確執を超えて、イラクの治安回復と復興支援の大義に協力するこ

とを約した。ただし自国の国情に適したやり方であり、フランスは兵力を派遣していない。日本は、特別措置法を制定、自衛隊の派遣を決めて、アメリカの国益に追随した。湾岸戦争から得た教訓であり、日米同盟がまさに目に見える形となり、従来の一国平和主義からの脱却である。実質は安保に基づく日米同盟のなし崩しの双務化、形式は多国籍軍への参加による国際協調と言えよう。

あくまで仮定の話だが、もし自衛隊員に尊い殉職者が出たとき、多国籍軍・日本隊の任地が戦闘地域化したとして派遣を撤回できるだろうか。おそらく復興支援からの卑怯な撤退と国際社会に映り、撤回は困難であろう。勇気ある行為とは引き続きの駐屯であり、国連主導による集団的行動―平和維持（PKO）にも任じ、応急のインフラ整備という任務は逐次、恒久のODA・NPO活動に繋がれていこう。形式はともあれ、国連傘下における平和と安全の維持への貢献である。

憲法前文がうたう、国際社会において名誉ある地位を得たいとする国家的希求は、危険な任務に就く勇気ある

行為を自衛隊員に要求する。然りとすれば、この国の為政者は、集団自衛権が日本憲法上認められないかぎり、自国の領土外のイラクで、武力行使に加担することは国連憲章による以外不可能という主張を、アメリカに対し全うすべきであろう。

論憲、改憲、護憲いずれの立場をとるにせよ、日本の国防と国際平和を考えると、非国家組織によるテロ勢力の脅威、破壊および侵略行為は、国民に切実な問題となってきた。北朝鮮の拉致問題はならず者国家組織による例外としても、イラクにおける二外交官殉職をはじめ、海外勤務者・旅行者の誘拐など、いつ、どこで危険が起ころうとも不思議ではなくなった。今や世界に開かれた日本に、地政力学的な現実の対応が迫られる。平和の配当を享受するための安全保障コストは、ひところタダと思われた水や空気的环境コストと同様、国家の財政、個人の家計に織り込まなければならなくなった。先人の匠（たくみ）は周囲への調和をどう按配したことであろう。その感性と理性を学びたい。

無宗教

折戸 常司

昔流の数え年で八十歳になったせい、年賀状よりも喪中挨拶状が目立って多くなり、しかも同じ年ごろの長年の友人の訃報に接する機会が増えた。今や日本人男性の平均寿命は八十歳近くなってきたが、大正生まれの同期の友人の死には、自分も何時死んでも不思議ではない年になったことを自覚させられる。

この世に生を享けて以来、人間は生涯『社会』という水の中にとっぷりつかって泳いできた。この水瓶から飛び出る魚はどんなことになるのかはどんな幼児でも知っているのに、さらに大きな、丈夫な水瓶に移してくれる『神』の存在を一方的に信じて心の平安を得ているのではあるまいか？ イスラム教、ユダヤ教、キリスト教など西欧の一神教は客観的にみればこの色合いが濃く、特に自衛隊を派遣した中東では、イスラムの歴史的文化的

的水瓶の中で思考し社会生活を意識しているから他の水瓶の存在は自らの神聖な水瓶に穴を開ける敵としか映らないようだ。ユダヤ教も旧約聖書の水瓶にとっぷりつかって、この水に住めるのは神から選ばれたユダヤ人だけだとの優越感が血縁を構成しており、この人間の排他的生存本能は今日の中東にても脈々と続いている。むしろ遠く離れた東洋や南北米大陸の多神教社会の人類の方が自分の命を自然の営みの一つとして悟って生きているのではないだろうか？

古い固定概念から抜け出て新天地を求めて北米大陸に渡ったピューリタン、奴隸としてアフリカから移住させられた黒人、白人支配に抵抗するインドネシアのイスラム教徒など、その信条は多様だが、宗教の相違が根強い恨みとなってテロなどの残虐行為が頻発する時代となってきたことはなげかわしい。

私が定年後、青年海外協力隊の帰国時研修講師のころ、帰国した隊員が異口同音に訴えた途上国での苦勞話は、着任早々「貴方の宗教は何ですか？」と問い詰められた

ことだと回顧する。青年時代まで宗教に関心の薄かった青年は、実家の仏壇を思い浮かべて「仏教です」と生返事をしようものなら異教徒として徹底的に調査され、クリスチャンだと弁明すれば、欧米人の回し者だと畏敬の眼でみられ、途上国の人々と溶け合うことがなかなか出来なかったと述懐した。先輩からこの苦勞話を聞かされた新規隊員は「無宗教です」と逃げの一手をうったつもりだったが、教養のない野蛮人だとさげすまれたと述懐する。

しかし、もともと日本には宗教という概念が無かったのではなからうか？ 人間の生存に比較的適した温暖な列島に渡来した民族は温和な原住民との融和に成功し、その融和を基礎として国づくりをしたとの神話からも、自然の命ずるままに自然に感謝して生活してきた民族で、信仰の根本は祖霊信仰になる。我々の存在は先祖から、子孫へつなぐ一コマで、今日一生懸命行き抜くことが大切で、祖先のなし得なかった思いと産霊（むすび）の力の感性を一つにしたいと願うのが神社参拝の国民的宗教行事である。自身が死後も永遠の命を得て思いを遂

げたいと願う一神教とは異質な信仰だろう。

仏教もインド諸思想の影響のもとで宗教として成立したこのことで業苦・輪廻・解脱の説は古来のインド思想を継承しながらも阿弥陀仏などの長い修行により仏教として日本にも伝えられたが、当時の日本人は神仏混交して一つの宗教として受け入れたようだ。

地球上に生を享けた生物はお互いに^{ねぎら}労いあう自制心と相手の考えを受け入れる心のゆとりがなければ平和は来ない。自衛隊イラク派遣に際し老婆心ながら『人道主義』とは具体的に何を旗印としているのか反芻してほしい。

猫の恋

岸 本 義 生

しばらく行方をくらましていた野良猫のミイは、三月末に恋の放浪から帰ってきた。猫の最もはげしい発情期は早春。我が家の周辺には多くの野良猫がいる。季節には毎夜のようにうなり声や切ない鳴き声が途絶えない。

「猫の恋」は俳句でも春の季語として使われ、小林一茶も「あまり鳴いて石になるなよ猫の恋」と詠んでいる。

一茶は五十一歳で二十八歳の菊と結婚するのだが、百済遠征に赴いた夫の大伴狭手彦を恋い慕うあまり石になったともいわれる松浦佐用姫の故事をもじって、嬉しさのあまり自分が石になるのでは、との気持を詠んだとされている。それほどまでに猫の恋は激しい。

ミイは七年前から我が家に出入りしている雄猫で、交尾期には時によって何週間も見かけないこともある。どうしたのかな、と思っていると薄汚れた姿で現れる。しかし今年は違っていた。耳から首筋は血まみれになって

いる。雌の奪い合いで若い猫にやられたのだろう。ところがそれだけではない。顔も黒ずみ粉を吹いたように斑で、まるで違う猫のようだった。

見るのも気持ち悪いが、七年もつきあっていると情が移り衰れを覚える。二年前に兄弟の野良猫ブラツシイが死んだので彼は天涯孤独になっていた。

ペット病院に問い合わせた。「多分ダニにやられている。注射すればよいのですが、一回三千二百円で四回必要です」という。捕まえるのは汚いし簡単ではない。

とりあえず消炎剤をもらうため病院に行った。ペルシヤ猫を抱えた女性がやってきた。相手は高級マンション、私はホームレスのような気分としか言いようがない。薬を待っている間にも犬を連れた女性も次々とやってくる。どの犬も値段は高そうだ。やがて三頭のポメラニアンを連れた活発そうな婦人が来たので声をかけてみた。「病気ですか」「いいえ。定期検診なの」「え。犬にもあるのですか」「そうよ。人間と同じだわ。この子らは親子なの」。定期健診とは恐れ入った。

今度は婦人が聞いてきた。「貴方の犬は」「猫です。葉

をもらいにきました」「猫好きなの」「別に。でも可愛
い時もありますよ」「私、猫は嫌いな。高慢ちきで勝
手気ままで。ミャーミャーと寄り添うのは見せかけよ。
猫かぶりと言うでしょう」「でも好き好きですから」。

薬を与えても傷は一向によくなる気配はない。痒いか
ら掻くので血は止まらない。傷のせいとか、それとも汚い
体を嫌われて餌にありつけないのか、だんだんと痩せて
きた。死期が近いように思える。恋路の果ての病なら仕
方もないが、原因は知るよしもない。

この猫の性質は決して悪くない。だから他の場所でも
餌をもらいながら七年も生き延びてきた。我が家も自分
の領域と思っているのか、兄弟猫と助け合って他の進入
を許さなかった功績もある。何とかならないかとベツト
シヨップでダニ駆除の点滴薬を買ってみた。不思議なこ
とに数日後には回復の兆しが見え始めた。

ある朝、玄関のベルが鳴った。Tさんが立っていた。
彼とは挨拶は交わす程度で我が家に来たのは初めてだっ
た。彼の家が「猫屋敷」とも呼ばれるのは、いつも数匹
の猫を飼っており、子供が生まれても成長すると面倒を

見ない、だから野良猫が増えるというのがもっぱらの話
であった。ミイもこの家で生まれたのである。

「猫がお世話になっていることは知っています。私の
家には全然帰ってきません。」彼はどうぞと言いながら
箱入りのネコ缶を差し出した。「ネコ缶はいりません。
それよりも傷だらけですよ。薬も駄目でした。点滴薬で
少しよくなっているが、もう駄目かも知れません。兄弟
がいたでしょう。死んだときにお宅が留守だったので私
が市役所に持っていました」。

「そうでしたか。もし猫がお宅で死んだらすぐに知ら
せてください。私が市役所に持ってゆきます。あれは我
が家の七代目なのです。あの血筋では最後の猫です。」
「もう年だからお宅で十分に面倒をみてやればどうす
か」。うなずきながら彼は帰った。やがてミイの傷は完
治した。

Tさんの約束にかかわらず、ミイは夕方に姿を現し餌
にありつくまで辛抱強く待っている。何も変わらない。
変わったことと言えばミイが死んだ後は、もう野良猫の
相手になるまいと決めていることである。

北田 純一

ある日の朝日新聞に、このところ日本は長寿国のナンバーワンをつけているが、長生きも大切だが健康年齢がより大切だという記事が載っていた。思うに、健康年齢とは食料品でいう賞味期限のようなものだろう。ちなみに日本人の平均健康年齢は七十五歳だという。わたしはちょうど七十五歳。つまり、賞味期限ぎりぎりということになる。

そういえば最近、体力は当然としても、知力の衰えが著しい。無敵を誇った記憶力が用をなさない。肝心なときに言葉が出てこない。妻にすら「しっかりしてよ」とあざけられる始末である。さらに、気力の低下が追い討ちをかけてきた。

ペンクラブきっての文章家、西島力さんから電話がかかってきた。かれはむかし受けた交通事故の後遺症が発

症し、手足の動きが不自由になったので、思い切って手術を受けたが、結果は悪かった。歩くことも書くことも出来ないようになってしまった。せめてコンピュータが操ればと奨めたが、道具を工夫してキーボードを叩くことはできても、マウスの操作は無理。それでも、かれは夫人の助けをかり、口述筆記で文筆活動を続けた。

そのかれがペンクラブを辞めたいという。理由は、書くことが無くなったからだと訴える。悠遊十五周年記念号になにか気の利いたものを寄せたいが、まったく文想が湧いてこないという。唯一の楽しみだったペンクラブも、書くことがなくなったのではお終いだと、観念したのだという。同じように悩んでいたわたしには、かれの心情が痛いほどよく分かる。

先日俳句の名手、吉井米三郎さん、池田耕治さんから退会の申し出をうけた。ペンクラブについて行けなくなったという。西島さんを含め、だいたい似たり寄ったり、お互い期限切れの年ごろである。わたしはかねてより、人間にも旬があると主張してきたが、いざ、わが身が旬をすぎたとなると、さすがに寂寥の感を禁じえない。

わたしにはもう一つの持論があった。「文化の温床はカネとヒマだから、高齢化の日本には必ず老人文化が花ひらく」というものである。しかし、賞味期限が切れた老人と文化をどう組み合わせればよいだろうか。

先日、ある歌会に出席してその手がかりを見つけた。その歌会は老若男女十数名で構成されていて、熟達のものあれば初心者もいる。わたしはちょうど中間ぐらいのところだろう。ある先達が自作を披露した。

「デパ地下の昼深かむころ漂いてふぐもどきなど神妙に試す」というのである。花鳥風月の伝統的短歌からすればいささか俗っぽい。しかし面白い。のんびりした感じは『悠遊』に通じる。

たしかにデパ地下には神妙な顔をして試食と称するつまみ食いに精を出す老紳士が横行している。

ご婦人の厚かましい所作を「おばさんする」というが、「爺さんする」もたしかに存在する。こんな歌を臆せず披露すること自体、老人のずうずうしさの発露である。

この歌を読んで、わたしは山崎放代歌集を思い出した。

かれは兵役で戦地に赴き、被弾して視力を失った。復員してみると、実家は戦災で焼失し親兄弟も死に絶えていた。天涯孤独の傷病兵になったかれは、やっと篤志家の温情で裏庭の小屋に住まわせて貰い、六十一歳で没するまで一人ぼっちで短歌を詠みつづけた。

目が見えないから花鳥風月を歌うのは無理である。戦争で学校に行けなかったから難しい言葉は頭にない。心の中に浮かんたままをやさしい日常語で詠んだ歌ばかりである。たとえば「卓袱台の上の土瓶に心中を打ちあけてより楽になりたり」。なんとも淋しいが、妙に安らぎを感じる。恥も外聞も投げ捨てた素直さが感じとれる。

歌人の常だが、生きている間はかれの歌は話題にも上らなかった。それが死後、歌集が出た途端、評判を呼んだ。時代が彼の歌を必要としているのだろう。時代は賞味期限の切れた年寄りのとぼけた優しさを求めているのである。

錯覚

金 京 法 一

理性的存在と自負し、英知界に君臨する人間であるが、その理性ほど危ういものはないと、今から二百二十年前にカントは考え、かの「純粹理性批判」を書いた。当時とは比べ物にならないほどのデータ集積能力と分析技術を開発した今日でも、人間の営為にはなにか一抹の不安が付きまとうようである。

ついに日本は自衛隊のイラク派遣を決めた。これまで戦闘地域への派遣を反対、あるいは躊躇し、頑なに拒んだ理由として次の点が挙げられる。

- 一 法治国家として、憲法にもとめることは出来ない。
- 二 近隣諸国をはじめ、各国はいかなる形であれ、日本の軍事行動に反対である。
- 三 国民が等しく反対している。
- 四 軍に活躍の場を与えると、やがては軍が国政の実権

を握り、戦前の悪夢が再現されかねない。

一については、かつて内閣法制局が国会答弁用として準備したものが金科玉条のごとき憲法解釈として罷り通って来たが、最高裁の憲法解釈を仰いだ形跡がない。法治国家といながら、法の手続きが完全とはいいがたい。問題があるなら、賛否いずれの側も出るところへ出て争うべきである。二については、早速政府要人を各国に派遣し、日本の意図を説明したが、中国のような特殊な国以外、いずれの国からも反対は出ていない。三については、ちよつと考えさせられる。この見解はジャーナリズムがいつも援用するものであったが、最近実際に行われた調査では、半数前後の国民が派遣に賛成し、さらに自衛隊員に死傷等の事故が起きても、そのことだけで撤収すべきではないという結果が出ている。四については、あつものこ羹に懲りて膾を吹く類の議論であらう。戦前近代国家として未熟な日本はそうであつたが、当時でもほとんどの国では軍に対するシビリアン・コントロールは機能していたし、現在も先進国ではそれが常識である。日本人だけが異常性格者と言っているようなものであらう。

軍事最優先のファシズム体制下で行われた戦争の悲惨な体験、近隣諸国からの怨嗟^{えんさ}の声、そして戦後の経済的成功体験が日本人、特に、国政や言論のリーダーと自認する政治家、学者、ジャーナリストに錯覚を起こさせたのではないだろうか。選挙の時以外は、国民大衆としてややさげすんだ目つきで眺められている人々の方がほとんど冷静なのではないか。

昨年は、アジアを襲ったSARS、アメリカ東部とイタリアの大停電、カリフォルニア州の山林火災、北海道の出光興産製油所火災等、予期せぬ大災害が続発した。いずれも自然災害であるが、それに対応する人間の側に重大な問題があったことが指摘されている。

もともとクマネズミの病気であったベストが大航海時代の到来とともにヨーロッパに持ち込まれ、大流行して社会経済に大打撃を与えたのは有名だが、戦後も似たような例としてアフリカから持ち込まれたラッサ熱やエボラ出血熱などがある。SARSも経済開発の波が奥地に及んだ結果で、いずれも人間のフロンティア開拓と無縁

ではない。

大停電は文明の大動脈で、最新の技術で統御されていたと信じられていたシステムが、如何に脆弱であり得るか、しかも原因究明すら容易ではなく、人間の統御を拒否するモンスターであることを暴露した。また山林火災や製油所火災では、過去の経験等から、十分と期待されていた人間の対応能力をはるかに超える事故の可能性を示唆している。

これら文明災害に対して人類は科学・技術の無限の進歩を信じ、それによって対処できると錯覚してはいないだろうか。科学・技術はやがて新たな文明災害を引き起こす培養機構たりうるのである。人類がその無限の欲望の追求、あるいは幸福を目指して自然を支配下においてと自画自賛しているとき、自然は人類が予想もしない局面で反撃に出ているのかも知れない。

カントは理性を正しく支えるものとして道徳を、さらには美を挙げているが、現代人に求められている理性の規範は何であろうか。

若返り術

黒崎 昭二

私は現役を引退した『毎日が日曜マン』。一般の若い人との話題を合わせるために、また自分自身の若返りのために意識して、週日のテレビはこんなを見えています。ニュースと特集のルポルタージュものは大抵見ています。かつての企業戦士時代よりグッとソフトな番組が主体です。大体はNHK。朝「おはよう日本」を眺めます。男性の三宅民夫アナと女性の高橋美鈴アナが交互に司会をしていて、これによって世の中の動きがわかります。また女性アナの服装の彩りにワクワクしています。

この後は朝の連続ドラマを見ています。これは新しい女性俳優の登竜門みたいなもので、例えば「おしん」で登場した小林綾子らです。この後は民放で人気のTBSの「はなまるマーケット」（8・30―10・20）に切り替えます。かつての若者のあこがれだった渋谷隊の一人、

薬丸裕英（通称ヤックン）と女優の岡江久美子が二人でキャスターをしています。私は男だから岡江久美子の若やいだ声での司会が好きです。その脇でサポートしているのが同じく女優の森尾由美です。さらに曜日替わりで若い女優が出て来て適度に話題を展開していきます。陣内貴美子（元バドミントン女子チャンピオン）も顔を出しており、三田寛子や早見優も登場してきます。古稀を過ぎた男にとっては明るい女性の声は魅力的で胸がワクワクするのです。その時々で話題に上っている人たちをゲストに呼んで、その生い立ちやら抱負やらを聞きだしたり、比較的若い奥さんを入れての家事万般や買い物などについてのクイズも面白い。主として家庭の若い主婦層を対象にした番組で、オシャレもあるし料理の紹介もあり子育ての話もあります。

往年の仕事の鬼は若いころは家庭を顧みず、ほとんどすべてを女房にまかせっ放しにしていたわけで、およそ見たことのない番組です。家庭を守る主婦や娘たちの気持ちを知るのに好適で、情報源にもなります。この時間、NHKでは「生活ホットモーニング」という似たような

番組があり、ほかの民放局でも同様な番組がありますが、私はあえて「はなまるマーケット」を見ています。

さて、テレビは今や女子アナが報道番組にも、スポーツ解説などにもどんどん進出しており、男性アナと違った甘くて明快な声で情報を伝えてくれます。私は大歓迎で彼女たちに感想を手紙で書いて送ります。ファンレターです。サポーターともいえましょう。返事のあるなしにかかわらず、彼女らが読んで微笑んでくれればと思います。手紙を出すのです。返事があれば「天にも昇る」心境になります。これホント！ 時には返事があるのです。爺はニコニコ。

昼になると、フジテレビのタモリの「笑っていいとも」を見ます。この長寿番組はタモリという類稀なるエンターテイナーの司会で見えて飽きないのです。世界的な長寿番組です。目下売れている芸能人が登場し、笑いの種をまいています。バカバカしいが、この番組にゲストで出て来た御仁は、さらに人気が出て来るようで、次の大河ドラマで目立つ役についたりしています。この番組

の後は小堺一機の司会による「ごきげんよう」があり、芸能人のたわいもない身辺の話題を展開して終わります。この二つの番組は観客がいて出演者とのやりとりもあります。参加しているのはほとんど若い女性で、ウィークデーでも客は一杯です。

NHKでは午後一時五分から「スタジオパークから」をやっています。上田早苗アナと小田切千アナが取り仕切っています。主にNHK番組に出演している俳優や作曲家などを招き、意外な素性や素行を聞き出す気楽な番組で、個人や業界の裏事情がわかります。わかりやすい時事解説も出て来てすぐ役に立つのです。

さらに一つ「徹子の部屋」という番組が、テレビ朝日（13・00—14・00）にあります。黒柳徹子が「時の話題の人」とインタビュールし、よい味わいを出しています。午後には「ワイド」番組と称して事件や人物の裏側の事情を探り出している暴露的な番組が民放各局の競争といった感じで沢山ありますが、爺はこれはあまり見たくありません。仕事を勇退してから、世の中もろもろの事情を仕入れて、若返りもしくは老化防止を図っています。

情報通信の国際競争力

許斐 義信

情報通信産業は、産業競争力で陰りを見せていたブラザ合意後の米国を再生させ、再び世界の産業革命のリーダーの座に返り咲かせることに成功した。また米国以外にも米国と同様、情報通信産業の成功で、当時ソ連の崩壊で経済が破壊していたフィンランドを、世界第一位の国際競争力のある国へ復興させた例がある。同国の携帯電話会社のノキアは数年間に国際競争力をもつ確固たる地位にのし上がり、第二世代の携帯電話で世界一位の座に踊り出た。ノキアは日本全体の携帯電話の生産台数の数倍を生産している世界の巨人である。

さて一九八五年のブラザ合意では、国際決済通貨ドルの信託を回復させるために先進諸国がこぞドル買いに協力したが、それは米国の輸出競争力を為替で後押しして貿易収支の不均衡を是正することにその目的があった。為替だけでは競争優位の回復は困難と見て、米国は

軍事技術の民需転換を決意したのだが、その軍事技術の最たるものが通信技術であった。

当時の日本は世界で唯一、通信機械貿易で対米貿易収支が大幅な黒字であって、過信していた。したがってNTTの機器調達問題やモトローラ方式の携帯電話の国内参入問題などは、どちらかといえば勝者の立場で米国再生を支援するという態度であった。局用交換機を輸入したり、米国の通信機器需要にはわざわざ米国に工場を建てて生産したものであった。その後問題となるインターネットの通信機械も国内生産を停止して、ネットワークの中間に位置する機器は積極的に輸入に切り替えた。また携帯電話でもNTT方式の技術的競争優位を疑わなかった。このもろもろの行為の結果は、推して知るべしである。

富士通や日本電気は、虎の子の技術者を放出し、今や基礎開発すら危うい程度の技術力しか維持できず、携帯電話に至ってはさらに惨憺たる結果で、NTTドコモの開発した第二世代の国内標準PDCは日本だけの仕様で、世界に通用しない。携帯電話の端末機ぐらゐは家電

的製品だから、日本企業が世界の市場を支配出来てよいはずだが、それさえもノキアやモトローラに比較して微々たる量に止まっている。その理由が振るっている。つまり日本企業は競争力のある魅力的製品を開発・生産はできるが、特許料を支払うと利益がでないというのである。

世界の巨人AT&TやBTですら後れをとり、最大の通信機器メーカーであったルーセント・テクノロジやノテルですらインターネット機器では振るわなかったのだから、技術革新を甘く見ていた点は、仕方がないのかもしれない。しかし、携帯電話では成長が期待されていたにも関わらず独自仕様にこだわったため惨憺たる結果になったのは何故だろうか。そこには通信インフラ技術を持つNTT、基地局に専念してきたNTTファミリー企業、そして携帯端末を作る通信機器や家電のメーカー群と持ち場が分断されていた業界の仕組みにも問題がある。しかし、例えば固定網も無い中国などでは携帯電話は格安の通信手段であるという類の、地球規模で市場を見る力もなかったのである。

その巻き返し策で断行したのが第三世代の携帯電話へ

の強引な移行である。第三世代は三つの点で第二世代と異なる。一つはバラバラだった第二世代の世界標準が統一されたこと、第二はその結果、世界中どこでも同じ携帯を使えるようになり、さらにもう一つは動画像も送れるようになったことである。ところで金が無い中国などでは、基地局と携帯端末の更新が不可欠な第三世代へ移行することはとつても考えられないのだが、先進国の技術競争で先導権を握ろうと企てていたため、あえてそれを世界で最初に先行投資したのである。だから「あの時技術の世代交替による設備投資やその消費者負担などの財務的側面を国際的視野で考えれば良かった」と言えないのかもしれないが……。

旅とロングステイ

莊 司 忠 志

サラリーマン人生を引退してから八年、いくつもの外国を妻と一緒に旅をしたり、いくつかの町でロングステイしてきた。旅に病んだこともあったが、若干の腰痛、風邪、飲みすぎなどなど、病というほどの病でもなく健康だ。一年の大半はニューヨークの田舎に住んでいる。

アメリカでは医療費も薬も高いし、医療改革は常に変らぬ政治の争点である。保険にかかれなない貧乏人が三千八百万人もいるのだ。彼らは病気になるっても病院にも行けないし、処方箋の要らない薬でごまかしている。それでもアメリカはイラクまで戦争に出かける。カナダやオーストラリアでは、薬はアメリカの半額から三分の一の値段だった。

旅の途中でどこで死んでもその場に居合わせた他人になるべく迷惑はかけたくない。パスポートと一緒に若干の

アメリカドルと死亡傷害保険のコピー、ニューヨークの弁護士にしつこくアドバイスされた遺言書の写しも身に付けている。妻も同じである。遺灰は学生時代から九回も訪れたことのあるバリ島のサヌール海岸の海に散骨してほしいものだ。海軍士官だった恩師の遺灰はマカッサル（現在のウジュンパンダン）の海に散骨された。

今回のロングステイしているメルボルンで孫が生まれた。父親は日本人、母親はオーストラリアと英国の二重国籍だ。孫は三つのパスポートを持つことになる。世界中には、安全な豊かな国の国籍を求め、あえている人たちが何億もいる。国籍そのものを持たない人も多いのだが。国籍が三つもあれば、世の中がどう激変しようも、そのうちのひとつくらいで安全に暮らせるだろう。

旅の途中触れ合う人々、過ぎ去る風景、食べ物、学校、教育、乗り物など、人生の傍観者になった年寄りになったが、メモしておくことが無限にある。将来本にしたい。

去年の三月メルボルンから日本への帰途、南太平洋の島国フィジーに寄り四泊した。出発前数日、南太平洋の地図を眺め、どこか未知の島でも見たいと考えたのだ。

遠い昔からの記憶をたどると、いくつもの南海の島や町の名前が脈略もなく脳裏に浮かぶ。

マキン、タラワ、ツバル、ラバウル、ブーゲンビル、トラック、グアム、テニアン、サイパン、ニューギニア、サモア、トンガ、タヒチ、ハルマヘラ、メナド、珊瑚海、アンボン、インドネシアのいくつもの土地の名前、ボートモレスビー、ギルバート、花のフロレス、バリ、はるか昔の少年時代の戦中戦後にインプットされた島の名前、地名だ。学生時代アルバイト先で袖すりあった岡さんは海軍機関学校出の海軍士官で戦争中シンガポールにいた。父親の岡陸軍大佐はガダルカナルで戦死した。

インドネシア、シンガポール、香港にも、昔からの友人が数人ずつおり、会いたいので寄り道したらと誘ってくれているが、二、三年間隔で会っているし、日常的にEメールで交信しているので、またの日にする。お互い生きていればそのうちにいつか会えるだろう。

南海の島フィジー島の西側半分はサトウキビ畑が広がる。その昔移民してきたインド人とポリネシア系原住民

との間で長い間紛争が絶えない。ゴルフのビジェイシンの名前が島を世界に有名にしている。ボートで沖に出てシュノーケリングを試みる。以前カリブ海で経験し病みつきになった極彩色の世界だ。餌をまくと魚が寄ってくる。朝夕の空の景色の美しさが、南太平洋にしていることを実感させてくれる。マリンスポーツと素朴さ以外何もない島だ。

ホテルでEメールを見る。ニューヨークのスキー場の孫たちの写真が見え、企業OBクラブの皆さんのEメール交信はいつも読んでいるし、忘年会の写真で懐かしい顔々が見える。太平洋の小島でメールが読めるのが不思議に思える。コンピュータはまだ初心者なのだ。

いくつかの近くの小島を見て回ったが、日本人らしき人は見当たらなかった。ところが成田へ飛ぶフィジー航空は日焼けした日本人の若者が満員だった。

三月は日本で、その後またニューヨークに帰る。元氣なうち、旅はしばらく続く。

出会いを大切に

杉浦 右蔵

私が企業OBベンクラブに入会したのは故野村嘉彦さんの紹介による。野村さんは三井物産卒業後、ベトナム専門商社の新和物産の社長とられた。南北を統一したベトナムは旧南ベトナムに関与した商社を排除した。日本の各商社は身代わり商社を設立して対処した。私がベトナムに関与したのは八年に及んだ。私が在籍した三菱電線工業はベトナム統一前の旧南ベトナムのサイゴン首都圏電気通信拡充計画の円借款を、三菱商事を頭に、線路部門を三菱電線、建物は間組、交換機は沖電気のコソシアムが落札して工事を進めていた。電話設備は一般的に局内四割、局外六割の比重である。

一九七五年のサイゴン陥落によりプロジェクトは凍結状態であったが十二年後一九八七年に様子を見て来いの社命により初めて現地を訪れた。最初、友好商社の三洋貿易の案内でコンタクトを取り訪問した。挨拶の後、

私は郵電総局の講堂で約八十名の幹部を前にして最近の電気通信事情を講演する羽目となった。資料は説明のためいろいろと持参したので一夜漬けて編集した。資料は英語、講義は日本語からベトナム語通訳という形で行った。当時は英語の分かる人は少なかった。実施した結果は大好評で、とても良かったと自負している。

二回目の訪問から三井物産と組む話がまとまり、新和物産と長い付き合いが始まった。当時、大手商社は旧南ベトナムに多額の不良債権を抱えていて、金の話になると全然駄目だったことが残念であった。野村さんはすでに社長を退き、次の世代になっていたが、野村さんのベトナムにかける思いは、日本ベトナム協会の理事として資料の整理作成、コンタクトと強烈であった。

このような八年を過ごした後、私も三菱電線を六十二歳の定年で退職し、ベトナムは後継者不在となりプロジェクト育成作業は終了した。あと二年頑張れば情勢は好転し、ものになったかも知れない。我々が提供した調査計画は独シーメンスとベトナムの肥やしとなってしまうた。

人間の縁と出会いは不思議なもので、三菱退職の際、N T Tに挨拶回りをした時、フィリピンの電気通信学園の専門家を探しているのに遭遇し、N T T推薦で二年間フィリピンの学園にJ I C A 専門家として滞在した。帰国後、野村さんと再会して、企業O B ペンクラブを紹介され現在に至っている。当初クラブのI C Tの普及のため皆さんから囑望されたが、私は岡村製作所の技術顧問

の話がまとまり、ご期待に添えなかったことは誠に申し訳ない次第である。

野村さんも昨年亡くなられ、私も今年岡村を退職するが、私も先輩会員諸氏も高齢化し、往年の覇気を失ってきた。次の若手に新世紀の観点から飛躍することを期待してやまない。

(二〇〇四・一・一四)



木洩れ日

新春浅草歌舞伎

関谷 裕彦

昨年の暮れに羽子板市をテーマにペンクラブ俳句グループの吟行があった。汁粉屋の梅園（実は私、人形町の梅園のほうが馴染みが深かったのだが）を捜して伝法院界隈をうろちよろしている、浅草公会堂の脇へ出た。

「新春浅草歌舞伎」の看板が出ている。出し物は、「三人吉三」^{さんにんきさむざ}の大川端。それに「千本桜」の吉野山の道行^{みちゆき}。中幕に歌舞伎十八番の「毛拔」。大川端と吉野山は何度かみているが、毛拔はひさかたぶりである。午前十一時、午後三時開演の二部制。大枚八千四百円を投じて、初の浅草歌舞伎、初春の観賞とはなった。

元来浅草は歌舞伎に縁の深いところである。天保十二年（一八四一）の火事で、水野老中は江戸三座の何度目かの全焼を期に、芝居廃絶を主張したのだが、遠山の金さんこと遠山左衛門尉景元が反対して、翌年四月から江戸三座、中村座、市村座、森田座は浅草山の丹波園部藩

主（小出氏二万六千石）の下屋敷跡に移転を命ぜられ、後の今戸猿若町へ集団移転した。明治になって、鑑札制度の採用で、東京の芝居は十座になった。新顔では浅草千束の宮戸座が有名で、明治三十年代後半には、切られお富で有名な、江戸の芸風を伝える女形、沢村源之助（四世）が出演、若いころの、羽左衛門（十五世）、吉右衛門（初世）、宗十郎（七世）、梅幸（六世）ら一流役者も出て、昭和十二年までは興行していたのである。他にも沢村座（後、浅草座・駒形劇場）常磐座などがあった。戦後松竹が浅草歌舞伎を復活して二十五年、夏場には大物が出演。最近では、中村獅童、市川男女蔵、市川亀治郎、中村勘太郎、中村七之助の若手五人組が評判である。観客は圧倒的にご婦人が多い。男性は中年の一見紳士風がちらほら。お年玉で上下の役者が幕外で開会のご挨拶。当日私の見た二部では、亀治郎。若者らしく現代風をとりこんで、観客はご満足。その故か、本日の観客のマナーは極めてよい。最近はいよいよです。特に歌舞伎座がいけません。私語と場違いの拍手！

ところで、「大川端」はいまいち。勘太郎のお嬢吉三、

お嬢さんには見えない。獅童のお坊吉三は及第。男女藏の和尚吉三は貫録不足。これでは、お嬢、お坊も、せっかくかせいだ百両を投げ出す気にはなりませんまい。その間、おとせ役の中村蝶紫のせりふ回しが、しっかりしていてよかった。

どうなることかと思ったが、「毛抜」になって、ぐつと引きしまった。まず亀治郎の腰元巻絹が良い。色気もある。特に後半、糸寺弾正とのからみがよかった。その弾正は、獅童が好演。役の性根が分かっている。小山内薫は、明治時代に市川左団次（二世）が復活上演した時「毛抜は喜劇だ」といったそうだが、歌舞伎十八番には興味津々であった団州（九世市川団十郎）が上演しなかった理由はそこにあるのだろうか。天井裏に羅針盤のような磁石をかかえた忍びがひそんでいて、それで鉄製のかんざしをさした姫君の髪の毛が逆立ち、お家騒動になるという趣向は面白い。左団次はとにかく、河原崎長十郎（前進座）は、真面目居士で、いまいち面白くなかったが、獅童はこの点では今後大いに期待できそうだ。真面目といえば、男女藏も、秦民部のような辛抱立役はび

ったりであり、好感ももてる。門之助の小野春道は貫録。とにかくこの「毛抜」は面白かった。

「吉野山」は、七之助の静が収穫。亀治郎の狐忠信は最後の狐六法の引っ込みは良かったが、そうじて、「ご苦労さま」という感じ。男女藏の早見藤太はこんなものだろうか。

出演の役者五人衆の履歴は

中村 獅童（二世） 一九七二年生。中村時藏（五世）の

門人。二〇〇三年度浅草芸能大賞

受賞。

中村勘太郎（二世） 一九八一年生。中村勘九郎（五世）

の長男。勘三郎（十七世）の孫。

中村七之助（二世） 一九八三年生。中村勘九郎の次男。

勘太郎の弟。

市川亀治郎（二世） 一九七五年生。市川段四郎（四世）

の長男。市川猿之助（三世）の甥。

市川男女藏（六世） 一九六七年生。市川左団次（四世）

の長男。

一周と十四年

多田 修

還暦を人生の一周とすれば、すでに一周と十四年を経過したと考えていたときに、本屋で「十四歳からの哲学」（池田晶子著）に出合ったのは不思議な縁とでも言おうか、見過ごせない気持ちに私を駆り立てた。

初孫に出会ったのも、一周と何年というときであった。妙にその孫と目線が合うなど感じて、還暦を一周と考えるのが自然だと自分なりに納得していた。今の自分から六十歳を引くと、知能指数もその分差し引かれてちょうどいい目線になると、もつともらしい理屈もつけてみた。

この計算で嬉しいのは、一周過ぎた私も年々知能指数が上がっていくことである。「還暦でご破算に願いましでは」と思い切った意識改革をすれば、その後は小学生のテンポでそれこそ悠々と歩んでいける。何といっても、第一周目に積み上げた実績が大きい。一周と二十年ぐらいまでは一周目の二十歳よりはこちらが上だと気付くか

らである。

そこで飛び込んできたのが哲学の話である。かつて旧制高校の時代に、ドイツ語の時間でショーペンハウアーの哲学書が教科書だったので、呻吟しながら夜を徹して考えていた。ドイツ語が難解だから時間がかかったというより、日本語に訳した後、これはいつたいどういうことを言おうとしているのか考える喜びを初めて知った瞬間であったと記憶している。

「考えて知る」習慣がついたのは、ここにあつたと思う。読んだだけではピンと来ないから考える。「読んだり見たりして、覚える」ようにストレートにいかない。さらに言うなら、試験や受験勉強では、考える習慣はつかないと意識するようになった。覚えるだけでは考えることにならないとわかったからである。

かつて第一周で自動化システムの開発をしていた頃、数十人の若い技術者と仕事を進めていた。個々の具体的な技術の検討をするだけでなく、システムのイメージを創造する創造性の豊かな技術者を育てるにはどうしたらいいのか考えていた。システムのイメージといっても空想

では実現性はない。開発を進めるには、道理を探って考えを進め、幾つかの選択肢を考えながらそのどれを選ぶべきかまた考える。理詰め of 連鎖が完成して目的 of システムが完成する。今でいう右脳でとか左脳でとは考えていなかった。

ただ気付いていたのは、あの哲学書を勉強した当時、飛躍なしに、綿密に道理を積み上げていった行為と似ていることである。哲学も開発も考えることに手抜きを許さなかった。

最近、少年少女の犯罪が目立つ。半面、幼い子供をいじめる親の犯罪も多すぎる。

受験勉強がすべてのように考える親の下で育つ少年少女は見えて覚え、聞いて覚えるだけで、道理に適って深く考え一步一步進むことの喜びを味わっていない。そもそも「道理ってナニ」と問い返してきそうである。「ものごとの道筋、正当な理念」として法的、思想的な意味を持つ言葉として日常的に用いられたと教えてもシンブンカンブンだろう。

近年、その時点その場面にしか通用しない、心理的、

感性的ないかさの道理が跋扈^{はつこ}して、著しく客観性を欠き、あいまいなものに墮落してしまっただが、今でも変容する以前の「道理」は歴然と存在する。

見たたり聞いたりして覚えたことを、自分の立場だけにとどめず、相手の立場からも、親の目からも、友人知人の思いからも、社会通念からも、何度も視点を変えて考え直して知るプロセスを大切にすれば、考えるということが如何に喜びの源泉になるか、そしてそれが次の問題解決に「考えてみよう」とつながるのではないか。

もうキレたから、考えることも、道理を探ることも忘れて行動に向かう少年少女の蒼白な顔や、幼い子供を折檻する鬼気迫る親の容姿を思い浮かべないですむようになって欲しい。

哲学する時代に立ち帰れば、視野の狭い宗教や政治や個々の憎しみを超えて、在るべき姿に向かって「よく生きる」社会を歩む人たちが増えてくるに違いない。

第二次大戦終了後の降伏日本軍人

玉山 和夫

一九四一年十二月日本は米英と開戦し東南アジア・南西太平洋の広大な地域を占領した。一九四五年八月ポツダム宣言を受諾した時には、約三百五十三万人の日本軍人軍属が海外にいた。ポツダム宣言が日本軍隊の無条件降伏を要求していたので、日本軍人は不名誉な捕虜として取り扱われることを最も懸念した。陸軍将兵の行動指針としていた「戦陣訓」に「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」とあったように、捕虜となることはもつとも恥ずべきことであった。

東南アジアにいた陸海軍約七十五万人が降伏した相手は、英軍を主とする東南アジア連合軍（SEAC）であった。連合軍は日本軍人を「捕虜」ではなく「降伏日本軍人」（JSP）として捕虜の資格を与えなかった。連合軍は降伏軍人に「武装解除後も引き続き軍の組織を維

持し、日本軍指揮官は規律、行動および可能な限りの給養について責任を負え」と命令した。日本将兵は懸念していた捕虜とならなかつたと喜んだが、実際上は俘虜としての権利を失う不利益があることを理解していなかった。連合軍は降伏した大量の軍人を管理するには、旧日本軍の指揮官に規律を維持させることで、英軍人の監視・管理要員を大幅に削減できた。また捕虜であれば、条約の定める食料・被服・医療などを供給する義務があるが、降伏軍人とすることで待遇を下げ、連合軍の経済的負担を軽減したのである。

日本軍は連合軍の進駐により従来の駐屯地から退去させられ、住民との接触を避けるように郊外に移され、多くはテントや急造の草ぶき小屋などに宿泊せざるをえなかった。そのような場所には水道や電気もなく衛生状態は劣悪だった。日本軍の所有していた食料・衣料と金銭などはすべて接收され、さらに個人の通貨さえも取りあげられた。連合軍は重労働を課しているにもかかわらず、食料は一人一日あたり千六百カロリーを基準としてい

た。実際に地域差があり離島では千百カロリーまで低下したところもあった。これは終戦まで三千六百カロリーを支給されていた兵隊にとっては苦痛であり栄養不良となった。条約一条は「捕虜の糧食定量は質・量において抑留国の補充部隊と同一でなければならぬ」としており、当時の英軍のは約三千三百カロリーであったから、極めて不利な取り扱いを受けたことは明らかである。

条約が禁止する労働は送還まで強制的に続けられた。たとえば石切りや地雷処理などの危険作業、不健康な労働に該当する糞尿の処理作業や炎天または雨天での作業、将校に対する労働の強制、八時間労働の延長、休憩時間の短縮あるいは削除などであった。時には百キログラムのセメント袋を担いで運搬する作業も行われた。また捕虜を労働に使用した場合、抑留国は労賃を支払わなければならぬが、労賃は一切支払われなかった。日本軍は泰緬鉄道の建設でも、連合軍捕虜に日本の二等兵と同額の給料を支払っていた。しかし、降伏軍人が英国に労賃請求の訴訟を起こすことはなかった。

連合軍の命令で日本軍の一部は降伏後も武装解除を受

けず、またいったん武装解除された部隊が再武装を命じられ、武力行使を伴う連合国植民地の治安維持に使用された。日本兵は心情的には独立運動に好意をもっていたが、望ましくない命令を強制された。この間仏領インドシナでは百六十七人、ジャワでは五百六十二人が戦死した。スマトラでは二万七千名が主要都市と油田警備のため四十六年十一月まで残留し、二百六十人が戦死した。

日本の将兵を降伏軍人としたのは長い戦争で疲弊した英国の財政事情によると思われるが、抑留所での取り扱いが泰緬鉄道などでの捕虜虐待に対する報復と感じたことが多かった。特に捕虜だったオランダ将校が所長になった抑留所では報復が激しかったといわれる。

降伏軍人の日本送還は四十五年十一月から四十七年十月末まで続いたが、この間劣悪な衛生、食料、労働条件により約一万人が死亡した。これは泰緬鉄道における連合軍捕虜死者にほぼ匹敵し、降伏軍人の苦悩が忍ばれる。

イラクのフセイン元大統領は捕虜として扱われると報道されたが、日本降伏軍人よりも良い待遇で人道的に扱われるのであろう。

贈り物その単純にして複雑なもの

都 甲 昌 利

クリスマス、お歳暮、誕生、結婚、入学卒業、入社、退社、引越、栄転、転勤など、人はその節目に友人、知人、家族の間で贈り物をする。しかし、相手が本当に必要とし、心のこもった喜ばれる贈り物をしてきたかどうか。真の贈り物とは何か。悩みの種である。私は贈り物というと、O・ヘンリーの「賢者の贈り物」を思い出す。ストーリーはあまりにも有名なので省くが、彼は形に表れたものより、愛と真心を最大の贈り物と言いたかったのだと思う。しかし、私もいろいろの贈り物をするが、私のような凡人にはやはり物に主眼を置いてしまつて、どんなものが喜ばれるかと悩んでしまふ。

私はかつて一度だけ相手が本当に必要としているものを、頭を悩ますことなく贈った経験がある。

ベルギー在勤時代、場所はブリュッセル。親しくしていた日本大使館勤務の知人が結婚することになった。この若い外交官は任地が外国から外国へと変わるために婚期を逸してきたが、縁あって外交官にふさわしい美しい才女と婚約した。式はブリュッセル郊外のカトリック教会で、披露宴は大使公邸で、ささやかではあるが、心のこもったビュッフェ形式で行われた。結婚祝に何を贈るか、披露宴に招待を受けた私は、仲間たちと相談したが、その必要はなかった。

日本の三越にあたる、アンスバックというデパートが市内にあった。そこへ行ってくれという。何のことか訳がわからず、デパートに行くと店員が、贈り物のリストを持ってきて、「これは新郎新婦様がお選びになった商品リストです。品目と金額が書いてあります。あなたが贈りたいと思うものにお名前を記入して、当該の値段をお支払いください」こう言った。

新婚生活には日用品は欠かせない。シート、枕カバー、

食器類、ベッドスタンド、壁掛け時計などが、リストアップされ、次の欄に価格が表示され、最後に贈り主の氏名欄があった。リストの中には、銀製のナイフやフォークセットがあったが、高価なため金額が分割されて数人が書き入れるようになっていた。社会的地位や肩書によって金額に多寡を生じないようにとの配慮である。平均してひとり千五百ベルギーフラン（約一万円）だったと記憶している。まだ氏名が書かれていない欄に「壁掛け時計」があったので、ここに私の名前を書き入れ、金額を払った。千六百ベルギーフラン（約一万五百円）。どんなものか実物を見たかったので、店員に言ったら奥から持ってきた。外枠は檜の木、中の機械はスイス製だという。北欧風のデザインで素敵な時計だった。

私はこんな方法で贈り物をしたのは初めてで、何か味気なかったが、よく考えてみると贈る側と贈られる側の心が一致するやり方ではないかと思った。贈る側は悩まずに済むし、贈られる側は満足する。気遣いをさせないというのが、新郎新婦の本心であったのかもしれない。そして金額に多寡があつてはいけない、重複してもいい

ない、そんなことを彼らは考えたのだろう。

披露宴当日のパーティーで、大使はじめ各界招待者の祝辞の後、新郎新婦は「ベルギー風でちよつと変わった方法で贈り物を頂戴し、心から感謝しております。すべて大切にに使わせていただきます」とお礼を述べた。

彼らはその後、モロッコに転勤になり、マレーシアを経て、現在はオタワの日本大使館に勤務している。毎年クリスマスカードを頂くが、それには私の送った「壁掛け時計」が無事時を刻んでいることが何時も添えてあった。ささやかな贈り物が世界中を旅しているのかと思うと嬉しく、また楽しい。

特例運賃活用のお楽しみ

中 洲 靖 雄

現役の時代ならなおのこと、比較的自由が利くリタイア組の人たちも、余りご存知ないJRの特例運賃制度を利用する方法を近ごろ教わり、友人たちと連れ立って、この制度を活用しては楽しんでいる。

JRには「トクトクきっぷ」と呼ばれる多くの割引運賃制度のあることをご存知の方も多いことだろう。周遊切符、レール&レンタカー、ゾーン券、回数券等々その数は枚挙に暇がないほどである。が、そんな中に自由時間の多い境遇の人達ならではの運賃特例制度があつて、その一つに『大都市近郊区間内の乗車券』という特例がある。これは「東京・大阪・福岡の近郊区間内のみを通る場合、乗車経路を重複したり、二度同じ駅を通らない限り、乗車券の運賃は実際の乗車経路に関わらず、最も安くなる経路を使って計算できる」というものなのだ。

去る十一月下旬、この制度を使って大阪近郊として認

められている兵庫県下の一八〇・八キロを、一区間の運賃百八十円だけで駆け巡ってきたが、通常の運賃を支払えば三千円強となるはずである。同行の友人十二名とともに約四時間の鉄道の旅だったのだが、乗り換えた回数は五度、鈍行の電車やディーゼルカー、さらに快速電車と乗り継いできた。

そのルートとは、宝塚線の川西池田駅を快速電車で出発、丹波篠山へ、ここで鈍行電車の谷川行に乗り換える。谷川駅からは昔懐かしいディーゼル車で繊維の生産地・西脇到着、そこでまた乗り換えて山陽本線の加古川駅に降り立つ。加古川からは新快速電車で神戸経由の尼崎駅へ、この駅で五度目の乗り換え、最終目的地の宝塚線伊丹駅でようやくこの旅に終止符を打ったのだった。

伊丹駅から発駅の川西池田までは二駅残っているのだが、百八十円の切符のままで川西池田までは乗れないのだ。つまり特例切符のままで川西池田駅まで乗車すれば、二度同じ駅を通ることになるからである。一行は伊丹でいったん下車し、改札口で特例制度を利用してきた旨を告げて百八十円切符に記念スタンプまで押してもら

い、駅前のコーヒESHOPPへと繰り込んだ。

何でも以前は、車掌といえどもこの制度を知らなかったのがいたらしくて採めたという話を耳にしたが、今回の周遊中二度ばかり車掌の検札を受けたものの何のトラブルもなく、車窓から目に入る紅葉などを愛でながら昼時には汽車弁をつつき、終始友人たちとの話に花を咲かせながら、楽しい時を過ごすことが出来た。

ただ、この制度も結構づくめとはいえない一面がある。それは駅の改札口を出ることが出来ないということだ。が、駅に降り立つことは可能で改札口さえ出なければよいのだから、この条件下でどうしたら楽しめるかを考えればよい。それには鉄道マニアでもない限り、気の合う者同士でグループ化を図れば、退屈するどころかあつという間に時は過ぎていくし、季節的に花の咲き乱れるころや新緑の時期、あるいは紅葉で山々が色づくころなど、目で楽しむ要素が重なければいうことなし、結構旅の気分も味わえるものなのだ。

近畿圏のルートとしては上記の他に、新大阪を出発して滋賀県の琵琶湖北岸を通り、米原を経由、奈良を通っ

て大阪に至るルートや、和歌山を巡ってくる経路など数通りの経路があるが、首都圏方面はもともと多く多くのルートがあり、組み合わせによってはかなりの長距離鉄道の旅を楽しむことが出来るようだ。

二つ目の特例制度はご存知の方も多からうが「青春十八切符」の活用である。これは学生の休暇時期、春・夏・冬の期間に限定の「五枚綴り切符で、料金は一万一千五百円、快速または鈍行の列車利用の五日間乗り放題」というものだが、途中下車もOKだから前記の特例切符と違って利用範囲はぐんと広がる。しかもこの切符は切り離しは自由で、年齢や身分に関係なく使用可能だから、今冬も私たち仲間にはこの青春十八切符を活用、大阪から二〇〇キロ近い城崎温泉まで、快速と鈍行電車を使って「カニ」を食べに行くという年中行事が待っている。その日、一月十五日を心待ちにしているのである。

さて、自由時間の多い人たちにとって外出やお喋りは意外と楽しみなもの、これを実施する方法として安い特例運賃を活用、仲間同士で楽しむのも如何なものだろうか。

神々は過てり お年寄りのための童話―その二

新山 章一郎

さて、皆様方。どうもこのごろの若い者は私ども年輩者にはさっぱり分かりませんな。定職に就こうともせず、口のきき方も知らず、やたらに地べたに座り込んだり、全く理解に苦しみます。どうしてこのような人間ができるようになったのでしょうか。我が地上波デジタルTVでは天上界の特別許可を得まして、我々人間を創っている天国の人間工房を取材してまいりました。

こちら天国の人間工房です。中央の作業台では神様方が粘土をこね、マネキンのような人間の原形を手捻^{ひね}りでお創りになっています。作業台の両側にずらりと並んでいるのは性質箱です。これらの箱には創造力、勇氣、寛容、攻撃性、計算能力、思考力などの人間の才能、性質が細かく分けられ、粉末になって入っています。

神様方はこの性質箱からいろいろな才能、性質をそれ

ぞれ適当な量だけ指でつまんで人の原形に入れ、私たちを一人一人、手造りでお創りになるのです。もちろん、お創りになる神様によってお好みも違いますし、その時々のお気分によっていわゆる「匙加減」も違います。ですから世界には外見、内容ともにいろいろな人間がいますし、同じ人というのもないわけなのです。

しかし神様方もお忙しいし、時にはちよつとした手違いもおおりになるようで。その上この粉末は非常に強力なので、ほんのちよつとしたつまみ具合で製品に驚くほどの差が出ます。それで、まあ、良くも悪くも、とんでもない人間ができることがあるようでございます。

ところが最近、この工房で問題が起りました。最近創られた人間には、すぐに切れて暴力的になる、ものを考えないで行動する、極端に自己中心的であるなどの問題行動が多い。また、いつまでも精神的に熟成せず、小児的な思考、行動しかできないというような欠陥人間が増えている等のクレームが次々に寄せられたのです。

工房設立以来五千有余年、こんなことはありませんで

した。早速、苦情対策委員会が組織され、綿密な調査が行われました。その結果、問題行動が見られた人間に共通なことは、それらの人間の性質成分にいくつかの大切な要素が欠けているということが判明しました。

通常、人間には優れた才能や、好ましい性質の材料が三対二の割合で、好ましくない性質の材料より多く入っています。それで健全な人間の行動が確保されているのです。ところが近ごろの製品はその割合が確保されておらず、「良い材料」の比率がぐんと落ちていくということです。つまり、製造過程においてこの比率が守られていなかったということです。さらに衝撃的なことに、その「良い材料」の一部、例えば「人の情け」などは在庫がもうほとんどないという実態が明らかになったのです。

問題はなぜ最近になってこのような欠陥製品が出回り、在庫不均衡が表面化したかということです。天国での取材中この問題をスクープした我々は早速、製造現場の神様方とのインタビューを試みました。

記者「どうしてこのようなことが起きたのでしょうか」

神 A 「最大の理由は材料在庫のアンバランスだのう。特に思考力とか総合力、指導力、自立力、といったような、優れた人間を創るのに不可欠な材料が圧倒的に不足しとる。その半面、無分別とか嗜虐性とか攻撃性といったような好ましくない性質の材料は余っておるのじゃ」

神 B 「じゃからこのごろは悪い材料は充分に使うておるが、そういった良い性質の材料は極端に少量しか使えないのじゃよ。あれでは碌な人間は出来んじゃろな。ひどいころには良い性質材料が全くなかったときがあったのう。その折に出来たのが、あの小学校に侵入して子供を殺した宅間とかいった男じゃよ」

記者「なるほど。しかし、どうしてそんなに『良い性質材料』が不足してしまったんですか」

神 A 「答えは簡単。原因は過去における良い材料の使い過ぎにあるのだ。例えばアレキサンダー大王には五億人分、シーザーには三億人分の最上級の才能、資質材料が費やされたものじゃ。また、アルキメデスには一億人分の計算能力が注入されておったと聞いておる」

記者「えっ、本当ですか。英雄と普通人はそんなに差

があるんですか」

神 A 「さよう。才能、資質資源はそれぞれ、すべて人数分、等量にしか用意されておらん。故に、英雄が一人出れば、それだけ他の者への配分がいつか狂うわけじゃ」

神 B 「いやあ、まったく、昔は良い才能、資質をやたらに使って英雄や偉人を創っていたものじゃ。それゆえ良い才能資源が枯渇してしまったのじゃよ。相対的に悪い才能や性質資源は使用量が少なく、それが積もり積もって、悪材料の大量在庫を抱え込んでしまった。分かってはおったんじゃが、先送りしとったな」

記者「どの神様がそんなことやったんですか。責任問題は起きないんですか」

神 A 「これ、我々神様に責任を追及してはいかん。神はアンタチャブルなのだ。ま、それはともかく、百年ほど前からそんな状態が顕著になり始めた。それでその在庫を解消する必要が出てきた。ことにこの二、三十年ほどは在庫調整の動きが加速されておる」

記者「なるほど。『明治以降、日本人は駄目になってきた』と司馬遼太郎が言ったのはそのことだったのです

ね。それから近ごろ問題行動の低年齢化が目立っているのも」

神 B 「さよう。昔は偉人、英雄が輩出した。近ごろはそういうのがおらんじやろう。それもこれが原因じゃ。昨今では優れた性質材はもう十分には使えんのじゃよ」

神 A 「あのころは我々も少しい気になっておった。なにしろ人類文明の勃興期じゃったからのう。神々も張り切っておったものじゃ。それ行け、やれ行けで。しかし才能資源には限りがある。もうあんなことは出来ん」

記者「えっ、才能資源は有限なんですか」

神 A 「なんじゃ。知らなかったのか。人間を創る材料は一定量しか用意されておらん。まあ、これからは現有資源を節約しながら食い延ばす以外に手はないのう。しかもこれらの才能、資質資源の絶対量はあと千年分しかないのじゃから。ま、その後は現在の人間的才能資源によらない生物を造っていくことになるじやろうのう」

神様はちよつと済まなさそうな顔をしながらおっしゃいました。

湖畔のダラットに遊ぶ

古川 さちお

二十世紀半ばのことだから古い話となった。

一九六〇年の南ベトナム、旧正月の休暇「テト」を、商社若手駐在員仲間五名で過ごした湖畔の避暑地ダラットの思い出である。

首都サイゴンから北へ車で延々六時間走り、最後の峠を越えたところで急に視界が開ける。眼下に空よりも濃い紺碧の湖と、それを取り巻く瀟洒な別荘群、ゴルフ場、それに豪華なホテルの建物が見えてきた。

この別天地で「三泊して心行くまでゴルフとマージャンを楽しむ」という魂胆だったが、唯一の高級ホテル「ダラット・パレス」は一泊しか予約できていない。

当時最良だったベトナム人の対日感情と駐在員の懐具合からして、「一泊を三泊に変えるぐらい問題なかるう」というのが私らの高慢な考えであった。

だが、そうは行かない。このバカンス・シーズンにその考えは通用しないようである。

ルーム・サービスのブランドーなどで、一夜マージャンを楽しんだ翌朝、フロントに二泊追加を申し入れたが即座に断られ、後は全くラチがあかない。

午後ホテル・オーナーと交渉することにして、差し当たり予約してあった「ダラット・ゴルフクラブ」に行った。珍しくキャディーのいないカントリー・クラブはセルフでのプレーとなる。

南国とはいえ、標高二〇〇〇メートル近いゴルフ場である。高空の薄雲に太陽は隠れていたが、涼やかに乾燥した空気の中、ティー・ショットが予想外の遠くまで飛んでくれて快哉を叫ぶ。

しかし、プレーの方ではグリーンに向かって歩きだした途端に私の心が曇りはじめた。スルー・ザ・グリーンはフェアウェイもラフもチョロチョロと雑草が点在するだけ、砂地のコースに等しい。

おまけに、グリーンは「サンド・グリーン」というの

であろうか、雑草が生えないように油を撒いたあと、ローラーでしっかりと固めてあるのだ。これでは中東のゴルフ場と同じ。スコアどころではない。

それでも高原の絶景と涼風を満喫しながらの、和気あいあいのプレーは長く思い出に残るものとはなった。

ホテルに帰ってみると、私らの手荷物が今にも放り出されそうになっている。居合わせたオーナーに宿泊延長を頼んでみたが、気の毒そうにしながらも、政府関係来賓で満杯だと断られる。

そこで、若気の至りと言おうか、向こう見ずと言おうか、仲間の誰からともなく「ダラット市長を訪ねて宿所を頼んでみよう」と言い出した。他に手がないのだ。

ネクタイとブレザーを持ってきていた三名だけが日本商社「代表」の触れ込みで市長に会うこととする。

市長公邸は、かつてフランス人たちの所有だった美しい別荘地を湖越しに見下ろす高台にあった。

門衛に用件を伝え、市長殿への取次ぎを頼んだところ、

人品卑しからぬ年配の執事が出てきた。

「生憎市長閣下はフランスに出張中ですが、日本の方でしたら親日家の夫人に取り次ぎましょうか」と言う。願ってもないことだった。

豪華な応接室で待つこと数分。笑顔で現われた市長夫人は、この国上流階級特有の気品に満ちた五十がらみの女性だった。フランス語を流暢に話せないからと、大学生の長男を伴っている。

「ホテル・ダラット・パラスが満杯だそうで、お困りでしょう。ただ今、市の迎賓ヴィラを使ってもらうように、執事が連絡をとっておりますのよ」

「突然押しかけた礼儀知らずの私どもに、そのようなご手配誠に恐れ入ります。ご親切は決して忘れません」

お決まりのお茶とケーキを振舞われて、歓談は小一時間も続いたろうか。

私らは、風光明媚なダラットを褒めるとともに、ベトナム人の高レベル頭脳と勤勉さを話題にした。

一方、夫人は日本民族の優秀さ、とりわけ医療レベル

の高さに感嘆の声を張り上げたものである。

不治の病だった子供さんの一人を、日本に運んで手術してもらい完治した経験があるとのことだった。

治療に際し、エール・フランスの助けを借りた話、日本医療チームの優れた技術と献身的な活動などが興奮気味に語られた。私の医療用語無知のせいかその病名を全く記憶していないのが残念だが、当時マスコミでも話題になったとのことである。

話は尽きない雰囲気だったが、迎賓別荘の受け入れが決まったという執事の知らせで、名残を惜しみながら公邸を辞することとなった。

案内された家は、別荘地域の一等地と思われる一角だった。ちょうど私らに見合うように五つのベッドルームがあり、小さめながら清潔なサロン付き、窓からは湖畔の景色が一望できる。宿無しになりかけた他国者にとっては正に夢のようなヴィラであった。

それからの二泊、食事は街での外食だったが、「サイゴン独身」商社マンたちの休暇は、マージャンを除けば、

「清遊」そのものであった。有り難きかな、市長夫人。

夫人には礼状を一度出したきりである。その後の激しい戦火を経て、市長公邸や家庭の皆さんはどうなっているだろうか。気になるところではあるが、今は調べる手段を知らない。

あれから四十数年を経た今、一緒した五名のうち三名はとうに他界しておられる。

対仏越南独立戦争と米国によるベトナム戦争の間、十年近く続いた平穏な時期にサイゴン駐在だった私たちは僥幸そのものであった。

当時の他に類を見ない良好な対日感情、「小パリ」と讃えられた美しいサイゴンの街並み、ベトナム料理は当然として、本国でも味わえないようなフランス美食、中華美食、思い出は尽きない。

深夜の落下

中村 爽

十五年前のある深夜、当時私が駐勤していたインドネシアのジャカルタで、その事故は起こった。私は家の二階の窓から落下して大怪我を負ってしまった。ところが、なぜ落ちたのか不明で、謎のような出来事だった。もうずいぶん時が経ってしまったが、当時の記憶をたどってみる。

はっとわれに返ると、自分がどこにいるのかすぐには分からなかった。芝の生えた地面に横たわっている。辺りは夜明けか夕暮れのように、ぼんやりと薄暗い。そばの建物の高い窓から明るい光が漏れてくる。意識がゆっくりと戻ってきて、ここは自分の家の庭だと気がついた。どうしてこんな所に倒れているのか。体を起こそうとするが、左半身に激痛が走って動けない。人の気配もなく、周囲は静まり返っていた。大声で住み込みのハウスポー

イの名を繰り返して叫び、ようやく彼が起きてきた。私の姿を見て、仰天して声も出ない有様。意識がまた薄れてゆき、次に気がつくと、目の前には心配そうにのぞき込む会社の同僚たちの顔が見えた。

救急車で市内の病院に運び込まれた。診断は「骨盤亀裂、左大腿骨折、打撲による内臓損傷」の重傷。事故の原因を聞かれたが、激痛で気が転倒してまともに口もきけず、そのまま集中治療となった。

鎮痛剤の点滴を受け、半ば夢うつつの状態していると、繰り返し幻覚が現れた。ベッドが病室の床ごと電動のようによつくりと頭の方から垂直に立ち上がり、体が足の下にして滑り落ち始める。まるで深い穴の中に落ちて行くような感覚。これは現実でない、と意識しながらも恐怖を覚え、落ちるのを防ぐため両手で必死にベッドの枠やシーツをつかむ。ベッドの足側の壁も下の方に向かって動き、部屋全体が回りだす。めまいと不快感を伴う奇妙な経験だった。

少し経って状態が落ち着いてきたころ、私は二階の寝室の窓から落ちたのだと知らされた。侵入者による事件

の形跡はなかった。倒れていた場所、開け放しになった窓、窓枠に残る手の跡などから見て、自分で窓から出て両手で窓枠にぶら下がり、それから手を放して落下したのだろう。落下地点の直ぐそばにはコンクリートブロックが露出していて、頭を打てば危ないところだったという。窓は部屋の壁に接したベッドの真上にあり、ベッドの上からでないといけない上に、空調のためにいつも閉められており、留め金がかかっている。それをわざわざ開けて飛び降りたのはなぜかと聞かれるが、事故前後の記憶が空白になっていて、何とも答えられない。急に不安になり、何度も記憶の底を探ってみた。

考え続けるうちに、いつか見た気がする夢のことを不意に思い出した。部屋のドアを開ける。外は真っ白なまばゆい光が溢れていた。もやに包まれたようで何も見えないが、明るく輝く光は見たこともないほど美しい。その中に一歩踏み出す。だが、足が床に着かず、そのまま体が白い光に吸い込まれ落下して行く。あれは夢ではなく、あの夜現実にあったことだったのか。

この夢と病院のベッドで何度も見た幻覚から、夢遊状

態になった私が自分で飛び降りたというのは、もしかしたら本当だったのかも知れない、と思うようになった。だが、そうであるなら、その錯乱の原因は、いったい何だったのだろう。泥酔、夢遊病、うつ状態、あるいは寝ぼけなどで精神の異常をきたしたのか。しかし、思い当たるものは何もなかった。結局、人間の心の底には、だれにも制御できない未知の何ものかが潜み、それがある時突然頭をもたげて暴れ出すのだ、と自分自身を無理に納得させるほかはなかった。今もってその真実は分からない。

あの事故の後、私の家にいた信心深いインドネシア人のお手伝いさんたちは、トワン・ブサル（大胆那）に取り付いた悪霊をはらうために、密かに祈禱師を呼んで私の部屋のおほらいをしたそうだ。そのお蔭か、私の後に同じ家に住んだ後任者は、今までだれもたたられたことはない。

力行人生訓

中村 將陸

今年の正月のテレビ番組で、一人の元気な老人男性が女性アナウンサーのインタビューを受けていた。七十年代にしか見えない老人が、九十二歳と言ったので私も驚いて、テレビに引き込まれていった。

「お爺ちゃんはどうしてそんなに若いのですか」との若い女性アナの質問に対し、老人は「私が『力行人生訓』をモットーに生きているからです」と答えた。「えー！それってどういうことですか」と、すかさず若い女性が独特の甘ったるい声をあげた。それに対し老人は持論の『力行人生訓』を落着いて解説した。

「力は感激。キは気力。クは工夫。ケは健康。コは恋ですよ」。九十歳を超えた老人の口から出た、「恋」という意外な言葉に驚いた若い女性は「恋って、今でも恋をなさるんですか」と聞いた。「私は毎日恋をしていますよ」と照れる気もなく老人は応対していた。老人は、市

井の一庶民といった感じの人であったが、私は彼の述べた人生訓に深く共鳴した。

ドイツの文豪ゲーテは、不朽の名作「ファウスト」の冒頭で、目も潰れんばかりの眩しい雷光と、大地を揺るがす轟音とともに地霊が出現し、驚きのあまり老ファウスト博士が思わずたじろぐ場面を描いている。これはゲーテが、人の生きることの中で「驚愕すること」が最も大きな価値であることを訴えたかったからだ。老人がファウストを読んでいたかどうか知らないが、驚愕にも通ずる「感激」を第一義に考えている点、ゲーテの人生観との共通点を感じた。

人は加齢とともに感激することが少なくなるものである。あまりにも多くのことを体験したせいか、日々起こる新しい出来事すら、当たり前に思えてくる。心理学者によれば、人間は体験した出来事を決して忘れることなく、すべて記憶しているそうである。それをわれわれが自覚し得ないのは、大部分の記憶が潜在意識の世界に沈殿していくからに過ぎない。したがって、歳をとると、誰しもが頭脳の中にNHKの誇るアーカイブスより、は

るかに大きなアーカイブスを持つことになる。その上、これは日々の生活の中で着実に巨大化しているのである。人間の判断の基礎であるアーカイブス全体を揺るがすような体験を、感激というのであれば、加齢とともに感激が薄れていく理由が理解できる。しかし、この「感激」を第一義に取り上げた老人は、歳をとるほど「感激」が大切になることを私に教えてくれたような気がした。

次は、キは氣力である。古来人間の逃れ得ぬ宿命として、「生老病苦」が説かれてきた。誰しも加齢とともに、思うように体が動かなくなる。これを放置しておく、氣力も衰えて行く。体力の衰えに氣力で立ち向かってきたからこそ、現在若々しく生きている老人の存在があるのかも知れない。貴重なアドバイスである。

クは工夫である。歳をとると誰しもが、今までの仕来りで物事を判断し、行動しようとする傾向が強まる。たとえそれが、不合理なものであっても、意に介さない。これも巨大アーカイブスの為せる業である。もっと合理的で、効率の良いやり方がないかと日々の生活の中で自答し、新しい方法を模索しながら生きている老人の姿勢

には頭が下がる。

ケは健康である。健康は誰の人生にとっても土台であり、出発点である。その大切さは誰しもが自覚している。だからこそ、人生訓に列挙したのであらう。

コは恋である。幾つになっても、異性を意識し心をときめかすことは、健康にも良いとは、今でこそ当たり前のことのように受け止められている。しかし、この老人の若かりしころは、日本には富国強兵の風が吹きまくっていた。「男女七歳にして席を同じゅうすべからず」といわれ続けた中で、老人は青春を過ごしてきた。自分の過ごした青春時代の風潮に染まることなく、また自分の巨大なアーカイブスにも押しつぶされことなく、恋愛をテレビに向かって堂々と賛美したこの老人の見識と勇氣をたたえたい。

とかく暗いニュースの多い中、普通の日本人の中にもこのような深い考えを持った老人がいたことに、誇りを感じた新年であった。早速今年のダイアリの第一頁に書きとめ、今年の行動指針にすることを決意した。

隠居のつぶやき

西川 武彦

相撲が好きで、暇さえあれば眺めている。大した資産もない年金生活者に両国の栈敷を買う余裕はないので、さほど広くはない居間の一隅を栈敷に見立て、いまだアナログの画面で観戦している。隠居した今では、時には、BS 1で幕下から通して観ることもある。暇なのである。

初場所千秋楽もシモキタの栈敷で楽しんだが、全勝優勝した朝青龍が、東の花道を引き上げる時、待ち受けたモンゴル相撲出身のいかつい彼のオヤジが、英雄の息子の両頬にチュッと口付けするのが、おかしかった。そして、その後の表彰式で、日本人の顔をした若者が、ごく自然に君が代を口ずさみ、優勝インタビューでも、貴乃花顔負けの日本語で流暢に受け答えしていたのが、なんとも対照的で面白かった。初のグルジア出の平幕力士黒

海も勝ち越した。当たり前だが、髪を結び、回しを締めて土俵に上がっている。朝青龍の言動がとやかく騒がれているが、相撲界では、多数の外国人が共存しながら、なんとか伝統は守られているのだ。

そうしたご時勢の表彰式で奇妙に感じたのは、総理大臣杯をはじめ、大きな杯や賞品を渡す背広姿の内外人のファッションである。背広にネクタイを締めた偉いオジサマたちは一様に、茶色の、そして高価でなさそうなスリッパを突っかけて土俵に上がっているのだ。いかにも安っぽく、様にならない。「景観」が乱され、伝統が汚されている感じである。

女子^{オナゴ}を載せてはならない神聖な土俵だから、洋式の短靴は、たとえエナメル黒でも、認められないのだろうが、だったら、洋装も民族衣装も禁じて、一様に、羽織り袴、白足袋、草履姿にするのが礼儀ではないか。しばらく前までは、パンアメリカン航空の小柄なアメリカ人が、和装で大きなカップをよちよち渡していたような記憶もある。

二年前に、友人のM君から棧敷に招待されたことがある。会津藩のご当主だが、今や同じ年金生活者である。何らかのコネで、棧敷を通年確保しているらしい。彼の弟は徳川宗家の第十八代当主で、かぶりつきの棧敷を持つているという。お二方とも大名らしき容貌の持ち主で棧敷席が様になっている。毎場所、テレビ画面に、観戦する着物姿の麗人がチラホラ写るのも絵になって嬉しい。相撲は伝統的格技であり、見世物でもある。モンゴル出の横綱に格式が求められるなら表彰式にも格式を望



鯉舟

みたいものだ、などと隠居はつぶやいている。もっとも、「悠遊」でつぶやいても改革は無理だろうから、しかるべき筋に訴えるか、とつぶやいている。

ところで、改憲、派兵など難しい話題につき、格調高い論議がメールで飛び交わされていますが、十五年の歴史をもつ由緒あるペンクラブです。井の中でつぶやくだけでなく、そろそろ外向けのパイプを創って発言しては？ これまた隠居の要らぬつぶやきであります。

駆け出しの「自由人」

野瀬 隆平

親しい友人から挨拶状をもらった。永年勤めていた会社を退職し、晴れて自由の身になったというお定まりの文句である。ただ、欄外に「今は狂ったように遊び回っています。」と添え書きがある。そうそう、正にその通りでしょうと、同じように過ごしてきたこの二年間の自分を振り返ってみる。

四十年に及ぶサラリーマン生活と、それに先立つ学校生活の十数年。本当に長い間、時間に縛られ型にはまった生活が続けてきたものだ。その長い、長い時間に束縛されていた生活から解放された途端、あたかもそれまでに失った時間を一気に取り戻そうとするかのように、やみくもに自由になった時間を使いこなそうとしてきた。

確かに、自分の自由意志でその日の行動すべてを決められるということは、素晴らしいことである。これまでは、時間的な制約もあり、本格的にじつくりと取り組み

たいと思いつながら果たせなかった風景写真の撮影。日本各地をのんびりと旅すること。美術館巡りをする。それに、オペラやクラシック音楽を鑑賞するために早くから切符を押さえて出かけること、などなど。時間がいくらあっても足りないくらいだ。幸い、自由な時間に加え、健康な体と気力、そして、そこそこのお金もある。これらを兼ね備えて持てるのは、いつまでも続かない貴重な時期であろう。そう思うがゆえに、ますます「狂ったように・・・」するのも知れない。

自由な時間の過ごし方。趣味の写真撮影について言えば、例えばこんなふうだ。今年は、美しい紅葉の風景を撮りたいと思う。久しく上高地にも行っていないので、あの大自然の中にある雄大な秋の景色に挑戦してみようと狙いを定める。早速、インターネットで今年の紅葉の進み具合と天気予報を調べる。同じ撮るならベストの時に行きたい。これまでは、会社の休みに合わせるしかなかった。それこそ当日の天気は、運を天に任せるしかなかった。折角、貴重な時間と金を使って行っても、満足のいく写真が撮れずに、欲求不満のまま帰ってくる

ことも、一度や二度では無かった。

さて、いろいろと調べた結果、紅葉は例年より少し早く、これからの天気具合を考え合わせると、明日あたりが、最も良いことが分かる。しかも、幸い平日だ。観光客も少なく、何かと都合である。早速、バスと宿の手配をする。時間からして今、直ぐ家を出たほうが良い。家人は外出中で夕方まで帰ってこない。ままよと置き手紙をし、カメラ道具を抱えて家を飛び出す。我ながらせっかちだと苦笑しつつ。

翌朝、まだ冷気の漂う梓川のほとりに三脚を立てていた。迅速に行動した甲斐あって、満足の行くシャッターチャンスに恵まれる。秋の紅葉風景を充分堪能したところで山を下り、松本で一泊することにする。折角、食事をするのなら何か美味しいものをと、グルメの血が騒ぐ。結局、小奇麗な割烹料理屋に飛び込みで入る。店の入り口の雰囲気は何となく旨いものが食べられそうな感じがしたからだ。その予測は裏切られなかった。美味しい料理とお酒に酔いながら、その日撮影したワンショット、ワンショットを思い起こす。明日からの仕事のことが頭

をよぎることも無い。正に至福の時である。満足感にひたりつつ、ほろ酔い機嫌で店を出る。

勤めからの帰りなのか、書類袋を抱えたサラリーマン風の男が、足早に追い越して行く。つい数年前までの自分の姿をそこに見るようである。そういえば、同期の友人でまだ会社に残っているのが何人かいる。そのS君、K君らの顔がふと浮かぶ。今こうして優雅とも思える時を過ごしている自分と思い較べて、なんとも言えない複雑な思いに一瞬とらわれる。

確かに、自由を謳歌しているのは事実である。だが、どこかで「そんな風に、毎日勝手気ままに暮らしていて良いのか」と問いかけている、もう一人の自分がいるような気もする。時間的な自由は手に入れたかもしれないけれど、あれもしたい、これもしたいという欲望に縛られてはいないか。あるいは、本当はこうあるべきではないかという観念からの自由、という意味ではどうだろうか。そのような心の自由を得るにはまだまだ程遠い、文字通り遊びを求めて駆け廻っている「駆け出しの自由人」である。

横浜黒船研究会のことども

羽田 壽夫

ペリー横浜上陸・和親条約百五十年記念行事

本年は、ペリー提督横浜上陸・日米和親条約百五十年に当たる。これを記念し、小生が代表世話人を務める『横浜黒船研究会』では神奈川新聞社、テレビ神奈川と共に、四月に重要文化財の横浜開港記念会館で記念シンポジウムと音楽祭を、八月に日本新聞博物館で瓦版・絵図特別展および公開講座を開催すべく準備中である。

なぜ『横浜黒船研究会』なのか

小生が神戸から、勤務先の組織変更により、横浜に転居してきたのは、昭和四十七年のことであつたから、横浜市民としては今年で三十一年を数える。しかし、小生の故旧の地は、新潟県柏崎市であるし、生誕地は兵庫県西宮市であるので、どうしてまた、『横浜黒船研究会』なのだ、というのはよく質問されることである。

曾祖父がペリーと関わりがあつた

小生の本籍地椎谷（現新潟県柏崎市椎谷）は、江戸幕府が整備した五街道の一つ中山道の、信濃追分から佐渡への渡船場である出雲崎へと続く、北国街道の宿駅であつた。羽田家は二十三世慶之進が寛永元年（一六二四）に藩主堀直之侯の封地椎谷に移つて以来、『車屋』の屋号にて、累代大庄屋または庄屋を務めるとともに、本陣にも指定されていた旅宿と、北前船等による陸海運業を営んでいた家柄である。しかし、曾祖父好昌は、次子であつたため、長兄に子なく後にその家督を継ぐことになるものの、当時は侍奉公をしていた。

時に、嘉永六年六月（一八五三年七月）亜国の兵艦が浦賀に入港したため、幕府は諸侯に命じ、武蔵近海を守らせることとし、幕府において時の奏者番であつた椎谷藩藩主堀之敏も領地より人数を募つた。好昌はこれに応じ、嘉永六年十二月椎谷を離れた。嘉永七年正月、亜国の軍艦が再来し、三月三日（一八五四年三月三十一日）、横浜において、日米和親条約が調印された。これにより幕府は武蔵近海の諸陣を引き払わせた。好昌はその後、

翌安政二年正月まで足かけ十一カ月、野州佐野藩士松山大吾の門に入り西洋砲術を習得した。業なって江戸藩邸に戻り、五月までこれを藩士に、その後は椎谷に戻り、越・信の藩地の士卒にこれを伝習している。

その後、椎谷の地は、慶応四年（一八六八）の鳥羽伏見の変に始まる戊辰戦争の戦場となったが、椎谷藩主堀侯は朝廷側につき、好昌自身も戦功少なからずとして、藩士として恩賞を賜り、大砲方に任命されている。明治十一年（一八七八）の明治天皇北陸御巡幸の際には、好昌宅は御小休所に指定されたため、戦前までは明治天皇の聖跡として史跡に指定されていた。

小生は、曾祖父のこのような横浜との縁で、横浜に移住して以来、自らの書斎号を『横浜黒船館』と名付け、ペリー来航より、横浜開港、明治にかけての横浜の歴史を、館蔵の『横浜瓦版』、『横浜古地図』、『横浜和刊本』、『横浜写真』などをもとに実証的に調査してきた。

『横浜黒船研究会』の始まり

この調査成果の一部について、平成十年正月、フラン

ス料理をいただきながらの昼食勉強会で発表したところ、好評を得、爾来この会合で、この種のテーマを取り上げる場合には『黒船研究会』と呼ぶこととなった。

平成十二年十一月の横浜学連絡会議主催の横浜学セミナーには『黒船研究会』より三名が講師として参加した。この結果は横浜市発行の『横浜学セミナー報告書（33）』としてまとめられている。平成十四年よりは、懸案であった会の拡大化を果たし、現在会員総数八十名程度、毎回の参加者三十〜四十名で、平成十四年四月より原則月一回、神奈川県立歴史博物館あるいは横浜開港記念会館にて研究会を続けている。

今後の抱負

幕末明治の横浜は、江戸時代の海外への唯一の窓口であった長崎から、その地位を引き継いだところで、過去や伝統に縛られない自由とエネルギーがあった。これらを再確認し、知的興奮に満ちた新発見・新知見を発掘し、これからも大いに発言していきたいと考えている。

平尾 富男

最近、若手の映像翻訳者たちと話をする機会があった。劇場映画とテレビ・ビデオでは、同じ字幕でも約束事が異なるらしい。また、ドキュメンタリー作品などのナレーションとなると、原語の音声の上に日本語の音声を重ねること（ボイス・オーバー）が多いそうだ。この場合、原語での意味を原語音声と同じ時間の長さで日本語音声に変換するわけだから、その過程でどうしても内容を端折ってしまう必要性も出るのだろう。

通常劇場映画では、一秒四文字、一つの画面での日本語の文字数は縦書きで一行十文字、最大二行で二十文字をもって限度とするのが基本ルール。言語構造の違いから英語を日本語にそのまま訳せば、倍の長さになってしまう。これをいかに短くするか、しかも物語の進行上重要な意味や情報を、的確に観客に伝えるという作業にはそれなりの専門的な苦勞が多いに違いない。

一方、吹き替え翻訳は字幕翻訳とは異なり、秒数を計ったり文字数にとわれる必要はない。耳から入る原語の台詞に合わせて、息継ぎ（ブレス）の位置や、原語の台詞が終わるところで声優の読む台詞がピタリと終わるようにすることが、翻訳作業として重要課題となる。しかし、字幕と比べると観客側の負担は少ない。

近ごろ観る映画の字幕翻訳に関して、私が個人的に思うのは、短い文章を用いつつ、しかも観客に親切な多くの情報を詰め込もうとする意気込みと技術が、かえって観客をして、映像を追いつけるより字幕を読む方に精力を注ぎ込ませてしまう結果になっているということだ。

現在の映像翻訳は、観客へのサーヴィスと、元の自然な流れを維持する気配りのはざままで揺れているのかもしれない。もちろん明らかな誤訳は許されない世界ではあるが、まずは映像ありきで処理されるべきだろう。

私は、繰り返し観たい・聴きたいと思うような優れた作品、特に音楽関連の作品は、以前はレーザー・ディスクを、現在はDVD版を購入して楽しんでいる。DVDの優れている点は、高精細な画質と音源の質の高さ、そ

して保存性能の良さ以外に、字幕を画面上に表示する・しない、英語(原語)字幕を表示するのか、日本語字幕にするのかを選択できることだ。さらには、原語音声以外に、日本語の吹き替えを選択できるものも少なからず用意されている。

今日の日本では映画やDVDなどの映像文化がますます広がっているが、これから字幕翻訳者を目指そうとする人たちは大変かもしれない。すでにこの業界で活躍している人が、「映画やDVDを観た多少英語のわかる人から『この翻訳者は全然わかってない、台詞の半分も訳していない』などと、インターネットに書き込まれたりする」と嘆いていた。そうかといっていちいち全部訳していたら、画面が字幕だらけになってしまうことになりかねない。めいっばい文字情報が盛り込まれていて、目を凝らして字を追わなければならないような今より、エッセンスだけが入れた昔の字幕の方がかえって新鮮に映る。

ところで、外国映画の劇場公開作品に「字幕版」がほ

とんどすべてに用意されているというのは、世界でも日本だけらしい。その背景には、日本語が漢字仮名交じり文なので、短い字数でより多くの情報を伝えることができるという言語的な要因と、日本人の識字率の高さ、ほとんどの人が字幕を読んで理解するのに苦労しないという社会的な要因がある。

が、最近は少し事情が変わりつつあるようだ。「字幕を読むのが面倒くさい」「早く変わり過ぎてついていけない」「漢字が読めない、分からない」といった理由で、字幕を敬遠する若い人たちが増えていると聞いて驚いている。このことは看過できない由々しい問題ではあるが、映像翻訳に限っていえば、今後吹き替えの需要が多くなることになるのだろうか。現状では、声優を使うとコスト高になる関係もあって、児童モノとかヒット作品以外の劇場映画用には余り多く吹き替え版は作られてはいないようだが。

普段何気なく観ている映画やテレビから、日本語と日本文化の特異性について改めて深く考えさせられるこのごろである。

理解が生む新世界

藤岡 豊

長く続いた残暑もようやく終わりに近づき、まもなく十月になるうとしていた。そんな時、日産自動車に勤務していた娘が、転勤の辞令を突然受けたのに驚かされた。女子社員の転勤ですら珍しいのに、新しい勤務地が国内ではなく、イギリスだったからである。

男であれば、海外への転勤は別に不思議ではない。しかし娘はまだ二十五歳の独身の女性、どうして海外勤務になったのか、わけが分からなかった。未知の国へ単身で赴任し、一体どんな仕事をするのだろう。また若い女性の身に何がふりかかるか、分かったものではない。親である私たちが心配なのは当然だ。しかし、本人は平気なものである。「行つてきまーす」の一言を残して、成田空港を悠々と飛び立つて行った。

後になって聞かされた話はこうである。日産自動車はイギリスに工場を建設し、生産を進めていた。一〇〇%

の現地法人を設立し、日本の自動車会社としては初めてのイギリス進出であった。

その社長として、当初は親会社である東京本社から役員を送り出して任に就かせていた。しかし、外国で生産販売を行うに当たっては、「現地化」を進めるのが最大の課題である。それがため、イギリス人を社長に据えるべきだとの方針が打ち出され、結局一人のイギリス人が選ばれて社長に就いた。

生産・販売は順調に進んでいた。ところが現地法人とはいえ、日本の企業であることに変わりはない。したがって日本の大使館や領事館、部品などの日本の関連会社と接触を保つ必要がある。また日本の本社からも出張者が絶えない。このため社長から、日本人の秘書が必要だ、ぜひ派遣してほしい、と要請された。私の娘は、この社長秘書の任務を負わされたのである。

それから二年ほど経った頃、イギリスへ遊びに来いという勧めが娘からあった。それも繰り返して来るので、家内とも相談し、訪れることとした。

本社・工場のあるニューカスルは、すばらしい街であ

る。社長にも会ったが、立派な経営者だとの印象を受け、安心したものである。

そして数日経った頃、友だちを混じえて食事をしたいと娘が言いだした。その友だちというのが、なんとイギリス人の青年である。会ってみると、実に明るい好青年である。食事をしながら雑談を交わしたが、イギリス人特有のユーモアのセンスに富み、また物の考え方が実にしっかりしているのに感心させられた。娘はただのボーイフレンドだと言ったが、私は雰囲気でピンときた。二人の気がぴったり合っている。つまり私どもにイギリスへ来いと勧めたのは、彼を引き合わせたかったのである。やがて年が明けると、彼と婚約したとの連絡が入る。そこでまた驚いたのは、二人で相談した結果、結婚式は日本で挙げることに決めたという。

結局、東京で式を挙げたが、イギリスからは彼の友人たちが何人もやって来て参列した。式はともかく、披露宴は日英二カ国語でやる国際色豊かなもので、司会者は大変だった。私も親の挨拶を英語でやらされた。

その後二人の子供をこしらえ、今はすばらしい家庭を

築いている。夫婦である以上、いさかいがあるのは当然だ。しかし、お互いに相手を理解し合っているからこそ、固い絆で結ばれているのだろう。

今、国際電話があると、二人の孫が電話口に出て、片言の日本語で話しかけてくる。混血児でありながら、ジイさん、バアさんが日本人であることから、慣れない日本語を使おうとする気持ち、こんなに嬉しいことはない。

ところで今この日本では、イラクへの自衛隊の派遣を巡って議論が社会混乱にまで進んでいる。石油の利権とかの経済問題も、各国の思惑にあるのかも知れない。しかしイラクの治安回復、復興に向かっては、世界各国が協力すべきであるのは言うまでもない。要はいかに民族が異なろうと、宗教が異なろうと、お互いに相手を理解しようとする努力すること、これが何よりも肝要である。

イラクの平和、復興にはかなりの時間がかかるかも知れない。しかし、世界の人々が手を差し伸べることににより、必ずや平和が実現すると期待してよいだろう。孫たちのしゃべる下手な日本語を聞きながら、これを確信するのであった。

母の介護

松浦 武弘

私の郷里は大崎上島で、広島県南部に位置する風光明媚な瀬戸内海の島である。私は高等学校に入学する直前まで島で過ごしたが、故郷を捨て大阪と京都で学生時代を過ごし、就職後も生活をしたのは大阪と東京であり海外の赴任地であった。学生時代は休暇の度に帰省し、結婚後も年に二回、お盆と正月は数日郷里で過ごししてきた。この十数年、帰郷の往来時、妻と奈良か京都で過ごすのを常としてきた。

現在八十五歳の母は郷里で一人暮らしをしていたが、一昨年の七月大腿部骨折で入院して以来、病院と島の介護施設で生活をしている。母は昼食後、庭に出て転び、四、五時間かけて自力で家に入り、救急車を呼んで救急艇で島から竹原市にある馬場病院に運ばれた。その後、私と妻は毎月一週間弱帰郷し、母親の病院や介護施設の

入退院の段取りをしている。

私の母は二十四歳で戦争未亡人となり、五歳の私と三歳の妹を、小学校の教師をしながら育ててくれた。島は小豆島との違いはあるものの、壺井栄の「二十四の瞳」の、大崎上島版である。私が大学に入り就職をしたときから、母は私が老後に島には帰ってこないものと諦めていた様子であった。七十を過ぎたころだったろうか、母は私と妹に「自分は子供と一緒に暮らすつもりはないので、動けなくなったら施設に入れてくれ」と言っていた。

新しい老人介護保険法では、母は「要支援」であり、介護施設に入所できるのは「介護Ⅰ」からであることも、私は分かっていたいなかった。入院も三カ月を超えると患者の負担は同じでも保険の負担が減額され、病院の収入が減ることも、私は知らなかった。出来る限り長い期間、馬場病院に置いてもらうことが第一義であり、島の東野町にある介護施設「みゆき」に入れてもらうためには、「介護Ⅱ」が必要条件であった。家で生活しなければな

らなくなつた場合、家の改造と道路から坂道を車で上がれる舗装工事が必須であつた。九月から十月にかけて最悪時の備えだけは終了した。

一方、インターネットで広島県下のシニア・ハウスを調べ、詳細書類を取り寄せて、猛暑の八月末に妻と一緒に広島市の北のシニア・ハウスまで出向いた。当時の母の状態では、シニア・ハウスの入所は物理的に無理ではあつたが、本人は知らない土地で生活をする考えはなく、全く私の徒勞であつた。他方、東野町の民生委員会に母の「要支援」を「介護一」に変更するよう申請して、十一月にはその認定を受けることが出来た。

馬場病院の院長に頼み込んで、昨年二月まで七カ月間おいてもらうことが出来たが、病院もたて込んできたし、母の状態も良くなつたので島の病院に移した。その後一カ月間は、島にある特別養護老人施設のショート・ステイで面倒をみてもらい、五月一日からは介護施設「みゆき」に入所している。母は四十年近く島の小学校の教師

をしていたため、病院でも介護施設でも、教え子にもその親たちにも知人が多く、家に帰りたいなどとは言わずに過ごしている。

昔は造船の街として栄えたが、現在は過疎化が進み廃屋が目立ち、若者の少ない老人の島になっている。母を見舞つて病院や介護施設を訪ねると、老人でも病人や半病人ばかりで、気が滅入るが、前向きに考えて帰省のたびに、妻と一緒に島を歩き回つて島の四季それぞれの風情を潮の香とともに吸い込んでいる。最近、南向こうの大山祇神社のある大三島やしまなみ海道で、今治にまで足を伸ばしている。

小津安二郎監督の「東京物語」に触発されて、十二月二十一日、妻とともに尾道の街をお寺に沿って歩いた。

一月八日には、小学校の四年生の時に登った、大崎上島で一番高い山、神峰山に登った。四百五十三メートルの山ではあつたが、頂上からの瀬戸内海のパノラマは私も妻も初めてであつた。

ニコラ・テスラの波紋

松谷 隆

「クロアチアの思い出」という話を二月することになった。一昨年来、ボランティア活動に参加している横浜市の港北国際交流ラウンジの「海外生活情報交流会」の活動の一部として。やっと講演資料を作成したが、どうしても外せないことがでてきた。それはニコラ・テスラである。

昨年五月、初めてナイアガラに行ったとき、アメリカ滝の公園で偶然「ニコラ・テスラ」の銅像を見つけた。クロアチアの首都ザグレブに駐在時、通信機メーカーの「ニコラ・テスラ社」を知っていたので、彼に興味を持った。彼のことを、クロアチア大使館に照会したり、インターネットでも調査した。調べれば調べるほど、ますます興味が湧いてきた。特に日本テレビが「ザ！世界仰天ニュース…エジソンの謀略」の番組でニコラ・テスラ

のことを「エジソンに勝った男」として放送したのは驚いたが、非常に勉強になった。またジャーナリストが主催する「日本・クロアチア協会」を知り、そのメンバーとの交流も続いている。カメラマン、音楽家、実業家、英語教師、プロデューサ等多士済々である。この友好協会は「市民レベル」のもので、大企業や日本政府関係者が皆無という珍しい組織である。クロアチア観光局より「クロアチアの観光写真の無償使用权及び再許諾権」を獲得し、第三者がそれらの写真を活用することを推奨している。真の友好関係は「心の交流」ができてこそ、確立できると確信している。彼らの成功を願って止まない。

ニコラ・テスラに戻ろう。彼の情報を提供してくれたクロアチア大使館の二等書記官に、拙文「知られざる偉大な科学者ニコラ・テスラ」を英文にし、贈呈した。書記官と面談の際、彼女は思わぬことを話し始めた。彼女の母親の郷里がテスラ生誕の地、クロアチアのクライナノの近辺とのこと。彼女が子供のころ、祖母が「ここはユーゴスラビアで電気が来るのが一番遅かった。地元出身

のニコラ・テスラが送電方法を発明したというのに」と言っていたのをよく覚えていると。私は思わず、噴き出しそうになった。というのも彼が多相交流モータを発明し、長距離送電を可能にしたのは十九世紀末で、当時のクロアチアにはそれを実現する術はなかったはずである。

拙文が「ナムコポーロ」に掲載されたことを友人・知人に連絡した。四年前から親交のある知人から「面白かった。しかし昔、アメリカ滝の公園に行った時、テスラの銅像は無かった」との返信があった。どうせ、見落としたか、見ても興味を持たなかったのではと、無視しようと思った。しかし、いつ、なぜ銅像が立てられたのかに興味移った。調べると、銅像がベオグラードのテスラ博物館にあると知ったが、それ以上は進まなかった。セルビア語でのテスラ博物館の説明が理解できなかったためである。そこで、テスラ小史の著者、新戸氏に伺ったら、「アメリカ建国二百年を記念し、当時のユーゴスラビア政府が寄贈したもの」との回答を頂いた。一九七

六年、私のザグレブ駐在中のことと分かった。先の知人にその旨連絡したが、返答なし。ということは、彼のナイアガラ見学時には、テスラ像はあった、これが私の結論である。

さて、先日、交流ラウンジの定例会で、講演資料を紹介しようと、駐在時の紙幣を二十五年ぶりにひっぱりだした。十ディナールと五百ディナール札である。五百ディナール札を見て、本当に驚いた。何とナイアガラと同じポーズのニコラ・テスラが印刷されていた。初めて気がついたことだ。

定例会でそれらの紙幣を見せたところ、さっそく「この人は誰か」との質問が出た。ナイアガラからザグレブ、さらに横浜にまでテスラを引きずってきたことになる。講演資料の最後に「クロアチアが世界に誇れるもの」として「ネクタイ」、「ダルマチア犬」、「ナイーブアート」を用意していたが、これに「ニコラ・テスラ」を加えることにした。より多くの人たちに彼のことを知ってもらいたいとの願いを込めて。

(平成十六年一月記)

紀年法に想う

水谷 汎

今年は企業OBペンクラブ創立十五周年に当たる。このことを私は疑わない。疑わない根拠は何かと考えてみる。

創立の年月日が今日の天文学が定めた暦の上で確認されており、今年、それと同一の暦により十五周年であることを私は認識できるが故に疑わないのである。

今さら、わかりきったことを言う必要なしと、一笑に付されることを承知の上であえて記述した。その理由は後文で判明するであろう。

歴史を記述するにあたり、その事柄が生起した年代を定めることが必須の要件である。この年代を算定する方法が紀年法である。その方法には種々あるが、私たちにとって日常的なのは干支紀年、即位紀年、元号紀年、宗教上の紀年であろう。

市販の暦書をみると、今年は甲申、皇紀二六六四年、

平成十六年、西暦二〇〇四年と併記されている。それぞれ干支法、即位法、元号法、宗教上によるものである。

さて、右の皇紀について考えてみたい。

一八七二年（明治五年）、政府は『日本書紀』を根拠にして日本独自の紀年法「皇紀」を公定し内外に宣言したのである。

この主張では、書紀の辛酉（干支）の年（西暦紀元前六六〇年）に第一代天神神武が即位し（二月十一日）この年を紀元元年と公定したのである。この主張は、この年代の日本列島の状況からみて奇怪なものである。書紀の紀年が虚構であることは、新井白石や伴信友がすでに指摘していたが、明治政府が公定した後は、この問題を公然と論議できない状況に学界は追い込まれた、そしてやがて日本の歴史研究の成果を発表する自由がなくなっていくのであった。

一九四〇年（昭和十五年）、政府の主導によって「紀元二六〇〇年記念」の式典が盛大に催された。この催事は国民を排外的愛国主義にかりたてるのに大きな効果を発揮した。国民の大多数が二六〇〇年なることを信じ込

んでいた。長年にわたる歪曲した歴史教育の所産であった。かくしてこの歴史観が日本に大災厄を招く一因となった。

戦前の「紀元節」を戦後に「建国記念の日」（二月十一日）にすりかえ、これを政府が公定したのは、一部の政治家の政治的意図をもった遠謀に因るものと私考す

る。

真正な愛国心はいかにして養成されるのか。この問題を全国民的規模で論議すべき時が到来していると思う。この論議を大々的にしないと皇紀が公定されることになるのではないかと危惧している。（二〇〇四年一月）



懇親会で乾杯の音頭をとる水谷さん
（2003年12月17日新日鐵代々木研修センター）

育苗と育兒

村 田 孝四郎

野菜を栽培していると、植物の生育についてさまざまなことを教えられる。植物の生育条件は人間の子どもの養育についても当てはまるのではないかと思う。

一般に、植物の生育に必要なものといえは、土、水、肥料、光、温度などだが、もちろん、これだけでは十分ではない。しかし、これらは子育てでいえば、家庭環境や社会環境に当たるもので、養育の必須条件といえる。まず、土壌について考えてみる。土壌はふっくらとして湿り気があり、通気性、通水性に富み、中和されたものでないといけない。そのためには、よく耕して堆肥や腐葉土を鋤き込み、石灰で酸性度を中和する。その後には、元肥として鶏糞や牛糞、油粕、化成肥料などを施してから十日間ほど寝かせる。こうしてはじめて植物の成育に必要な土壌ができあがる。

光と温度も植物の生育に欠かせない。日当たりが悪い

と生育は遅れるし、立派に育たない。高温や低温では、枯れたり凍死したりする。

さて、上記の条件が整っても生育の各段階でのきめこまかい注意と管理が必要である。

まず、たねの選択。全く同じ条件でたねを蒔いても、発芽したりしなかったり、発芽しても成長に差が出たりする。これは、たねそのものに原因がある。つまり、良いたねと悪いたねとでは初めから差が出るというわけだ。「たね屋」が存在する理由もそこにある。

たねを蒔いた時は十分に水遣りをする。これを怠ると発芽が悪くなる。たねはあまり密集して蒔いてもいけないが、あまりまばらに蒔いてもいけない。ある程度の密度でないと初期の生育が悪くなる。しかし、苗が育ってきたら間引きして間隔を空けてやる。

幼苗のうちは雨風に弱い。覆いをかぶせたり支柱を立てたりしなければならぬ。虫がついたら早めに除去してやらないと、あつという間に食べられてしまう。がちりしたよい苗を育てないと、その後の生育がおぼつかない。特に、胡瓜や茄子は素人ではいい苗が作れない。

このため、専門家の作った苗を購入して植え付ける。苗を植え付ける時も根に付いた泥を落とさないようにして、たっぷりと水遣りする。

苗の生育に合わせた追肥も必要である。肥料は多過ぎても少な過ぎてはいけない。根に直接触れないように少し離して施肥する。季節による管理も大切だ。夏の強い光を避けるためには日陰を作って遮光が必要だし、冬には覆いをかぶせて防寒が必要だ。天気次第では頻繁な水遣りが欠かせない。こうして立派な苗が育ち、後日の収穫が期待できるのである。

翻って、人間の子育てを考えてみよう。まず、愛情あふれる家庭と健全な社会がなければ、いい子は育たない。残念なことではあるが、たねの善し悪しも決定的な要件になりうる。妊婦は十分に栄養を摂り、子どもの数は複数のほうがよい。一人っ子は駄目だ。成長につれて住宅の広さも必要。食べ物にも気を付け、病気の予防も必要。幼児のうちは愛情を込めて育てる。手抜きは許されない。こうして考えてみると、母親の責任はまことに重大だ。幼児を他人に預けて外に働きに出るなど、育児放棄に等

しく、とんでもないことになる。子育てはそんなに簡単なものではない。最近の世相を見るにつけ、育児の歪みが欠陥人間を大量に作り出しているように思えてならない。女性の社会進出は子育てが終わってからでも遅くはない。何でもアメリカの真似をする、自称進歩的社会学者、似非文化人の責任は大きい。そのアメリカでは少年犯罪が増えて、母親の家庭への回帰の流れが出てきている。

政府も、ありもしない脅威を口実にして軍備に巨費を投ずるのではなく、母親が安心して子育てに専念できるように、外で働かなくても済むように、経済的支援を含めた体制作りが必要である。強大な軍事国家になっても、国民が貧乏しなければ意味がない。経済大国になっても、犯罪が横行するようでは情けない。人作りこそが国力の源泉であることを肝に銘ずるべきである。

彼のライフワーク

森田 茂

小さな本「英語笑話の外交」は彼にささやかな生きがいを与えてくれた。遅ればせながら、これは彼の最初の本で五十八歳の誕生日に出版された。ある大手の石油会社を定年退職する二年前のことだった。次作の「私生活のことわざ」はその一年後に出来上がった。この二冊がハッピーリタイアメントの想いを深めることになり、これが定年退職の心の区切りとなった。

企業OBペンクラブ入会

ちょうどその頃、大学の先輩の勧めで、企業OBペンクラブの会員になった。ペンクラブでの十年間で彼は十二冊の共同執筆に参加し、四冊は主筆として編著に携わることができた。紹介させていただくと、その本は、「60歳からの知的生活」、「60歳からの趣味達人」と

「ライフワークの見つけ方・楽しみ方」を、それぞれ日本実業出版社から、また「オーストラリアくらし入門」は大修館書店から出版された。

会社時代は報告書やレポートには精通しても、解説、随筆、小説などは簡単には書けないものだ。幸いなことに、会員には小説家、ジャーナリストや評論家たちがいるため、筆の立つ人から教えられることも多い。彼も文章の書き方についての本を読みつつ、多少は考えながら書くようになった。そして、原稿用紙の升目を埋めるためにワープロに慣れたころ、表やグラフなども必要とすることもあって、六十代後半からパソコンにも興味を持つようになった。

書いたりキーを叩いたりするには手を動かすが、何よりも頭を使う。散歩を加えれば足の運動になるから、全身を刺激することができる。中高年者の健康保持にはもってこいの条件が揃っているのではなからうか。

さらに、一年前から地元のマジッククラブで手品を楽

しんでいる。最近が高齢者の会合などで披露するようになった。トランプの身を当てたり、「無から有を生ずる」手品を得意としているようだ。観客の驚きの声やビツクリしたような表情を見ると、やっている本人が嬉しくなってくる。そのため、結構頭の刺激にもなり、老化防止に役立つのではなからうかと思っている。

ライフワークを味わう

高齢ではあっても老齡とは思われないある長老が「年齢は二割引きの時代だよ」とおっしゃる。七十歳の人は一割引くと、五十六歳で「抵抗の年代」ということになる。定年退職した後が自分の本当の人生になりうる。彼はそれを学んだような気がする。彼の年齢も七十代に入ったが、大学生の孫から「あまり無理しないでね」の言葉に、微笑みながらも、これからが本番みたいな意地もまだ消えてないようである。

彼は、ある大学の客員研究員となり、四十年近く携

わったエネルギーの研究を続けているが、情報のアンテナは常に感度を保ちたいと願っている。最近、母校(大学)の百周年記念講座で「エネルギーアナリストとして生きる」という講演をする機会にも恵まれた。

高齢者でもその気さえあれば自分なりのライフワークはもてる。高齢化社会では、中高年の人々に生きがいを与えるライフワークが大切であり、それが社会に新しい文化と活力を生み出すことになるだろう。些細なことでも、自分が楽しければ、明るい生活につながるしていく。他人に話すほどの内容はなくても、自分に満足感があれば、それは生きがいを与えてくれる。小さいことでも、人のためになれば、それはすがすがしい気持ちになれる。いろいろと迷った末にたどり着いたライフワークは、生まれ変わったような再生的価値を味わせてくれるに違いない。

恐縮ながら、実は、ここでの彼とは私です。

中国、二〇〇三年

吉 寄 清 己

親は子のために、子はまた親を思い、ご恩に報いる。

家族は互いにいたわり、豊かになろうと一生懸命だ。これは、北京・甘肅・陝西を訪ね、現地の人々と話し合った私の印象である。

人民大学の学生は、日本の大学に一年間留学した。しかし、何の役にも立たなかったと言う。彼女は日語科の三年生、昨年、姉妹校の同志社大学に交換留学した。ところが学園はさながら遊園地、日本の学生たちは遊びばかりしていたと嘆く。

彼女の学費は年間四千八百元、北京の生活費は五千元が必要である（一元は約十四円）。お金は黒龍江省に住む父からの送金に頼っている。父の月給は千元というから、月給は娘の教育費にとんでしまう。父母は母の収入でつましく暮らしている。彼女は両親を楽にさせたいと、卒業後の就職に頭を痛めている。彼女は共産黨員、

国有企業の就職に有利に働くが、低賃金の国有の観光業や教師になりたくない。目標は月給三千元以上の日系企業である。しかし、言葉だけで、外に専門知識を持たない彼女は、日系への就職は容易でないと気付き、資格をとる勉強を始めた。

Yさんは甘肅省・蘭州理工大学の日語の先生である。三週間私の通訳をしてくれた。日本語は訛りがなく上手である。彼女は二十五歳の独身。先生になって三年目であるが、月給は千五百元。この地方では高給取りである。

Yさんは、青海省の回族の出身である。少数民族の回族は一人っ子政策が適用されず弟がいる。両親は二人の子供の教育に、自身の生活を犠牲にした。自動車修理工の父の月給は五百元、食べる物は穀物だけであった。父は五十一歳の若さであるが、糖尿病がひどくなり、視力が低下、痩せてきた。回族には医療保険制度がない。病院代は高くつくので、父は医者に見てもらったことがないと言う。Yさんは給料の半分を父に送金している。

八十二歳で亡くなったYさんの祖父は、回族の漢民族に対する恨みを常々語っていたそうだ。回族の土地はも

とは現在の回族自治区の二倍の広さであった。漢民族との争いで土地と大量の羊を失った。Yさんは西安外大を卒業したとき、もっと待遇のよい沿岸部の外資企業に就職できたが、祖父の願いを入れ、あえて回族の土地に近い蘭州に職を求めた。

蘭州市に本社がある西北化工公司の高級エンジニアRさんは四十四歳。研究所の管理者である。部下のエンジニアたちは沿岸部の私企業から引き抜きの声がかかる。西北化工の給料千元に対して、五千元を支払うというから行けるものは行ってしまう。六十人いたエンジニアは二十人に減った。Rさんの娘は来年大学に入学する。寄宿舎の費用と学費は年間一万元以上である。彼の月給は千二百元であるから娘の学費で手一杯である。月給五千元の沿岸部に転職すべきか迷うところだ。両親は西北化工から年金を受け取るOBだから余計に迷っている。

あるエンジニアは言う。五千元の沿岸部に移れば仕事は多く、朝から晩まで働かねばならない。国有の西北化工にいたらお茶を飲むだけでも千元はもらえる。どちらをとるかは各人それぞれだ。このような国有企業のものんびり

とした雰囲気の中かで、私は技術顧問をしている。私と共同研究をする相棒は、女性エンジニアを長とする二グループである。彼女らは転職する気がない。私らの仕事のねらいは中国特許の申請である。

日本の土建屋に二年間研修に行ったが、日本語はあまり上手でない地方政府のWさん。SARSの影響で、日本から観光団が来ず、旅行シーズン中であるが、千百キロ先の出稼ぎ地・敦煌から蘭州の家族のもとに帰ってきた。旅遊局の案内者はどちらも日本びいきである。しかし、公司の管理職たちと会食すると、自衛隊の海外派遣、靖国神社参拝などに関連して、日本の軍事復活を懸念し、気持ちよく思わない声も聞かれる。

このごろの日本の家族はおかしいぞ。子を殺す親、親を刺す子供まで出てきた。みな自己虫だ。中国西北部のように、貧しくても自己虫がいけない方が良い。

歴史は繰り返さないで

石川 正 達

NHKのスタジオパークで映画監督・大林宣彦さんが「故郷を描き続けて」という題で尾道のことを語っていた。わたしも幼時、尾道で育った。千光寺の幼稚園に通っていたころを思い出す。

街の東にある浄土寺近くの自宅から二キロ余りをひたひた歩いて三年間通った。いろんな道を通っての帰りが楽しい。大林監督の作品「転校生」の重要な場面に、神社の急な石段を二人が縫れて転げ落ちるシーンがある。あの天神さんの石段を何回も登り降りしたものだ。

映画館の前に飾られた尾上松之助や阪妻が大見得を切っているスチールに足を止め、時にはスリと館内に入っ、弁士の名調子に耳を傾けながらチャンバラ映画に見入ったこともある。取りわけ千光寺や浄土寺の丘から眺めた瀬戸内海、尾道水道ののどかな風景は今も脳裏にしっかりと刻まれている。

行き交うばんばん蒸気の吐き出す煙の輪。向島ドックに入った大きな汽船、修理の鉋を打つ響き、バーナーの炎の色、日の暮れるまで見つめていた。日本中がまだ静かだった一九二七年、昭和二年のことである。

この年の五月、蒋介石軍の北伐に対して在留日本人の生命、財産を守るためと称して中国・山東半島へ一個師団を派兵した「山東出兵」がある。このころから日本は利権を求めて戦争の道へのめり込んでいった。そして敗戦。幼稚園で遊んだ友のうちには、戦いの野に散っていったものもあつたろう。上野には浮浪児があふれた。いまアフガニスタン、イラクで地雷や米軍のクラスター爆弾で手足をもぎ取られた子供たちの映像をみる。幼稚園に通う年ごろの子もいるのだ。

「歴史は繰り返す」という。ギリシャの歴史家ツキジデスの述べたこの言葉を思い出す機会が多い。

学生時代、「大東亜共栄圏」なる言葉が躍った。欧米列強の植民地と化したアジアを解放、日本を指導者として共存共栄を図ろうという。太平洋戦争の理念ともなっ

たこの考えは、近衛文麿首相のブレインとなっていた三木清あたりの入れ知恵と言われた。わたしが京大に入ったところマルクス主義経済から転向の教授陣から大東亜共栄圏経済を説かれた記憶がある。物資の乏しい日本を救う道として、この考えに若者は惹かれた。しかし戦い敗れて考えれば、思いうがりのいいところであつた。

いまイラク戦争を巡って、米ブッシュ大統領が中東全域を、いや世界全域をアメリカの影響下に置こうとする気配が感じられる。グローバリズム実現へアメリカ国民の多くは拍手喝采している。あの「大東亜共栄圏」と同じような思いうがった考えではなからうか。

十字軍気取りで兵を進めた。十一世紀から十三世紀にかけて続いた十字軍の遠征は結局のところ敗北に終わっている。イラクを占領して「自由、民主」の国を造ろうという。かつて単一民族の日本ではマッカーサーの占領政策がうまく運んだとしても、反米意識の強いイスラムのイラクでは簡単には成功しないだろう。早期の撤退を考えた方がいい。

北朝鮮関係でも、この諺を思い出す。「將軍さま」が

天下を握っている。「將軍さま」は神さま扱いである。昔、修身で天皇を「現つ神」と教わり、そう信じた子もたくさんいた。軍隊は天皇の軍隊であり「畏くも陛下より賜わった三八式歩兵銃」を持たされる。そんな軍閥に支配された政治を打破しようとする運動は弾圧された。北朝鮮でも、反政府的な運動が実を結ぶ可能性はきわめて低いことだろう。

拉致家族の北朝鮮に残した家族の呼び寄せ交渉がうまく進まない。実現を図るには経済制裁を実行すべきだという意見も強い。だが、思いついてほしい。日本がアメリカに宣戦布告したのも、アメリカの日米通商航海条約破棄、在米日本資産の凍結、対日石油禁輸などの経済制裁が引き金の一つとなっていたのだ。

わが家の隣に幼稚園がある。幼児たちは母に連れられて、また送迎バスでやってくる。壁越しに幼い歌声や笑い声、また泣き声も聞こえてくる。この子たちが戦いのない世界に育っていくことを願っている。醜い歴史は繰り返してほしくない。

(了)

不可解な安全確認

小島 博志

越後一宮・弥彦神社の初参りを終えた客を乗せ、ＪＲ弥彦線の電車が燕三条駅に着いた。新幹線への乗り換え客が降りて行つて間もなく「お急ぎのところご迷惑をお掛けしますが、ただいま線路内に人が入ったとの情報があります。安全確認作業が終わるまで、しばらくお待ち願います」との車内アナウンス。

雪国とはいえ越後平野一面に雪は見えず、冬の陽光が降り注ぐ元日の昼下がり。振舞い酒か、高軒のおじさん、晴れ着姿のお嬢さん、おしゃべりに余念のないカップル、まだ二、三十人が発車を待つのかな車内だった。

「元日は一万円でＪＲ東日本管内、乗り放題」のトクトク切符に釣られて朝早めに東京を発ち、初参りを済ませた私も、この電車に乗り合わせていた。ハクチョウの飛来で名高い瓢湖まで足をのばすためだ。弥彦村から瓢湖のある水原町まで約五十二キロ、さほど遠くはないが、

土地勘もなく、ローカル線ダイヤの待ち時間を考えて綿密な日程を組んでいた。

燕三条からは二つ先の終着駅・東三条で信越本線に乗り換え、新津からは羽越本線で水原まで行くのだが、一本乗り遅れると一時間も待たされることがある。あと二つ四・五キロ、七分なのにと、正月からの不運を嘆いた。時は刻々と過ぎていくが、なんのアナウンスもない。運転台にたずねても、ホームに降りて駅員に聞いても「ただいま確認作業中です。しばらくお待ちください」の一点張り。乗客のイライラが次第に高まっていく。

一直線に延びる単線の線路はかなり先まで見通しがきいた。突然、線路中央を堂々と歩いていく男の後ろ姿が目にとまった。「あつ、大変、闖入者だ」と思ったが、制服姿。安全確認の作業員だった。この調子では何時になったら運転が再開されるのやら？ 思い余って駅員にたずねると、「向こうの駅員も点検しながら、こちらに向かっています」という。両者が落ち合えば安全確認ということかと、その場合は合点した。

ローカル線とはいえ、のんびりムードの確認作業に痺

れを切らしたご婦人が若い車掌に怒りをぶつつけた。

「東三条で信越線に乗り換える方もいるのよ。早く代替輸送のタクシーでも出してよ。あなたではだめ。駅長さんに言って頂戴」

「わかりました」と、平身低頭。やがて戻ってきたものの「残念ですが……。すみません」の連発。

いつの間にか線路の制服姿は二人になっていた。出会ったのであろう。とぼとぼと、こちらに向かって歩いてくる。すでに安全は確認されているはずなのに、なんのアナウンスもない。出会った時点で、携帯電話で連絡をとっておれば、待ち時間は半減したのに、電車が動いたのは小一時間も経って二人がこちらに到着してからだった。発車アナウンスも「大変お待たせしました。安全が確認されましたので発車します」というだけ。何の人も物も発見できなかったのか、乗客に説明はなし。

もう三十年も前になろうか、北海道の根釧原野を走っていた電車が突然「キィッ」という金切り声をあげて急停車した。夏の昼下がり線路上で昼寝を決め込んでいた黒牛がすごすごと隣の牧場に引き揚げて行った。なんと

も微笑ましい風景をいまでも思い出す。牛歩にも劣る今度の安全確認作業。お陰で私は東三条、新津両駅でそれぞれ一本ずつ列車を遅らせ水原駅に着いたのは午後三時半を回っていた。五十二キロ移動するのに三時間二十分かったことになる。

瓢湖は町の東端にある。歩いていては日が暮れると、タクシーを走らせた。瓢湖といっても湖ではなく、農業用水のため江戸時代につくられた周囲十二キロの人造湖。ハクチョウの飛来は一九五〇年に始まり、吉川重三郎翁の餌付けが成功して毎年、大群が渡ってくるようになった（五四年三月、天然記念物に指定）。

この日は五千羽のオオハクチョウ、コハクチョウ、コブハクチョウがコガモ、カルガモなどと入り混じって湖面を埋めていた。昼間は餌を求めて付近のたんぼに出稼ぎしているハクチョウも、夕暮れが追ると、十数羽が編隊を組んで次々に帰って来た。夕空を雁行するハクチョウの編隊、いつしか忘れていた故郷の空に何年ぶりかで思いをはせた。

ペン俳句のこの一年 これよりの一年について

平間 真木子

イラクの地に戦火が起こり、世界中がテロの恐怖に脅える日々となつてしまった。自衛隊派遣に揺れる人々の心、俳句作者にとつても思いは同じである。短歌とは根本的に違うとはいえ、避けて通れない気持ちを俳句の上に如何に表現するかということは、まことに難しい問題である。古くて新しい「花鳥諷詠」「客観写生」を主体に今日只今の生々とした俳句を作つてゆきたい。幸い、新しい方の参加もあり、これよりの一年に託す期待は大きい。また、年末の「浅草・羽子板市めぐり」吟行句会は快晴に恵まれ、江戸開府四百年の賑わいの中に楽しいものであつた。

初春の笑みを浮かべて福祿寿
春日満つ若者の街原宿に
風薫る千夜一夜の国思ひ

石川 正達

年の港

平間真木子

万象の音聴く年の港かな
大川や路加病院の師走の灯
暖炉燃ゆる音してロシアレストラ
肉皿にナイフの音の冬ぬくし
馬刺屋の灯や冬霧の濃くなりぬ
イラク派遣決まりぬ雪の富士仰ぐ
地球儀を回しイラクの冬いかに

「千夜一夜」アラビアンナイトの物語はなんとなく親しみのあるもの。イスラム文化の集大成である。「国」とは特定の国ではないが何故かイラクを想像

夏行くや砂に埋もれし貝を踏み
敗戦のその夜蛍の飛びゐたる

する。新聞記者であつた正達さんの句として面白い。「砂に埋れた貝」「敗戦の夜の蛍」大人のロマンが感じられる。

屈託の思ひを払ふ新茶かな

大泉 子泉

負け試合なりし大きく虹かかり

旧友と海の記念日の海へ

花時計カンナの黄色あざやかに

グラウンド開きとなりぬ文化の日

都合でしばらく中断されていたが、このほど俳句会に熱心にその歩を進められるようになった。ラグビーに関するお仕事とか、「負け試合」を観戦し、第三者としての目で「大きく虹かかり」と結ばれたのは結構である。「海の記念日」「文化の日」と身に引付けて作られている。

水温むゴルフクラブを磨きをり

亀井 弘次

苺食ぶ孫の手つきのおぼつかな

漁火の遠くにありぬ天の川

厄日無事キティ・ジェーンの名を憶ふ

磐梯に茱萸の熟れるし日のことを

「キティ・ジェーン」という名を覚えておられるとは楽しい。戦後間もなくの大型颱風で、被害は甚大であった。こうした過去の事実を俳句にするのは難しいもの、「名を憶ふ」というこの表現がそれを可能にしている。「茱萸」の句も往時懐古、弘次さんの若き日が彷彿する。

信長と天下語りぬ大旦

北田 純一

暴れ字の洒脱の一句梅便り
緑陰や聞くともしなしに童歌
短夜を「千と千尋」と過ごしけり
年惜しむ変わらぬものに江戸駄菓子

新年の季語はいろいろあるが「大旦（おおあした）」の語は風格・貫録がある。そこに信長を配し「天下を語りぬ」とは……。俳諧味があつて且つ純一さんらしい句。「童歌」「千と千尋」「江戸駄菓子」の句には、大人の中の童心が滲んでいて、純一さんのもう一つの面が見える。

佐渡よりの賀状に青の拉致シール

岸本 義生

自転車をバイクを倒し春疾風
口ずさむリーマルレーン終戦日
長き夜や火星に水のある話
声かけて誰も居ぬ家水引草

「拉致」の文字は新聞・テレビより消えることなく「青の拉致シール」も賀状に貼ってくるほどの関心事である。「賀状」の句として真に今日的な作。終戦日とリーマルレーンとの取合せの句にはやはり作者の年齢を感じる。それに共鳴するこちらも当然その年齢なのである。

山百合にむかし軽便電車あり

関谷 裕彦

明治大帝偲びて海の記念の日
水引草の赤きに夕日とどまれる

半年ほど前より熱心に参加されるようになった方。多方面に造詣の深く、趣味としては東京・下町の風物とか。年末の「浅草羽子板市」吟行はことに

行く年や栗ぜんざいの味の濃さ
こころ弾む羽子板市の人混みに

喜ばれ、「栗ぜんざい」を賞味された由。「栗ぜんざいの味の濃さ」とは真正直な表現で、作者の人の柄がうかがえるもの。

亡き父の好みし店や百合薫る

玉山 和夫

ひとつづつ孫の撫で行く葱坊主
農の子に嫁の来る日や馬肥ゆる
D56の煙噴き上げ夏木立
青空の映りし小川蛇渡る

北海道に生まれ育った方ということで、句会にはその色合いの濃い作品を常に拝見している。掲出句五句いずれも東京では見られない風物が見えていて楽しい。「父の好みし店」とはどんな店か分からないが、小樽か函館の小さな洒落たレストランが想像される。

春めけり直線なせるけやき道
外濠の五月の水のかがやけり
カンナ燃ゆ大きく広き葉を垂れて
菜萁囀めば少年の日へ甦へる
千万の露を踏みしめ牧の朝

中村 雅道

春の句をもって初参加された。OBペンの会としては若い方なので、活躍が期待される。俳句会としても若さの溢れる句を、ぶつけるように出されるのは大変楽しいことである。掲出句、いずれも若々しく明るい。パソコンの大家である反面の叙情に期待したい。

店頭にアジア古民具鳥曇

海の日や雲の形のすぐ変り

斑鳩へ三里の標べ胡麻の花

六本木ヒルズ厄日の空庄す

浅草に枡の豆買ふ冬ぬくし

西川 知世

昨年に引続き好調な歩みを進めておられる。思いがけない「宿痼」を身に、活動は少し制限されているようであるが、それだけに句に陰鬱が生まれたと見えよう。表現もまた抑えた感じがほどよく、句に厚みが見える「浅草」の句には明るい予感があつてうれしい。

企業OB川柳の四カ月

小林 正憲

九月に川柳の集まりを持つという話がおこり、平尾富男君が事務局を引き受け、私がにわか宗匠になって、投句による川柳会が始まりました。

川柳といっても、古川柳から狂句まで範囲が広く、その間に、パロディ川柳とかサラリーマン川柳、カミサン川柳などがあります。

我々は、元企業人が現在を詠む、「企業OB川柳」という一分野を作りたいと思っておりますが、とりあえず

は現代川柳を詠み合って腕を試しております。

その四カ月の成果を披露いたします。そして私も一句。私も含めて、特に語呂合わせや駄洒落に夢中になったときに、この傾向ががちです。読む人に分かる川柳を作ります。

詠み手だけ悦に入ると読み手いい

閏じゅん

犬よりも私を見てとお嬢さん

微酔

娘ごころとはこんなものだろう、というオジサマの推理が川柳になりました。オジサマはお嬢さんを見ていたと思います。

暗がりに何やら在わすご開帳

純一

二つの意味をもつ川柳の接点として、裏の意味がある言葉を使うことが多いようです。ご開帳。いいですねえ。

経営も政治も今は株価だけ

だし

衆議院選挙前は株価に一喜一憂していました。その株価を動かしているのも人間、面白いです。

デフレにもそろそろ飽きて九千円

やぶ睨み

前句と同じころ、日経二二五を詠んだ句で、株価に意志があるならの風刺。幸い飽きて上に行きました。

定年後なのに打たれる出る杭は

酔深

ペンクラブで打たれてる。と読み手が言いました。対人関係は死ぬまで難儀、といいながら老後を楽しむ心境ですか。

夫より妻が先ず知る社のうわさ

茂

社宅の団地での実感。情報伝達は女性の特技。社宅も減ってきましたが、今度はBBの御利益で。先を読んで、詠んでおられます。

優先席どつかと座る若年寄

孝蔵

料金は同じなのに、と若年寄は不満です。そんなこと考
えている顔はしていませんね。

ブーチンとブッシユ悩ます

こーちゃん

フ・チン・タオ

面白い試みで、この手法が現代川柳でも生きるかも知れ
ません。

ジェイアールおわびのたびに

井蛙

事故がふえ

組織での人間関係に問題があるのでは、とか言われてい
ますが、いずれにしても困った事です。

通行料退職金分安くせよ

正道

道路問題すつきりしません。子供が「通リゃんせ通リゃ
んせ 公団様の高い道」と歌っていました。

なつかしの歌はみんなを若くさせ

不言

ケアマンションで、老人会のカラオケで、の实感があり
ます。気が若いから歌うのかもしれないが。

野村嘉彦氏を偲ぶ

信念と先見性の人

大庭 定男

野村さんが亡くなられる少し前の月例会で、私は約三十年ぶりでお目にかかった。当初、随分変わられた感じであったが、話してい



野村嘉彦（のむら・よしひこ） 二〇〇三年六月十一日悪性リンパ腫のため逝去。八十四歳。福井県出身、一九四一年大阪商科大学卒。三井物産入社、神戸支店勤務、終戦後、三井物産解体後、第一通商勤務、ベトナム貿易を開拓、その後、新和物産社長、会長を経て日越貿易会、ベトナム研究所長等日越友好、貿易促進に半世紀以上を捧げた。

ると昔の温顔がよみがえってきて、思わぬ方に会えるOBペンのありがたさを感じた。

ミスター・ベトナムとでも言える野村さんがベトナムに関係された最初は昭和十七年の終わりころ、三井物産神戸支店でサイゴン米を担当されていたときであった。配給米があと一週間ぐらいしかないというとき、サイゴン米を山と積んだ船が到着、危機を回避できた。そして、一九五六年、まだ外交関

係のなかった北ベトナムミッシヨンに加わり、初めてベトナムに入り、ホンゲイ炭の買い付け交渉に当たった。その後、米国とベトナムの戦争が始まってからも、不自由と危険を冒してたびたびベトナムに渡り信頼関係を築いてきた人々との接触を続けた。

米軍の北爆が激しくなり、一九六五年、日本政府は北爆支持声明を出した。野村さんの仕事がいよいよ辛くなり、いろいろな制約や干渉

があったことは想像に難くなかったが、そのころでも「ベトナムは頑張りますよ。いずれアメリカは撤退することになるでしょう」と笑顔で答えていた。第一通商より独立する形で新和物産を設立したのもこのころである。

野村さんの予言したとおり、米国が敗北し、ベトナムに平和が甦る前から、野村さんは和平近しと判断してベトナム入りし、戦後の日越貿易再開に向けて要人たちとの話し合いを続けた。

一九七三年、日越国交樹立、その後のドイモイ政策などもあり、日越間の貿易、日本よりの投資も順調に拡大した。野村さんは日越貿易会、ベトナム研究所長などとして両国間の経済、文化交流の拡

大に努めた。ベトナムとの交流に当たっては「人と人との交流というソフトが大事」、「ベトナムとの商取引で忘れてならないのは先方の器用であまりにもマイペースな民族性」、「ベトナム戦争中の日越関係が最も悪かったときにも日越貿易を存続させたのはベトナム人の中庸の心」というようなベトナムを知り尽くした野村さんならではの教訓を日本人に残している。企業OBペンクラブの皆様と共にご冥福を祈りたい。

穏やかで優しいお人柄

榎 本 喜三郎

私の記憶にある野村さんとの付

き合いは、それほど長い年月ではない。同じ三井物産出身といっても、お互いの現役時代はもちろん、退職後の長い間も会ったこともなければ、うわさを聞いたこともなかった。知り合ったのは、彼の音頭取りで、十数人がメンバーとなつて、一週間ベトナム旅行を楽しんだ、今から七年ほど前のことである。

ベトナムは私にとって、いろいろの意味で実に深い想い出のある土地である。第一に私が三井物産に入社してまだ独身で、最初に勤務した外国である。それはさておいて、このほぼ七年前のベトナム旅行には、私の家内や姪（長姉の娘）も同伴したし、旧三井船舶の友人もこれに参加した。この折の

姪の印象によると、野村さんは実に世話好きで、親切的な、女性に優しい老人だったという。その点、私の野村さんに対する記憶もほぼ同様で、私は世話好きな野村さんのお陰で、このペンクラブのメンバーになることができたし、現在なおこうしてメンバーの席を汚している。

旅行をはじめいろいろの行事に参加すると、野村さんはいつでも、

私がグループの最年長ということで、私に遠慮してグループを代表して挨拶せよと、言われた。有難迷惑でもあった。それも野村さんに上手に、優しく勧められると、つい断わることができずに、時には酒の勢いで、とんちんかんな挨拶をしたりする醜態もあった。とにかく野村さんは穏やかな、優しいお人柄で、今も、優しい面影が髭髯と眼前に浮かんでくる。

私などはどつちかと言えば、がらっぱちで、声だけ大きく我が強くて、野村さんのように、何事も柳に風のように受け流すことは、とてもできない。彼がもつと長生きしてお付き合いをしていたなら、私も少しはこのがらっぱちを撓めることができたであろうに、と思える。今や帰らぬ昔である。



2003年2月の月例会に出席された時の野村さん

企業OBペンクラブのあゆみ

Ⅱ平成十五年（二〇〇三年）Ⅱ

年表（原則として敬称略）

一月例会（二十二日）

・入会 平尾 富男

・会員講演

阿部 洋己

「企業戦略と商品開発」

・会長新年挨拶

二月例会（二十六日）

・ゲスト講演

平川 克美氏

「インターネット社会でのシニアのプレゼンス」

・退会 石川 純 櫻井 清治

三月例会（十九日）

年史

一、役員人事（任期二年目・前年度と同じ）

会 長 北田 純一

副会長（IT担当） 多田 修

副会長 藤岡 豊

副会長（運営委員長） 都甲 昌利

理 事（事務局長） 中村 爽

理 事（運営委員長補佐） 大野 昶

理 事 金京 法一

監 事 児玉 忠雄

二、新年度の方針

・「ベストライフ」誌から依頼された長期連載企画に総力を挙げて取り組む。

・世の中に吹き始めた老人への追い風を好機ととらえ、老人文化の主役として「ペン」のあらゆるジャ

・会員講演

村田 孝四郎

「自費出版の実際」

四月例会（二十四日）

・会員講演

大庭 定男

「戦前の在英日本社会の歴史と人物像」

・退会 新井 進 アブドルカーダー・栄子

五月例会（二十一日）

・会員講演

中村 将陸

「日本の半導体産業（栄光と挫折そして展望）」

・退会 福田 平三郎 宇野 存

六月例会（十一日）

・会員講演

北田 純一

「手塚治虫と阪神間モダニズム」

ンルで思いの丈をぶつけ、文化国日本の大成に寄与する。

三、会員数

新入会員は二名、退会者は物故者を含め十四名であり、二〇〇三年末現在の会員数は七十七名となった。

四、出版・プロジェクト

（一）同人誌「悠遊」第十号が三月十九日に発行された。（編集世話人 小島博志・石川正達）

（二）来年のクラブ創立十五周年に向けて、記念出版を計画。「サラリーマン、たれば物語」（仮称）を中心に企画を進めた。（プロマネ 北田純一）

（三）電子雑誌「ベストライフ・オンライン」に「英語をどのように学んだか」、「シニアライフ」など前年に続き掲載。九月より、「エバーグリーン」として、毎回十名の会員による十篇の長期連載を継続中。（プロマネ 北田純一・松谷隆）

（四）同「ナムコボーロ」の「旅サイト・ナムコボーロ旅行体験記」に八月より会員の世界体験記を連載。続いて「旅のタブラ集」の掲載を予定している。（プロマネ 松谷隆）

・計報 野村 嘉彦氏が六月十一日逝去

七月例会（十六日）

・ゲスト講演

中川 菊司氏

「俗から見た短歌（日本詩歌の社会的背景）」

・本の紹介

三宅 劭

「ITの未来を読む365冊＋α」

八月例会（夏休み）

・退会 池松 三郎 東 与一

九月例会（十六日）

・各会員より意見の発表

・本の紹介

北田 純一

「「こんなもんじゃ」

・退会 山辺 武磨

(五) 「ベストライフ・オンライン」誌のサークルホームページに会員の投稿に加え、「俳句教室」

「OB川柳」、「サロン21」の成果を発表した。

(プロマネ 中村将陸)

(六) 月刊誌「フジ・エアウエイズガイド」の旅行記

欄に寄稿。(プロマネ 都甲昌利)

(七) 同人誌「悠遊」第十一号は二〇〇四年三月発行

予定。(編集世話人 小島博志、石川正達)

五、ミーティング・勉強会

(一) 小説研究会 (マネジャー 石川正達)

「ベストライフ」誌連載企画の検討、および前年度に翻訳、出版したビルマ戦線記「日本兵のはなし」の英国版「ビルマ・キャンペーン」の翻訳を完了。

(二) 英語を読もう会 (マネジャー 村田孝四郎)

スタートから三年目に入り今年度末までに三十三回を重ね、勉強の場として定着した。時事英語の講読を通じ、読解力向上と国際事情の理解に努めた。

(三) サロン21 (マネジャー 金京法一)

十月例会（十五日）

・会員講演

安藤 晃二

「遙かなるメキシコ」

・本の紹介

遠藤 俊也

「最澄と空海」「空の思想史」

十一月例会（十八日）

・入会 羽田 寿夫

・会員講演

平尾 富男

「巨象に立ち向かい続けた歴史」

・本の紹介

三宅 劭

「ヴェネツィア 私のシンデレラ物語」

十二月例会（十七日）

・ゲスト講演

乗竹 亮治氏、ジェフ・ハチンズ氏

本年も「日本の安全保障」、「グローバリズム」、

「イラク戦争」、「日本の株式市場」から「日本の政治経済」、「教育制度」、そして「死」まで、幅広いテーマで毎回活発な論議が交わされた。

（四） I T 勉強会（マネジャー 多田 修、杉山修一、

中村将陸）

I T 登録会員は全会員の七割を超え、メールによる電子雑誌、サークルホームページへの寄稿、会員相互の通信などが活発化している。これに対応するため、パソコン操作の基礎的勉強を続行。「画像処理」、「ショートカットキー」、「ワードページ設定」、「ファイル送受信」、「単語登録」などを研究。また、新たな試みとして「三鷹 P C 教室」を設け、実技によるブロードバンド、インターネット・サイトへのアクセスなどを体験した。

（五） 俳句教室（世話人 中村将陸）

平間真木子先生の指導のもとに会員相互の熱心な研鑽が続けられた。九月より月例の歳時記をサークルホームページに掲載。新参加者を得て、

「日米学生会議について」

・忘年パーティー

恒例の忘年パーティーを「代々木倶楽部」アゼリ

アで開催

・退会 吉井 米三郎 池田 耕治 岩瀬 昭三

斎藤 勁

いっそうの活性化が期待される。

(六) 企業OB川柳(マネジャー 小林正憲、平尾富男)

九月よりスタートした。月例会を開き、選句・句評を毎月サークルホームページに発表した。来年度に向けて発展を期待。

六、会員ニュース

・上原利夫は法学博士(一橋大学院)の学位を授与された(十四年七月)

・杉山修一は「サロン・ド・ジュディ展」に出品(一月・七月)

・中西淑郎は「なないろの展」に出品(二月)

・石井正紀の著書「陸軍燃料廠」が光人社(NF文庫)から出版された(七月)

・岩崎洋一郎は日本大学・大学院、グローバルビジネス研究科講師に就任(九月)

・関谷裕彦は日生研レポート(日本生活問題研究所)秋季号に「エーズ対サーズ」を、また井蛙道人の筆名で「現代マナー百物語」(江戸っ子憤慨録)を寄稿(十一月)

・村田孝四郎の著書「ゆっくり学ぶ英文法」(明日香出版)が「英文文法比一比」として台湾(寂天文化事業有限公司)で翻訳・出版された(七月)

七、新役員人事

十二月末で現役員の任期が終了し、来年度からの新役員が次のとおりに決定した。

会 長	北田 純一
副会長	都甲 昌利
副会長	中村 爽
副会長	金京 法一
理 事 (運営委員長)	松谷 隆
理 事 (IT担当)	中村 将陸
理 事 (事務局長)	平尾 富男
監 事	児玉 忠雄

八、まとめ

出版物の全国販売額は毎年前年割れが続く。一方で電子書籍やケータイ読書の急増がある。「活字ばなれ」とも言われるが、昨今のメールの氾濫を見ると、読者にとっては「文字」に接する機会が、むしろ増えているように思える。われわれの課題は、こ

の急速に進む文字媒体の多様化にどう対応していくかがある。今年度において、当クラブは鋭意プロジェクトの推進に当たるとともに、勉強会で熱心な活動続けた。昨年度に続き、今年は電子雑誌「ベストライフ」誌に複数の会員作品の長期連載を実現し、さらに「ナムコボーロ」誌には、会員の国際経験を生かした世界体験記を掲載し、成果を挙げた。来年度にはそのいっそうの拡大を目指す。また、当クラブの創立十五周年にあたる来年に向けて、記念出版事業の企画も動き出した。新しい道を求めて若返りした新理事体制のもとで、来る年の発展が期待される。

執筆者名簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)		出 身 会 社	生 年
芦刈 克	あしかり まさる	住友生命 ニッコン	1931
安藤 晃二	あんどう てるつぐ	三菱商事	1940
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞社	1921
今川 確郎	いまがわ かくろう	兼松	1926
今村 亮	いまむら りょう	京セラインターナショナル	1931
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
上原 利夫	うえはら としお	住友商事	1934
榎本喜三郎	えのもと きさぶろう	三井物産 三井船舶	1914
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅	1924
大泉 潤	おおいずみ じゅん	三菱化学	1936
大島 義	おおしま みよし	エヌ・イーケムキャット	1931
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
大野 暁	おおの ただし	三井物産	1933
大庭 定男	おおば さだお	三井物産	1922
岡 政昭	おか まさあき	東京銀行 N B D	1926
折戸 常司	おりと じょうじ	三井物産	1925
亀井 弘次	かめい こうじ	キリンビール	1928
岸本 義生	きしもと よしお	兼松	1927
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事	1928
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事 三菱総研	1933
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日鉄	1927
小島 博志	こじま ひろし	毎日新聞社	1931
許斐 義信	このみ よしのぶ	三菱商事	1944
小林 正憲	こばやし まさのり	大和毛織 国際工機	1030
荘司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業	1932
杉浦 右藏	すぎうら ゆうぞう	N T T 三菱電線工業	1932
杉山 修一	すぎやま しゅういち	東芝	1930
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ロイヤル・トロイト・ラインズ	1932
高橋 孝蔵	たかはし こうぞう	丸紅 松竹	1936
多田 修	ただ おさむ	横河電機	1929
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省 日英協会	1919
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空	1933
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業	1929

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社	生 年
中洲 靖雄	三菱レイヨン	1927
中村 爽	日本工営	1933
中村 将陸	富士通	1936
新山章一郎	在日米軍海軍基地統合人事	1930
西川 武彦	日本航空	1937
野瀬 隆平	石川島播磨重工業	1938
羽田 寿夫	三菱重工 YKF動力環境技術研	1940
平尾 富男	キヤノン	1942
平間真木子	日本機械輸入協会	1925
藤岡 豊	三菱商事	1932
古川さちお(幸雄)	石川島播磨	1932
松浦 武弘	伊藤忠商事	1939
松谷 隆	富士通	1940
水谷 汎	満鉄 友愛信用組合	1917
村田孝四郎	新日鉄	1934
森田 茂	出光興産	1930
八木 大介	三菱商事	1926
(木本平八郎)		
吉寄 清巳	関西ペイント	1925
山内めぐみ	企業OBペンクラブ事務局	1955

今冬の東京都心部では、最低気温が氷点下を記録した「冬日」がなかったといえます。そういえば、元日に新幹線で長いトンネルを抜けたとき、越後平野に積雪はなく、雪国はどこ？とがっかりしました。また、なまはげの里、男鹿半島も雪のない正月をむかえたのは何年ぶりとか。昨年の冷夏といい、暖冬といい、どこか狂っています。人間の仕業の報いでしょうか。

企業OBペンクラブが創立十五周年を迎えるというので記念座談会を企画しました。会員の出入りが激しいクラブだけに、会員歴の浅い者にとって先輩たちのご苦労はよい刺激となりました。パブルの余波に助けられたとはいえ、よくも立て続けに出版できたものですね。

十一号には、ペンクラブに対する会員の思いを綴ったエッセイ二編を含め計四十五編の寄稿がありました。また今号から新しく川柳も加わりました。うれしいことです。

編集世話人

小島博志

石川正達

事務局から

山内 めぐみ

十五周年おめでとうございます。私の事務局の仕事はまだ二周年です。少しずつ会員の皆さまのお名前とお顔が一致するようになってきました。また昨年の会長選挙関連の事務を終えて、前任の西川知世さまからの引き継ぎ事項を、ひととおり経験いたしました。

昨年は事務局長の中村爽さまが入院・療養のために半年間お休みになったのが私にとっては大きな出来ごとでした。頼りない私に、事務局長代行を務められた多田修さまにも、随分ご迷惑をおかけしたと思います。理事会と月例会の日程が短期間のことが多かったため、会報を出すのがたいへんで、多田さまと電話で色々ご相談しながら過ごしたことを思い出します。

ことしは事務局長に平尾富男さまが就かれ、新しい事務局となっていくと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。